525
3/5
はこの集合論
投

ト24T-11

帝國圖書館藏

宿命論者のことば

沖野岩三郎著

福永書店版

大正
15. 12. 24
内交

525-3/5

目次

自然に對して……五
エスカトロヂイ……一一
戀愛の來る時……一六
犬のはなし……三一
宗教の雰圍氣へ……四八
女心のさま〴〵……五九
途窮つて……七一
米を食ふ我等……七八
時代を流るゝ二潮流……八〇
外出……九三

其夜の話……九六
不思議なる事實……一〇六
一宗教家の生活心理……一一三
年頃……一一三
國民性の進化……一二八
屍骸から產れた二人……一二一
生きんが爲に……一二四
二期の外來思想……一一七
罰金……一〇一
內村鑑三氏の閃影……一〇八
誰をか怨みん……一二二
基督教思想と日本の文學……一二四
萬年筆と原稿紙の生れた話……一二四
出草馘首……一二二
日本に於る世會的會合……一二〇
迫害史餘筆……一〇三

自然に對して

私は紀州の山奥で、憶出の深い幼少年時代を過した。東には遙か十二三町隔てた山懐にたつた二軒の家が見えるばかり、西も南も北も高い低い山々が重なり合つて、其間をS字形に細い溪流が蜒々と流れてゐる。

五町ばかり離れた山裾の、棕櫚畑と樫林の間に里道が半町ばかり見える。其の里道を里から里へ通ふ村人の白い手拭が時々見える。若衆の聲張り上げて歌つて行く鄙歌が聞える。夫れも一日に二三回か精々五六回である。

家の向ふにある小山の中腹を、灌漑用の小溝が流れてゐる。夏の頃は鍬を擔いだ男が、時々水の見廻りに來る。秋の暮には子供が時々溝の上にある栗の樹を搖ぶりに來る。

川添ひの竹藪が、風に動かされて懶さうに點頭いてゐるのが緣側から見える。魚釣りに來た

閑人の釣竿の尖が靜に動く。筏乘りの水馴棹の端が白く走つて行くので、筏の流れてゐる事が解る。

二日に一度か十日に二回位、物賣りが來たり村の人達が訪ねて來る。一挺一錢の安墨や釣針を賣りに來る髯武者の浪人は、品物を買はなければ、『どうぞお手のうちを。』と云つて一握りの米を貰つて行く。一年に一度、越中富山の藥屋が置藥を取換へに來て、木版三度刷の芝居繪を置いて行く。正月には荒神拂ひが來て、六根淸淨を唱へて、米を一合貰つて行く。半乞食の祭文語りやチョンガレが、稀に門口で岩見重太郎や宮本武藏を唸る。

一年に一回か三年に二回、淡路から人形芝居の一座が來る。藝題は一ノ谷ふたば軍記熊谷敦盛の組打。鷺勝五郎。三勝半七。玉藻前三段目。いがみの權太といふやうなものにきまつて居る。秋祭りは何百年の昔から相も變らぬ、單純なヒュー〳〵ドン〳〵で、村人が總出で幟を擔いだり獅子頭を舞したりする。

人間と人間との交渉は、これ位でまだ少しく誇張し過ぎてゐる位である。

こんな淋しい寂しい所で生立つた私は、其の幼年時代をどうして過したであらう。其の追憶

には懷かしい、可愛い數限りのない物語の種がある。

家內がみんな野仕事に出てしまつた後には、一疋の牛と一番の鷄との外に遊びづれの無い私は、やむを得ず此の山深い周圍の自然と交渉を開始する。斗量箒掃といふ言葉其のまゝに、山の頂からころ〳〵と轉げ落ちて來る樫や柞の實は、幼い私に對してどんなに豐富な自然の贈物だつたであらう。大きな栗の枝には今まで嚴格だつたいがの中からおはぐろをつけたやうに赭黑い實が笑を見せてゐる。それを見た私は、

『栗が嫁入つた、嫁入つた。』と言つて、丁度親類の娘が良緣に有りついたのを祝ふやうに嬉しがる。大きな廣い葉を悲しさうに投げる朴の樹の下をパサリ〳〵と踏んで通れば、落葉の間から玄圃の梨が私の手を待つてゐる。高い〳〵山柿の、花も及ばぬ程綺麗に無數の實を結んだのが、青葉の中に現はれて來る。

都の人達が春の一時だけ綠の色を賞める時、田舍に住む人達の眼には春夏秋冬美しい〳〵青葉を見る。

綠に包まれて年が年中暮してゐる山の人達には、もう綠の存在を忘られてゐる。處が春の最

中に美しい山櫻がちらほらと咲き初める。晩春には紅い石楠花が綻び初める。つゝぢが笑ひ初める。さうして春の中頃から夏の初へかけて、山が綠であるといふ事を知る。花は美しい、しかし其の若葉の美しさは、此の點綴した花の飾りによつて、どれだけ其の美しさを添へるかしれない。

全山の綠葉、青々とした田の面、どこまでも生え擴がるべく生の勢に燃えてゐる野の草、田舍の總てが綠の中に埋まつた夏、彼等が粗食して尙且つ健康を保たれ、過激な勞働をして尙且つ長壽の出來る原因は、山中の夏を知らなければ解らない。

柞や櫸が黃葉する。楓が朱のやうに紅くなる。柿の實が夕陽に照り映え初める。其時、常盤樹の綠が際立つて眼に立つ。

眞白い雪が山も野も總てを綿で包んでしまふ。此時降り頻る雪と猛烈に戰ふものは常盤木である。彼等は絕えず頭をふり枝を動かして雪を追はらふ。そして一軒家の中に炬燵を抱へてゐる人達の夢を時々驚かす程、雪は樹の枝を離れて、タ、タ、タ、と諦めたやうな音を立て乍ら川べりまで逃げる。一夜の中に總てを征服したと思ふ雪も朝日が峰の上に輝き初めた時、勇敢

に其の腕を示し頭を擡げてゐるのは樫や松や杉の常盤木である。白い中に眞の綠を見るのは此時である。

斯うした豐富な自然の景趣の中で育つた私は、貧弱な僅少の人間達との交渉よりも、何十倍何百倍の深い交りを自然と共に結んだのである。

幼い私の頭には、雲も山も川も木も草も、小鳥も昆虫も、みんな夫れは人格的な親しい友達であつた。私は山と語り川と戯れたのである。

私が小學に通ひ初めて間も無い頃であつた。善兵衞祖父さんと、親類の庄兵衞爺さんとが、蚊遣火を間にして、四方山の話をしてゐるのを聞きながら、向ふ山の頂を眺めてゐる時、私は始めて大きな怪異に驚かされたのであつた。

それは夏の夕方であつた。私の祖父は緣側で蚊遣を焚きつゝ澁團扇を使つてゐた。其所へ親類の庄兵衞といふ老人が來て猪狩の話をし初めたが、私は其傍に座つて向ふ山の嶺に聳えてゐる松や檜の枝ぶりをぢつと見詰めて居るうちに、中央の一番小い松が大きな人間の頭のやうに

見えて來た。

凹んだ眼の下に高い鼻がグーッと左の方へ突出して居る。其下にあんぐりと開いた大きな口があつて、其の開けッ放しな口から、白い雲や黑い雲が、後へ〳〵と引切りなしに出て來る。雲が出なくなつたと思ふと、どうーッと谷底から唸るやうな大きな響がして、山全體が身ぶるひでもしたやうに、木の葉がざわ〳〵と音を立てる。

私は身慄ひしつゝ不圖横の方を見ると、大きな口を開けた松の右には、途法もない巨人が片腕を伸して、雲を吐く小い松を嘲むやうに指してゐた。峯には小坊主が十も十五も、みんな其の巨人の勢に怖ぢ恐れたやうに體を竦めて蹲んでゐた。

私は恐ろしい物見たさに、眼を睜つて其の不思議な巨人を見てゐるうちに、不圖其の前の年の秋、笹溝といふ十四五町も隔れた所の家から、夜中頃に、わあーッ！　わあーッ！　といふ叫び聲がした事を想ひ出した。

『お熊の叔母、去年の大風の時に、笹溝で大きな聲でひしつたのは何ぢやつたんなら？』

私は丁度臺所から出て來たお熊の袖に縋るやうにして訊いた。

『うん、あれは勘助さんが風の神を追うたんぢやよ。』

『風の神を追うたんぢや？　なぜ？』

『二百十日には風の神が荒れこつんぢや。其時大峯山詣りに突いた金剛杖を戸の所へ立てゝ置きやア、風の神が戸を得吹き飛ばさんのぢやが、時としたら風の神は金剛杖があつてもそこへ吹いて來る。さうすると大きな聲で風の神を追飛ばすんぢや。けえど、ひしつて追ひ初めたら風に負けんやうにせにやならん。風の神が逃げるまでひしるんぢや。』

『笹溝の勘助さんは、風の神に勝つたんかい？』

『うん、勝つたんぢや。翌る朝見たら、表の柿の木の葉が一枚も殘らず落ちとつたさうな。よつぽど風の神も吹きまくつたもんぢや。』

話してゐるうちに空は一面に黑くなつて、腕を伸した巨人も、ひれふして居た小坊主も、雲を吐いてゐた大きな口も、みんな影も形もなく闇に包まれてしまつた。

其晩に私は、お花からいろんな恐ろしい氣味の惡い話を聞かされた。山には『カシヤン坊』といふ考がゐて、淺葱の着物を着てゐるとか、野槌といふ蛇が居て山の上から轉がつて來て人

を呑むとか、五つ六つの話を聞いたが、其中で一番氣味の惡かつたのは蛇の話であつた。

此頃から私と自然との間には、從來の親しみが薄らぎ初めて其間には種々の恐怖と戰慄と暗闇とが挾まれて來た。自然は度々私を威嚇した。私は自然に對して時々畏怖の念を懷くやうになつた。

高い峰がある、其所には鼻の高い天狗がゐる。深い潭がある、其所には河童が棲んでゐる。大きな杜がある、其所には妖怪が隱れてゐる。花の咲く所に不思議な祕密があり、楓の紅く燃える所に怪談奇說がある。

こんな恐怖時代を通過して、私の眼前に生きて來た自然は、更に多辯に最も雄辯に、いろんな事を語つた。私には耳を掩ふ事の出來ない誘惑があつて、恐れつゝも夫れらの傳說に耳を傾けた。夫れには恐ろしい乍ら美しい物語もあつた。マクベス劇のビルナムの森が、ダンシネーンまで動いたやうに、總ての周圍の山や川は、私の心には動き、走り、叫び、戲れた。

此頃私は蓆旗を押立てゝ急激に進軍する猛雨を見た。人生の悲運を嘆いてゐる妖星の光りを

見た。偉大な神祕を語つてゐる森を見、潭を見た。總てのものが人格化して、私の前に現はれて來た。そして私には依然として人間との交渉は稀薄であつた。

斯うした自然兒が社會へ這ひ出した時、不思議にも私の前途には幾多の盤根錯節があつた。飛び越え難い深い溝があつた。踏み入れた足をどうともする事の出來ない沼田があつた。薊と荊蕀とは刺を揮つて私を迎へた。

私の前に現はれた男も女も年寄も子供も、夫れは私を哺み育てた故鄉の山川草木風雲と同じものであつた。或者は私を愛し慰めた。或者は私をひどく威嚇した。或者は私の心を暗い溪底に導いた。

私は又幼い頃、故鄉の自然から與へられたと同樣の喜怒哀樂を周圍の人達から與へられた。さうして十年二十年の長い社會生活が續いた時、私の前に現はれる人達が悉く自然其ものゝやうに見えて來た。

石井柏亭氏が私の小說『宿命』を讀んで、『今少しく自然の敍景が欲しいものだ。』と言はれ

た。私は其時斯う答へた。

『紀州の山奥で幼少年時代を過し、熊野の海岸で壯年時代を過した私には、山川草木といふやうな物には眼も耳も慣れてしまつた。その代り、今私の前に現はれる人物、たとひ夫れが大臣であらうと、乞食であらうと、女であらうと、子供であらうと、私に異常な驚異を與へずには置かない。私の心は今宇宙自然といふやうな物を人間に觀つゝある。』

石井氏は微笑したまゝ何とも答へられなかつた。

實際此の十年來の私には、所謂自然といふものから受ける感銘が非常に尠くなつた。けれども私は人間と接する時、其の相手の人の心を忖度し其の人の精神狀態を考察して、自分勝手な觀察をして非常に面白くも思ひィヤにも感じる。

私は或新聞に人物評を書いた時、友人N氏を評して、『彼はポプラアの如し、人其の徒らに丈の高きを知るのみにて其の用法を知らず。』と言つた。

私は今でもポプラアを見る時、度々其の言葉を想ひ出す。ポプラアは確かに私の眼を喜ばす性質がある。そしていつもさわめいてゐる。N氏が輕いユーマアを語り出す時、ポプラアの青、

葉が風に吹動かされてゐるやうに感じる。斯ういふ人と相對してゐる時、私は自身を小い低い樫の木のやうに思ふ。

私の前には數多くの人々が現はれる。或人は岩石のやうである。或人は深山の栂のやうである。或人は溢れる河水のやうである。或人は垣根の紫陽花のやうである。或人は涸れさうな谷のやうである。靜を欲して靜を得ない風に弄ばれる樹のやうな人もあり、長い間朽ちた藁蓆の下に抑へられてゐた白い芽のやうな痛ましい人もある。菊目石のやうなガサ〳〵した人もある暴風のやうな人もある。雨垂落の滴のやうな人もある。風に吹靡かされてゐる薄のやうな人もある。

勞働運動とかメーデーとかいふ言葉を耳にする度、私の眼底には幼時向山の萱野を、急激に過去つた夕立の蓆旗が泛んで來る。

群衆といふ事を思ふ度に、少年時代に數へて數へ切れなかつた、ムラマサ雲の白い鱗を想ひ出す。暫く會はなかつた人に會つた時、遠隔の地から變つた音信を貰つた時、生老病死の消息を得た時、私の心には直ぐ故郷の山川が見えて來る。

花の盛りの若い山、青葉の壯年の山、物淋しい中年の秋の山、枯枝に雪を載せる冬の山、氾濫の水を盛る豪壯な川、川底の石も背を曝す冬の溪流、いろんな自然の變化を聯想して私の諦めもつき、喜びも溢れる。

私は嘗て鹿子木員信兄や加藤ドクトルと一緒に那智の明法山に登つた。其時私の眼に映じた熊野の山々は王者の前に跪拜する群臣のやうな山々峰々であつた。私はそれを觀た時、其山々の容姿から非常に大きな暗示を得た。

仰いで見れば高い。しかし俯して見れば一樣に平凡な小丘だといふ事は、私の對人觀察に非常に有益なものを與へてくれた。

夫から或年の夏、私は那智の瀧から遙か上に聳えてゐる峰に登つた。暗い鬱陶しい樹々の間を分け登る時は、頭を仰へられるやうなイヤな感じを抱いた。けれども高い平な所に出て行つた時、其所に生えてゐる年老いた樹が、みんな、根から幹から、明るい輝きを放つてゐるのを見て私の心は躍つた。其葉は繁つてゐた。其枝はいりくんでゐた。けれども地上には光りがあつた。私は其の幹と幹との間を縫つて走つた。

私は時々斯ういふ人に出會ふ。經歷から見ても、言行から見ても、どうしても陰鬱であるべき人の脚もとに、非常に快活な爽明な感じを投げてゐる人がある。

『大風の跡のやうだ。』といふ言葉は、騷動の後に來る靜寂を意味して居るやうであるが、私は其所に執着の哀史を觀る。野分の後で私は柿の樹の下に走つて行つて其の枝を仰いだ。其所には縱横に創を蒙つた葉が黑く傷ついてゐる。總てのものを叩き落し吹拂はうとした暴風の努力も、遂に如何ともする事の出來なかつた柿の實の僅かばかりが、負傷だらけで尙ほ枝にしがみついてゐる。私は其時生物の執拗さの强い事をつくづくと見る。人間にも斯ういふ人が澤山ある。

キリストは其の弟子にケパ『岩』ボアネルゲ「雷の子』といふ名を與へた。私は私の前に立つ人達に、一々私自身のみ知る名前が呼ばれる。そして私は其の暴風に恐れたり、潺湲たる溪流に親しんだり、懸崖の危險に身を顫はしたり、荊棘の刺を撮んで驚いたりする。

或年の晩春に箱根の山に登つて見た。心持のよい浴槽に一夜を明した朝まだき、溪に沿うて

五町十町とそゞろ歩くと、路の傍から溫泉がちよろ〳〵と湧き流れてゐる。清い川水が岩に堰かれ石に阻まれ乍ら、怒るやうに噎ぶやうに走つてゐる。

私は川岸の絶壁に立つて、小一時間も向山の樹々を眺めてゐると、山に生えてゐる樹々は悉く千差萬別の行動を執つてゐる。川下からやゝ強い風が吹いて來る。夫れは山の樹々に宣傳すべき何等かの使命を帶びてゐるやうである。私は此の風が山の樹々の總てを吹動かすだらうと思つてゐたが、案外にも事實はさうでなかつた。

滴るやうな新綠の楓が先づ靜に動いた。けれども川端の竹も、楓の隣にゐる椎も、靜寂としてゐた。

私は椎の樹に眼を留めて視た。夫れは新綠と舊葉とが相半したものであつた。若葉は動きたくても舊葉が夫れを制止してゐるやうにも思はれた。

風は小やみなく吹いた。今度は楓が靜まつたと思ふと、十四五間も離れた所にゐる朴の木が白い葉裏を見せ乍ら、腹を抱へて笑つた。其時遙か下の方の竹が點頭いて朴に和した。

藤に絡まれて苦痛を訴へてゐるやうに見える細長い樹は、二進も三進も動きが取れないやうに默然としてうなだれてゐる。夫れでも夫れに縋つてゐる藤自身は、早く此身を此儘に何とか處分して欲しいといふやうに、悲しみの色を見せてゐる。大きな岩の後に繿縷をまとつて兩の脛を少し曲げて立つてゐる老人のやうな、ひよろ〳〵高い樹がある。根元からガンジガラミに蔦が捲きついてゐるのである。

『俺はまア、何といふ悲しい事だらう?』と動きの取れない一生を卿ち顏に立つてゐる。殊に其の曲つた膝頭のあたりを見てゐると、氣の毒で堪らない感じがした。

突然椎の樹がザワ〳〵と動き出した。と、同時に川に添うた小さい草も樹がひれふすやうにして岩にしがみついた。けれども朴は笑はず、楓は動かなかつた。

巖にぶつかつて咽んでゐた水は、俄かに激越な口調で大雄辯を揮ひ初めた。白い熊のやうな石は起ち上り、茶色の豹や虎のやうな岩は躍り初めた。けれども峰の方を見上ると、其所はひツそりとして若葉一つ動かない靜けさであつた。

私は恍惚として山と水とを見た。我を忘れて彼等の行動を注視した。そして其所に彼等草の葉一つにすら、獨自一己の境遇と性格とを有するのを見た。水は走つてゐるが山は長へに靜か

である。しかし夫れと同じく楓と椎とには別々の境遇と性格があり、藤と朴とには全く相反した感受性がある。

風は平等に吹いた。總てを動かさうとした。しかし或ものは動き或者は靜かであつた。一つが泣く時一つが笑つた。私は總てのものを悉く自己の意志に服從させようとする利己的宣傳の割合に効果の無いのを知つた。しかし風は吹くまゝに吹くのが彼の性格であるといふ事をも知つた。山の一部分が騷ぐ時一部分が靜かであることをも知つた。我々の一個の心それ自身すら或部分が泣く時或部分が喜ぶ。感激と反抗とが同時に起り尊敬と輕蔑とが一時に來る事をも考へた。

『彼等はみな宿命された運命の下に置かれてゐるんだ。』

私は斯う呟き乍ら又た溪に沿うて下つた。

雲は靑く水は白かつた。すが〳〵しい洗はれたやうな心を懷いて山を下る私の前に、若葉が輝き花が匂うてゐた。柳は綠に花は紅だ、本當にさうだ。人間だつてさうだと私は心の中で今更らしく叫んだ。しかし夫れは私が幼い時、紀州の山奥で自然を人格視して眺めた幼な心が、少しくひねくれただけの觀察であると思つた。

エスカトロヂイ

生れた。苦しんだ。死んだ。この簡單な歴史がいつまで繰返されるのであらうか。何千年經つても何萬年たつても、人間の歴史の要訣は遂に此の三句に過ぎないのであらうか。

ヘブライ民族は奴隷の境遇から絶大な理想に憧憬れてエヂプトを出た。けれどもアラビヤ曠野の索漠たる生活は、彼等の理想を直ちに奪ひ去らうとした。彼等の叫びは、『理想を懷いて餓死するよりも、奴隷となつてエヂプトの肉鍋の前に坐るが宜い。』といふのであつた。彼等を率ゐてエヂプトを出たモーゼは彼等の爲に幾度か殺されかけた。

先覺者モーゼもピスガの山の上から、理想の地を幻に見ただけで空しく沙漠の中に死んだ。死ぬ時彼は遺言して自分の爲に墓を建てしめなかつた。それは彼が自分の率ゐる民衆に、理想を耳にのみ與へて現實を眼に與へ得なかつたからである。當時彼等の望んでゐた理想とは何で

あつたか。乳と蜜との流れる、葡萄や巴旦杏や無花果の豐富なカナンの土地に住ふ事であつた。

彼等は四十年の後、遂にヨルダン川を渡つて理想の土地を踏んだ。けれども乳と蜜と葡萄と無花果と巴旦杏とは彼等に何らの幸福を與へなかつた。彼等は夫れらの食物を得る爲には、絶えず流血の悲慘を演じて異民族と鬪はなければならなかつた。だから彼等は更に理想を得んが爲に悲慘な戰爭をした。飢餓が流血に變つただけである。

彼らは思つた。王を得れば……強い王を得れば幸福が來、理想が實現される！

しかし王を立てた彼等には、理想は來なかつた。美しい女は王の側女にせられた。強い男は其の兵卒にせられた。作つた麥は王と兵士との食料に取上げられた。體のよい奴隷に逆戻りである。

王は他國と戰爭をした。そして敗れた。はては國民全體が敵國の捕虜となつた。ペルシヤ、グリーキ、ロマの強い國は彼等を屬國として虐げた。理想は追うても追うても來ない。そこで先覺者は彼等にエスカトロヂイを說いて、理想の國は不意に現出するのだと說いた。神を信ずる者のみの住む新天新地が、いつか此世に現はれるのだと敎へた。けれども彼等は其の敎へに不

滿を發見した。

『そんな理想鄕がいつ現はれるのか知れない。よし現出した所で、死んだ者はどうなるんだ。吾々も多分理想鄕を見ずして死ぬだらう、後の人間が氣樂に暮したつて、吾々や吾々の先祖はどうなるんだ！』

此の理ある疑問の解決は、前千年說、或は後千年說となつて、過去に死んだ人も今生きてゐる人も、共に其の理想鄕に住む事が出來るのだと說いた。そこに死者復活說が起つた。

キリストに對つて、其の理想鄕はいつ來るのかと聞く者があつた時、キリストは答へて、『盜人の夜來る如く來るのだ。』と言つた。理想鄕の現はれるを、盜賊の來襲に較べて言つたキリストの言葉には限り知れない皮肉がある。『樂しい音樂をきいて、旨いものを食べて、病氣もなく、悲しみも無く、何一つ不自由のない生活が、眼前にぽつこり浮び出る日はいつか。』と聞いた答に、『ぬすつとが、夜來るやうに來るのだ！』と答へたキリストの唇は輕蔑に微動してゐたに相違ない。戸閉りが嚴重なら盜人は入れない。理想鄕を拒みたい人は宜しく心を嚴しく閉すがよい。

釋迦に問うてみると、『龍華三會の日だ。』と答へる。龍華三會とは釋迦が死んでから、五十六億七千萬年だといふ。えらい事を言ふものだ。人間も之れ位大きな事を言つて置けば揚足も取られまい。

釋迦の言葉は事實であらう。しかし吾々の一生ではまだ五十六億六千九百九十九萬八千年の時間がある。それまで吾々は生きてはゐられない。

然らばキリストも釋迦も、いゝ加減な事を言つたのであらうか。さうではない。要するにそんな得手勝手な理想鄉といふものは、此世に現出するものでないといふのである。

そこで自由思想家が現れて、人間各自の意思で、其の理想鄉を現出してみせようといふ。理想鄉を現出してみせようとした人は、大抵縊り殺されたり撲り殺されたりする。昔から自分の意志で現世を理想鄉にしようとした人は悉く地獄を見たのである。ユートピアを書いたムーアは縊り殺される時、『おれの顎髯だけは斬らないで葬つて呉れ』と遺言した。理想鄉を幻想して自分は縊り殺される。しかし、別に怨みも言はないで顎髯の事を氣にして死んだ。そこに吾吾に考へさせられる大きな事實が殘されるのであらう。

理想、理想の社會、理想鄉！

それは人間各自の頭に描かれる天地である。何々主義、何々說として夫れを演說したり、論文に書いたりして、多くの人を敎へ導き、强いて吾が說に多くの味方を得ようとするとき、いつしか自由は壓制に變ずる。各自が自由に、自分の頭の中で勝手な理想鄉を描いて、北叟笑んでゐる時こそ、そこに本當の自由があり、自由意志があるのである。

百人は百種に、萬人は萬種に、各自の理想國を建設すればそれでよいのである。さうしてゐるうちに社會は美しくなり健全になる。一人や二人の聖人や三人五人の偉人にのみ任せて置かうとする間は、人間の前に理想鄉の來ないのが當然である。

エスカトロヂイは即ちユートピアンの哲學である。ミレニアム Millenium は理想鄉を自ら描くユートピアンの心の中に現はれるのである。

戀愛の來る時

麗かな日を浴びながら、花の咲みだれた坂路を麓の方へ降りて來る。其の麓には彼等を迎ふる一軒の家がある。其家を號して『新婚』といふ。彼等は和やかな戀愛を十分に味ひ、自由の坂を樂しさうに降つて來たのである。麗らかであつた其日の追憶・花は咲き胡蝶の舞つた其の樂しさが、麓の家に辿りついた後、いついつまでも續くであらうか。彼等の來着を待つてゐた『新婚』の家は・果して彼等にいつまでも、甘い快樂に哺ませるであらうか。あまりに濃艶であつた色は、だん〳〵と褪せるのが至當ではなからうか。

あらゆる世間の反對をはねのけて、勇ましく自己の主張を歩んだ。烈日の中に手に手を取つて進むうちには、勇氣もあり憤慨もあつた。しかし、目的の地を駈け拔けて、結婚といふ憩ひの時が眼の前に來た時、二人の心に大きな疲れが來てゐるのではなからうか。つまり結婚といふものは、戀の夕暮ではなからうか。自由戀愛は、自由に生きようとする努力と闘爭力に充ちてゐる間にのみ、眞劍さがあるのではなからうか。結婚といふ決勝點に立入つた時は、もう双方が倦み疲れつゝある時かも知れない。

更に考ふべき一時がある。戀愛といふものには無反省が必要である。賢しらな反省はいつも戀愛を破綻させる。無反省な戀愛はいつも相手の長所のみを見る。双方の弱點缺點には盲目であらねばならない。斯くて戀愛は自己にも他人にも常識の批判を許さないで、盲目的に突進する。そこに自由があるのである。しかし結婚といふ休憩所に落着いた時、双方には油斷が生じる。油斷と共に反省が生じる。反省と共に批判が生じる。今まで見えなかつた缺點が見えて來る。盲目であつたものが目あきになつて來る。斯くて自由戀愛の結果結婚した男女は、普通の結婚以上に幻滅の悲哀に襲はれるのである。元々自由に愛し合つた者は、別れるにも自由でなければならない。どんなに熱烈であつても、戀愛といふものは、いつか醒め行くものである。恰も酒に醉つたやうなものであるから、人間年から年中陶然としてゐる事は出來ない。時には世相に憂ひ時態に苦む事もあらう。『御身いとしや』『あなたは可愛い』朝から晩まで終身愛し合

はれるものでもない。時には喧嘩もし、憎み合ひもする。敵同志になる事もあらう。其時にはもう戀愛が無いのである。戀愛の無くなつた夫婦、其の成立が、――よしや自由戀愛であらうと、それは過去の一片の履歴書である。『好き合つた間柄だから』と云つた所で、冷淡が二人を隔てゝゐる現在では何にもなるものでない。要は普通の夫婦に外ならない。

冷い枯木林がある。淋しい野路をとぼとぼと歩んでゐる男と女、媒介者といふ旅人に紹介されて、二人は道伴になる。男は女を疑ふ。女は男を疑ふ。どんな善い人だか、どんな惡い人だか御互に知らない、けれども日が暮れて落着く家は麓の一軒屋。そこから二人の生活を始めてみる。泥棒ではないかと思つてゐた者が案外な善人であつたり、善人だらうと思つてゐた者が案外にも泥棒であつたり、そこに喜劇が生れ、悲劇が生じる。これが媒介結婚の恐ろしい所である。

しかし、それは昔のやうに、女を箱入にして置いた時代の話である。今はもう男女が大いに進んでゐる。双方の身元を調べるには、小學、中學から、ずつと調べられる。趣味も教育も大

體はわかる。しかも二三回會合すれば双方の賢愚の程度は粗ぼ明にされる。さうして媒介結婚をする。互ひに信じ合つて、一つ家に落着く。そこから始めて人生の一度は持つべき戀愛に移る。自由戀愛が、もうとくに踏んで來た、麗かな春の日のやうな快樂の盃は彼等の行手にあるのだ。冷い枯木林の麓に果しなき桃林の美しい花を見出さうといふのである。

つまり、戀愛といふ美しい世界を通過して來た人に對して、これから其の美しい世界を見出さうとする人である。戀愛結婚と媒酌結婚との區別は、要するに其の二種に外ならない。一つは戀愛を過去に見、一つは將來に見ようとするのであるから、此の問題は、『人は結婚前に戀愛を味ふべきか、結婚後に味ふべきか。』といふに外ならぬ。

所が後者の場合に於て、たとへ二人の間に何人子供を產まうと、何十年連添はうと、遂に戀愛といふものを知らずに、一生を過してしまふ者があるといふ事が大きな問題となるのである。そこで問題は、結婚に戀愛が必要であるか否やが前提となる。もしも、夫れが必要であり戀愛が無ければ結婚はないものとすれば、寧ろ結婚後直ぐ醒め去らうと、先づそれを味つた戀愛結婚者の方が至當であると云はなければならない。が、しかし媒酌結婚後、戀愛が生じない

といふ斷定も出來ないので、双方に一得一失がある。

だから、結婚と戀愛とは切離して考へるべきである。世の中には戀愛があつても、結婚出來ないでゐる人があり、戀愛がなくとも、唯結婚して暮してゐる人がある。戀愛したからと云つて、必ずしも其二人は、其の最後を結婚といふ事で結びつけ縛り込めてしまはないでもよく、戀愛の無い者同志でも、大なる苦情が無いなら、同棲して子を産んで行くのも差支へはなからう。

斯う考へて來ると、戀愛結婚だの媒介結婚だのと云つてゐる考は淺い。人と人、男と女、それが一つ所に住んで、苦樂を共にするやうになるには、そんなものよりも、更に深い神秘があるのだと思ふ。

犬のはなし

國際聯盟だとか勞働問題だとかいふ初號活字が、目まぐるしい程新聞の記事に使はれてゐる頃の話である。

G神學校の寄宿舍の硝子戸を、ごろ〳〵と引開けて入つて來たAは、

『又た入つて來やがつたんだな。此の畜生奴が……』と呟き乍ら、チエッ！ と舌打をした。

そして大きな聲で、

『おうい、爺さん。困るぢやないか、こんな所へ畜生を上らしては……』と呶鳴つた。

炊事場の所で、ごし〳〵と米を磨いで居た六十ばかりの爺さんは、一寸廊下の方を振向いたまゝ『何を言ふんだい！』といひたさうに指の尖にくつ着いてゐた米粒を洗ひ落し乍ら、

『なア忠五！ お前ぢやテやつぱり生きもんやさかい、外で寢るのは寒いにきまつてる。誰が

何と言はうか、構ふもんか、私が許してやるから、どん〳〵と上つて來いよ。』と言つて、足もとを眺めた。其所には眞黑い小犬が、ちよこなんと坐つて、小い短い尻尾を動かし乍ら、クン〳〵と甘へるやうに鳴いてゐた。

五時半に食事のベルが鳴つて、十六人の神學生がみんな食堂に集つた時に、Aは近頃炊事の爺さんが度々御飯を焦がす事と、小犬を座敷へ上げる事とを、ごつちやにして不平を言つた。

『ねエ、僕もあれはいけないと思ふよ。爺さんに忠告しようぢやないか。』

箸箱で卓子(テーブル)をコツ〳〵たゝき乍ら、Aの說の半分に贊成したらしい事を言つたのは、Aより

は一年下のIといふ男であつた。

『I君は犬の事を忠告しようといふのか、飯の事を忠告しようといふのか、どつちだい?』と傍に居た上級生のNが言つた。

『僕は犬の事を言つたのです。御飯は少々こげる位が却つておいしいです。』

Iは頗る眞面であつた。するとAは、すツくと起ち上つて、

『では諸君、吾々はこれから圖書室へ集つて、此の問題を解決しようぢやありませんか。』と發議した。

十六人の學生中十四人までは圖書室へ集つたが、一人は少しく羞支があるといつて自分の室へ入り、一人はそんな事は大人氣ないといふやうな顏付をして、默つて自分の室へ行つた。

Aはそれが非常に癪に觸つた。で、直ぐIを代表者として其の二人を遊說にやつた。所が十分經つても廿分經つても戻つて來ないので、今度はNが總代になつて呼びに行つたが、やつぱり戻つて來ない。

『O君、君行つてみんなを引張つて來給へ!』とAは少しく顏を紅くして言つた。

Oは最後の使者として木乃伊取りを呼びに行つた。

OがNの室へ行つた時、そこでは三人が舊約聖書を中にして、さういふ會議を開く事の可否に就いて頻りに議論をしてゐた。

『神が天地萬物を創造し給うた時、(海の魚と空の鳥と地に動く總ての生物を治めよ。)と人間に命令し給うたから、我々は犬を飼ふ事の可否を議し得る。』といふのはBといふ男の議論であつた。

『夫れは祭司的古典系に屬するヘブルの原文であつて、エホバ古典の原文には、そんな文句が一字も無い、總ての生物は同等の生活權を神から得て得るのだ。我々神學生が米國ミッションのサツポードで勉强してゐるのも、彼の忠五といふ犬が炊事の爺さんから養はれてゐるのも同じ事だ。』 といふのはDといふ上級生で、默つて彼等の會議へ列らなかつた男であつた。

『若しそんな事を言ふなら、D君は犬にも靈魂があるといふ說を立てるのか。犬にも天國地獄があるといふのか。』 と云つて、第一の使に行つたIが顏を紅くして詰め寄せた。

Dは輕くうなづいて、頗る自信があるやうに、

『僕はさう思ふ、僕は近頃鳥の行動を研究してゐるが、總ての鳥が水を飲む時の態度を見給へ彼等は一口一口天に向つて頭を上げて感謝してゐるではないか。』 と言つた。

『待ち給へ、僕は動物ばかりぢア無くツて、萬物に靈魂があると思ふ、（萬づの受造者は今に至るまで共に苦み……）云々といふ字句が羅馬書の八章にある。だから宇宙の萬物は悉く神の子たちの自由に入らん事を望んでゐるのだと思ふ。即ち御再臨の時は新天新地になつて總てが救はれるだらう！』 と言つたのは第二の使に行つたNであつた。

第三の使ひが何だか言ひ出さうとした時、Bは机の上の聖書をぱたりと閉ぢて、

『君達、そんな事よりも、もツと重大な問題が此所にある、それはネ、去年の傳道者試驗には南北朝の王の名前を書けといふ問題が出たさうだよ、君達はそれを知つて居るかい。僕はもうちやアんと暗記したよ。』 と云つて、口の中で、

レホ、アビ、アサ、ヨシヤ、ヨラ、アハ、と言つては時々九七五、九一四、など丶數字を言つてゐた。

『何の禁厭だい、夫れは？』 とOが問うたので、Bは得意になつて、

『紀元前九百七十五年が南朝ユダヤのレホボアム第一世卽位で、アビヤ、アサ、ヨシヤバテが九百十四年……』 と一息に、ずツと南朝二十一代の王の名と其の卽位年號を言つてしまつた。

「そいつは面白い、其の符號を僕に敎へてくれ給へ」 とOが言つたので、たうとう五人はそこでBの口眞似をして、南北朝の王の名を諳誦し初めたのであつた。

Aは五人の者が入つて來ないので、今度は自分で呼びに行かうとしたが、Kといふ二年の男が、自由意志論を持出して、彼等には彼等の自由意志があるから、漫りに干涉してはいけない

といふ議論をしたので、結局犬の問題は過半數十一人で相談する事となつた。

『兎に角、炊事のぢいさんに、あの犬を室内へ入れない事だけ忠告しようぢやないか。』

Aは案外にも斯う云ふ穏和な提議をした。

『門を守るといふ事が、犬の使命だから、爺さんも其の提議には贊成するだらう。』とRが言つたので、全員はみなそれに贊成した。そして其の忠告に行く役目をAとRとが引受ける事になつたのであつた。

生徒は會議を了へて、めい〳〵自分の室へ歸らうとしたが、Bの室から大きな聲で……レホ、アビ、アサ、ヨシヤ……と調子を揃へて言つて居る聲が聞えたので、いつしかその十一人は吸ひ込まれるやうに、其の室の中に入つて行つて、お終ひには十五人が聲を揃へて、レホ、アビ、アサ……と唱へるやうになつた。

調子に乘つたBは日曜學校で讃美歌を教へる時に使ふ短い指揮棒を持出して來て、

『今度は北朝二十世！』と言つて、

ヤラ、ナダ、バア、エラ、ジム……と節をつけて言ひ出した。たうとう十四人は各自に手を

拍いて調子を合せ乍ら夫れをも諳誦してしまつた。

こんな騒ぎを後にしてAとRとは炊事の爺さんの室へ出かけて行つて見ると、爺さんはいつの間にか小さい鈴を買つて來て、夫れを忠五の首へ縛りつけてあつた。二人が室へ入つて行つた時、忠五は珍らしさうにチリンチリンと鈴を鳴らし乍ら、Aの足へぢやれかゝつた。

『うるさい！』と言つてAが右の足で其の鼻ツ柱を蹴つたので、忠五はキヤーンと鳴いて爺さんの所へ逃げて行つた。

『あなた方は此の犬の名を御存知？』爺さんは少しく眼尻の下つた眼を、睜るやうにして言つた。

『知らないよ。』Aは坐りながら言つた。

『これは忠五ですよ、あの忠で……』

『忠五？　犬の名としては似合はないネ、それは……』Rは笑ひ乍ら言つた。

『忠五でも忠六でも何でもいいが、』と稍大きな聲で言つたAは、『時に爺さん、僕達は生徒全體を代表して來たんだが、此の寄宿舍の中で、そんな生物を養ふ事はよしてほしいんです。』

『へエ、さうですか、しかし私は、あんた方に御厄介になつてゐるワケぢやアなし、犬を飼ふ事にまで干渉されては……』

爺さんが眞甲から强硬に出て來たので、二人は一寸たぢ〳〵とした。

「犬を飼ふ事はどうしていけないのですか。聖書にでも、そんな事が書いてあるのですか。』

爺さんは少しく顏ひ聲で疊みかけて來た。

『うん書いてある、(犬を愼め)といふ言葉がある。』とAは言ひきつた。其時Rは一寸Aの顏を見て、

『狐だらう?』とこれも確信の無いやうな聲で言つた。で、Aは周章てゝ、

『犬は泥足で廊下を歩くからいけない。』と誤魔化すやうに言つた。

『あなた方も靴を穿いたまゝ教場へ上るぢやないですか。』

爺さんの論鋒はなか〳〵鋭どかつた。

『兎に角、生徒全體の意志だから今日からその犬は座敷へ上げないやうに、箱でも買つて來て外へ寢かしてやりなさい。』

Rは物優しく言つたが、爺さんは忠五を膝の上に抱いたまゝ何とも言はなかつた。

『聖書にあるとAさんは仰しやいましたナ。』

爺さんは口の中で呟いた。Aは心の中で、イエスはヘロデの事を犬と言つたのだつたか、狐と言つたのだつたかと云ふ事が解らないのを、頻りに氣に病んでゐた。

二人は不得要領のまゝ爺さんの室を出たが、其の翌朝、みんなが食堂に集つて、食前の祈禱をする番に當つたRが起つて祈り出した時、忠五はチリン〳〵と首の鈴を鳴らし乍ら、テーブルの下をぐる〳〵駈け廻つて、Oの剝き出してゐた毛脚をペロリと一なめ舐めたので、Oは祈禱最中にも拘らず、ひやーッー と叫んで飛び上つた。みんなは何事が起つたのか知ら? と思つて俯向けてゐた頭を上げた。そして笑ひを咬み殺し乍ら祈禱の終るのを待つた。

此の騷ぎの中にも、たうとう一語一句を切らずに祈り續けたRは、しづかに椅子に身體を落して、

『何でした?』と言つて一座を見まはした。一同は急に林の枝が微風に搖ぶらるゝやうに、ざわ〳〵と呟き初めた。

『忠五奴が、僕の臑を舐ずりやがつて、』 とOは味噌汁を啜り乍ら言つた。一同は始めて其の原因を知つたので、どうーッと一度に笑つた。

『僕は瓦斯タンクが破裂したのだと思つたよ。』 などと洒落を言ふものもあつた。

しかし此の事件は、犬嫌ひのAに忠五排斥の好資料を與へたのであつた。

Aは十六人の學生中、Rを除く外、悉く忠五排斥に不熱心で、……レホ、アビ、アサ……といふやうな祿でも無い事を必死に諳誦してゐる學生達が憎かつた。

二十日三十日と經つうちに、忠五は段々ムク〳〵と肥えて來て、愛嬌のある眼で、ぢつと人を見詰め乍ら、尾をふつてゐるのを見ると、學生の誰彼は口笛の一つも吹いて呼んでやりたく思ふ程であつた。しかし爺さんは、蹴られたり毆られたりするのが可愛さうだと云つて、出來るだけ忠五を生徒達の居る所へ出さない事にしてゐた。だから授業の鈴が鳴ると、忠五はテニスコートもグラウンドも、みんな自分のものゝやうに自由自在に走りあるいてゐたが、果ては近所に住む白や斑まで誘つて來て、教頭が丹精を凝して作つた草花の苗を踏荒したりした。

或時、校長のマイヤア博士が、組織神學の講義で靈魂と精神との區別は二階の窓から外を見

るやうなもので、地面を見る時の心持は精神で、天を見る時の心持が靈魂だといふ說明をしてゐる最中、忠五が二疋の親友を伴れて、教場の中へ跳り込んで來たので、Kが叱驚して、ノートを取つてゐた鉛筆の尖を折つたといふのが、抑もの言ひがかりとなつて、又た其晩生徒全體は圖書室で『忠五に就いて』の會議を開く事になつた。そして今度はKが非常に強く出たので、可愛さうにも忠五は、土足で廊下を歩くといふ事と、犬だのに、Oの毛臑を舐ずつて祈禱中の宗教的氣分を毀したといふ事と、マイヤア博士の講義の邪魔をしたといふ此の三條に、生徒が一所懸命に授業をうけてゐる最中、畜生のくせにテニスコートを吾もの顏に駈け廻るのが癪だといふ氣分が加勢して、たうとう忠五は死刑を宣告せられる事になつたのである。

さて、AとKとRと三人は其の死刑執行官に推擧されたが、Rは自分の性格が、そんな事に不適任だと云つて辭したので、AとKの二人が夫れを引受ける事になつた。

其の翌晩であつた。爺さんが教會の祈禱會に出席したあとで、Aは駄菓子を買つて來て忠五に食べさせて置いて、炭俵の口を縛つてあつた荒繩で忠五の首を堅く縛つた。そしてKと二人でそつと宵闇の中を日川の方へ走つた。

一寸さきの運命を知らう筈のない可愛さうな忠五は、首を縛られながら愉快さうにAの前に立つて走つた。そして川原へ降り立つた時、下駄を穿いてゐるAやKが、石ころの上を轉び乍ら歩くのを嘲るやうに、常に繩をリン！と引張り乍ら前へ〳〵と走つた。

水際の所まで忠五と二人とが歩いて來た時、そこに一艘の小舟が繋いであつた。Aは忠五を抱いて其の中に入つた。Kは茶臼程の石を抱いて入つて來た。そして二人は繩の端を石に縛りつけてしまつた。忠五は前後に二尺ばかりの餘裕しか與へられないので頻りに首を伸したり縮めたりして狂ひ廻つた。しかしKが石を抱き上げると同時に忠五もAに抱き上げられてしまつた。悲しい運命が忠五の上に臨んだのである。

ワン、ツウ、スリーといふ聲が終るか終らないうちに、どぶんと水煙りが立つて忠五は石と一緒に淵の中に沈んでしまつた。

AもKも周章てゝ舟を飛び出した。そして岸の方へ走つてゐる時、Aは圓い石の上に足を踏みすべらして、ぱッたり倒れた拍子に、ひどく肱を石にぶッつけて思はず畜生！ と叫んだ。Kも下駄の鼻緒を踏切つたので、跣足になつて走つた。そして二人は學校まで逃げて歸つたので

ある。

歸つてみると爺さんは、ヒュー〳〵と口笛を吹き乍ら、テニスコートの所で忠五を尋ねあるいてゐた。

Aは爺さんに跣足を見付けられる事を恐ろしく思つた。で、そうッと風呂場に入つて、足を洗ひ乍ら忠五の事を考へてゐると、白い石が繩に縛られて川の底に沈んで行く光景が、まざまざ見える。其の石の傍で砂を蹴つたり小石を踏み飛したりしながら、苦しんでゐる忠五の姿が眼底に浮んで來る。

Aが足を洗つて二階へ上つて行つた時、理性家を以て任ずる舊敎神學者のBが、ドアの所から顏を出して、

『死刑執行後の裁判官は、大抵二三日眠られないといふ話だが、君は今夜眠られさうかネ。』

と問うた。

Aは其時、自分が本當に死刑執行者だつたといふやうな氣分になつて居たのであつた。

『可愛さうだなァ、やつぱり……』Rは自分の室に入る時、少し悲しさうな聲で言つた。

『何とかしてやらなきやア、君たちは地獄へ行くよ。』 Bは嘯すやうに言つた。

其時Aは實際も一度川原へ走つて行つて、忠五を助けてやらうか知らとも思つた。しかし、もう今頃から走つて行つた所で、忠五は溺れて死んで居るに違ひないので、

『なアに、忠五には殺さるべき理由があつたのだ。』 と自分で自分に言つて、寢床へ入つた。

寢る時にやつぱり蒲團の上に正坐して祈る事を忘れなかつたAは、神よ……主よ……と言つて祈りかけても、祈りかけても、二の句がどうしても出て來ない。

暫くすると、下の玄關の戸が、ガターンと開く音がしたので、Aは祈をやめて耳を欹てると、

『おう〳〵、忠五か忠五か、よう歸つて來たなア、よう歸つて來たなア。』 といふ聲が聞えて來る。

Aは思はず彈かれたやうに跳び上つて、二階の段梯子を二つ三つドンドンと走り降りたが、電燈の下で爺さんが、びしよ〳〵に濡れた忠五を抱いて、

『何所の鬼めが斯んな事をしよッたんだらう？ 可愛さうになア、お前は繩で縛られて水の中へ投げ込まれたらしい……なア罪もとがも無いお前を……』 と云ひ乍ら繩を解いてゐるのを見

た時、鐵槌で頭をこツぴどく毆られたやうに感じた。

爺さんは不圖欄干の方を見上げて、

『Aさん、これを御覽なさい、こいつは私の留守の間に何所かへ遊びに行きよッて、こんなにヒドイ目にあうて歸つて來ましたよ。誰かゞこんな繩でふん縛つて、水の中へ投げ込んだらしい。何といふ恐ろしい事をするんでせう。神樣を知らない人といふものは、斯うまで鬼のやうな心になるものでせうか。』 と云つて、怨めしさうに其の繩を見詰めてゐた。

Aは爺さんが其の繩の出所を知つてゐるのでは無いかと思つてギクリ！とした。で、餘程爺さんの前へ走つて行つて、其の前に跪いて謝罪しようか知らとも思つたが、頑固な彼の心は夫れを承知しなかつた、のみならず彼は、

『けしからぬ奴があるものだなア。』 と云つて其まゝ二階へ引返さうとしたが、其時爺さんは忠五を抱上げ乍ら、顫へ聲で、

『おい、忠五！ もう何所へも出て行くなよ。こゝはナ、踏まれても蹴られても、やつぱり神樣の御教を說く神學生さんの居る所ぢやさかい。なア忠五！ もう此の學校から外へは一足も

出て行くなよ、出て行くと生命が危いぞ！』と云つてゐた。

夫れから十日程後に、神學部の講堂に神學生全體が集つて、動物愛護會を創立した。そして彼等が此の學校を卒業して地方へ傳道に行つた時、人間の靈魂を救ふと同時に動物をも愛護する事を宣傳しようといふ決議をした。

會が成立したので、AもKも泣いて祈つた。學生の一人々々が、みんな感激に充ちた祈りを捧げた。

其時彼等が餘りに『殺す勿れの誡を破つて……』とか、『罪を犯した』とか言ふ言葉を濫發するのが、校長マイヤア博士の腑に落ちなかつたので、彼は、

『あなた方は、どういふ動機で此の會を發起なさつたのですか。』と問うた。

そこでAもKも涙を流し乍ら、忠五を殺さうとした事を語つた。他の學生達も夫れに同意した事を告白して、他日必ずこの動物愛護會を、日本人の大きな事業にして見せるといふ意氣込を示した。

けれどもマイヤー博士は言つた。

『私は、此の日本へ人間の魂を救ひに來たのです。犬の靈魂は存在するかしないか、夫れすら疑問ですから、そんな事に力を盡す爲に私はあなた方を養成したのではありません。』

マイヤー博士の其の言葉が生徒全體の大問題になつて、俄かに日本魂がどうだとか、教授の態度がどうだとか神學說が古いとか、わア〳〵騷ぎ出した上、たうとう同盟休學といふ事まで騷ぎを持ち上げてしまつた。そして其の結果十六人の學生中、

レホ、アビ、アサ、ヨシヤ、ヨラ……を諳誦した五人、つまり最初の會議に列しなかつた五人を除く外はみんな退校處分を受けたのであつた。

宗教の雰圍氣へ

現今の日本婦人は、宗教の分野に深く足を踏入れて來た。しかし夫れは教會だとか寺院だとかいふ既成宗教の信徒にならうとするのでなく、宗教の雰圍氣中に浸つて居たいといふ猛烈な求道心である。

嘗て倉田百三氏が『出家と其の弟子』を書かれた時、其の讀者の七八分が婦人であるといふ噂を聞いた事がある。私は其時或人に對つてそれは日本の婦人が、教會寺院以外に、宗教を求めようとする欲求が充たされつゝあるのだと公言したのであつた。

私は『出家と其の弟子』を讀んだ時、其の思想が全然基督教的であつて在來の眞宗の教義には寧ろ反するものがあるのではないかと思つた、けれども私はさういふ書物を要求する人を嬉しく思ふ。何となれば、これまでの宗教といふものは、佛教でも基督教でも、宗教といふ大本

分を忘れて、小い狹い教義に囚はれ過ぎて居た、だから彼等の造り上げた教義とか宗派とかいふものを超越して、キリストであらうが親鸞であらうが、さういふ事には頓着なしに、宗教的の氣分に浸つて行かうとする傾向は實に喜ぶべき傾向である。

日本に於る青年男子の教育は、國家主義、軍國主義の爲めに、宗教心の發達をどれだけ阻害されて居るかわからない。所が青年女子の教育は、稍其の害毒から逃れてゐる。日本の男學生は文部省、陸軍省、海軍省と三重の役所から環視されてゐるのであるが、女學生は文部省一ヶ所だけの監視であるから、思想も伸々して自由に進んで行くのは當然であらねばならない。

其の自由の氣分が宗教思想の方面に向つて、十分に發展されて行つたのであるけれども、日本の婦人はもう、在來の宗教宣傳には耳を傾けない時期に居る。彼等は親鸞に關する著書を讀む。けれども夫れを以て直ちに眞宗が繁昌すると思つたり、珠數爪繰つて親鸞や善導大師の像を拜むものと思つては失望する。彼等は江原氏の『新約』を爭つて讀む。賀川氏の『死線を越えて』を耽讀する。しかし彼等は俄かに基督教會の門に出入しようとはしない。彼等には親鸞が日本人であるが故に信ずるのでも無く、皇太后宮大進正五位下藤原有範といふ身分だから尊

く思ふのでもなく、釋迦が淨飯王の太子であつたといふ事に敬意を表するのでも無い。キリストが日本人であらうが、釋迦がユダヤ人であらうが、そんな過去の歴史を超越し得るまでに今の若い婦人の宗教心は發達して來てゐる。

然らば現今の婦人達はどんな宗教を要求してゐるかといふに、彼等は『祈りの心』を要求してゐる。『極りなき赦し』を希つてゐる。夫れを視鸞と基督とに求めて得易いが故に彼等の多くは親鸞に關する書物を讀み、キリストに關する著迹に近づくのである。彼等は日本主義の宗教や、愛國婦人會員であるといふ名目に滿足しては居られない。夫れは永い間壓迫されてゐた女性が解放された時、希求する心の一面である。

今の若い婦人で、宗教を求めてゐる人達は恐ろしい程眞劍である。彼等は自由を欲する念の熾んになればなる程、其の心中に深い苦痛を要求するのである。そして彼等は、其の苦痛の奥底に、『切實なる祈り』と『極りなき寛大』とを發見しようとしてゐる。これは視鸞や基督が彼等に考へられて、日蓮やマホメットが其の思考の埒外に置かれる所以である。隨つて彼等は月並な説教を聽聞するといふ事よりも、莊嚴な儀式を見るといふ事よりも、眞劍な祈りの生活

に入つて見たいと思ひ、底ひなき赦しの境涯に浸つてみたいと思ふのである。彼等が一燈園の生活に憧憬がれ、賀川氏の貧民窟の生活に敬意を表する所以は尤もな事である。

斯うした純感情の土臺に立つた現今婦人の宗教心は何所まで行つて、夫れが既成宗教と調和出來るものか、どんな所に落着くかといふ事は非常に興味のある問題であるが、他の一面に於て、現代の婦人は哲學的な傾向を帶びて來たと言へよう。隨つて、彼等の要求する宗教は、純感情から純理性にと、極端から極端へ飛ぶ傾きがある。しかし夫れはどつちにしても、婦人の特徴であつて、寧ろ喜ぶべき事だと思ふ。

しかし、今日の婦人は、もう生活といふ事の脅威に眼覺めてゐる。宗教といふ事も、戀愛といふ事も、此の生活といふ事に交渉無しではどうする事も出來ない。そこで現今婦人の要求してゐる宗教が二つに分れて來る。其の一つは、一燈園や神戸の貧民窟を目的とする犧牲的虚無の情操となり、一つは極めて寛大な包容的な希求となつて行く。前者は『信』であり、後者は『自由』である。

乞食になつても善いといふ理想と、あらゆるものを宥して行かうといふ理想とは、其末に於

て大變な距離を有するやうになる。

『信』に立つ前者は、道德的に極めて自分を嚴格に持して行く立場にあるが、『自由』に立つ後者は、其の方面に於て寛大である。動もすれば善惡の區別すら認め得られなくなる。『戀愛問題を、現今の宗教は如何に見るか。』といふ問題は、屢々付與せられる大きな難問である。

『或婦人は必死になつて、愛人たる一男子の爲に働いた。そして男子をして學校を卒業せしめた。けれども卒業すると同時に、男は女を棄てた。女にはもう二人の子まである。』

斯ういふ實際問題に接した時、其婦人の心に深く湧上つて來る疑問は、『既成宗教の力』といふ事である。何所の僧侶に諮つても牧師に相談しても、其の男子に對して加ふべき制裁をもたない。しかし夫れは僧侶が墮落したのでも牧師が無能なのでも無い。彼等は唯夫れを聞いて悲しみ、同情はするが、それと同時に、其の男子に對しても同情を惜まないのである。

『斯うした男の行爲は、夫れで善いのですか。』

『勿論惡いにきまつてゐます。』

『では、私はどうすればよいんでせう？』

『さア、』

會話は詮じ詰めれば此れだけである。其時忍耐して愛の恢復を待てとも、愛は最後の勝利だなぞとも言ひ得る青年宗教家は無いのである。これは宗教が其所まで進歩して來たのである。以前は宗教家といふものは裁判官のやうに直ちに斯る場合に一人の罪人を作つて夫れを責めたものである。しかし今日の宗教家は夫れを爲し得ない程度まで進歩してゐる。

で、其の婦人は、自己の懊惱を慰めて行くには、哲學的に深い思索に入つて行くか、純感情に深入して、總てを投捨てるか、其の行く途は自分自身で擇んで行かねばならない。

『やはり、私は私自身で、此の二人の子供を育てゝ自活して行きませう。』

『夫れは實に感心な決心です。しかし、あなたは、あの男を怨んでゐませんか。』

『いゝえ、もう少しも怨んでは居ません。私には最早赦すとか赦されるとかいふ言葉もありません。私には唯、廣い〳〵自由の天地があります。』

『其所に祈りがありますか。』

『えゝ、怨みの無い所には感謝があるにきまつてゐます。』

斯ゝした會話が交換された時、其の婦人は新しく宗教といふ事を意識する。其時彼女の心に懷いてゐる宗教は、お經の文句や、說教の言葉から入つて來たものでは無い。獨自一個の眞劍な宗教が組立てられてゐるのである。

今の若い婦人達で、少しく眞面目な考へをもつ人は、戀愛といふ事の後に來る斯うした事件を先廻りして考へてゐる。

『一體、このまゝにして置けば、世の中はどうなつて行くのでせう？』

悲慘な經驗を嘗めない婦人でも、社會に起る男女間の事相に就いて、斯んな慨嘆の聲を放つ人が多い。私はいつも、『其の慨嘆それ自身が宗教だ』といふ。

私の思つてゐる宗教といふものは、そこに發足するのである。生活問題も、戀愛問題も、家庭問題も、何一つ滿足な解決を與へられてゐない現今の社會で、

『此儘にして置けば、世の中はどうなつて行くんだらう？』といふ事を痛切に感じてゐる人が宗教家であると思ふ。其の人の宗教といふものが、蟲食ひ本や、背革表紙の中から出て來なくともよいのである。人間の心の中に湧いて來た純な眞面目な慨嘆が、宗教の基原となつて行く

のであると私は思ふ。

そこで現今の婦人達が、最も切實に感じてゐる事は、やはり生活と戀愛とから發足した、咏嘆なり憤慨なりが、土臺となつた眞劍な宗教意識である。

たまには空想家もある。昔の娘達が月や花に憧がれたやうに、輕い心で便所掃除だとか、貧民窟だとか云つて騷いでゐる者もあるだらう。けれども夫れも階梯である。やがては眞劍な境地に足を踏入れて行くであらう。

しかし私の出くはす數多くの質問を綜合してみる時、純粹な宗教に關する問えといふものは殆どない。譬へば靈魂の問題とか、來世の有無とかいふやうな事は、寧ろ遊戯的に取扱はれてゐる。換言すれば現代の婦人の一部は、死といふ事よりも生といふ事に恐怖を感じてゐる。如何にして生きるかといふ事が、重大な問題となつて彼等を脅かしてゐる。で、彼等の提出する問題は、家庭、生活、戀愛の三問題に絡まつた宗教問題である。

どんな問題でも此の三つの何れかの一つに或は二つに該當してゐる。現今の家庭制度が、どれだけ悲劇を產みつゝあるかといふ事は思半ばに過ぎるものがある。夫れには生活問題が附隨

じてゐる。戀愛問題と雖も、家庭の經緯と、生活問題とが纏はらねば、左程の困難も見ずに切拔けて行かれると思ふ。

古い宗教が聖人の言行錄や、教義で容易に片付けて行つた問題が、今は全くそんなものと沒交渉になつて、社會問題といふものと深い交渉を有するやうになつて來た。

こゝに一つの戀愛問題が起る。そして其の婦人が死ぬ程惱むといふ事と、惱むべき筈だのに毫も惱み得ないといふ事と、此二つの兩極端が、同じ程度の苦痛を感ずるやうになつて來た世の中である。

男に捨てられたといふ事と、男を捨てたといふ事と、同じ程度に苦しんでゐる人が往々にある。

泣いたり叫んだり訟へたりいがみ合つたりする程度では、如何ともする事の出來ない苦痛を抱いてゐる人が、宗教の境地に入つて安住の地を見出すべく跪き苦しむのである。さういふ人人の要求する宗教が、『切なる祈り』を與へ『極りなき寛大』を敎ふるのは、蓋し當然の結果であると云はねばならない。

日露戰爭後、非常な勢で勃興して來た、傳道的宗敎心は、段々と變化し去つて、今では自衛的宗敎心となつて來たのである。

昔は自分が得た宗敎を逸早く他に移植する事を宗敎の熱心だと思つてゐた。そんな輕薄な時代が過去つて、今はもう、みつしりと自分の爲めに考へ、他人の爲に祈らうといふ傾向が見えて來たやうである。これは個人主義の思想の上に强く植付けられるのである。夫れは忌むべき事でも悲しむべき事でもない。そんな意味の宗敎心が段々深く植付けられた現今の婦人は、所謂何々事件といふ同性の惹起した問題を、さも自分の事のやうに、憂ひ且つ考へる傾向になつて來た。何某女がどうした斯うしたといふ問題は、夫れは決して其の當事者たる何某女のみの問題ではない。そんな問題を惹起した本人よりも、もつと眞劍に其問題を考へてゐる幾萬の婦人がある。そして彼等は其の解決を要求する。女としての彼等自身の自衛策を講じる。夫れを宗敎的に解決しようとする婦人の多くなつて來た事は爭はれない傾向である。

斯うして深く考へて行く事件を、通り一遍のドクトリンで解決しようとしたり、在來の善惡の標準で判決しようとする宗敎家はもう彼等の相手で無い、彼等はもつと實際的に痛切な解決

を要求してゐる。しかし其の解決は今日の社會組織のまゝでは如何ともする事の出來ない場合が多い。そこを諒解した婦人は、家庭、生活、戀愛といふ三大問題に就いて苦しむと共に、其得られない解決を得んとして苦しむのである。

『一體このまゝにして置けば、世の中はどうなつて行くのでせう？』

しみ〴〵と彼等は考へつゝある。夫れは今までのやうに空想的な考へではなく、現實から湧いて來た血の滴るやうな苦痛の聲である。しかしキリストと雖も釋迦と雖も、此の世此のまゝでは夫れに對する滿足な答案は恐らく用意してゐなかつたであらう。

女心のさまゞ

タマル

體格の絶れて、良い美しいタマルは、ユダヤ第一の資産家であるヤコブ家に目出たく輿入をした。彼女の花聟はヤコブ家の長男ユダの長子エルといふ蒲柳の若樣であつた。

タマルとエルとは非常に睦まじい新生涯を彼等の天幕に送つて居たが、どうしたものか彼等の戀歌が濃艶になるだけ夫れだけエルの體格が衰弱して行くのである。そしてまだ新婚の夢の暖かいうちにエルは痩せ劣へて死んでしまつた。

舅のユダは次男のオナンを呼んで言つた。

『兄さんが死んでタマルはさぞ淋しいであらうから、御前は今夜から義姉(ねえ)さんの天幕へ行つて

おやすみ。若し子が產まれたら死んだ兄さんの子にするから……』

オナンは唯々としてタマルの天幕に行つたが、間もなく彼もまた蟷螂のやうに痩せ劣へて死んでしまつた。

弟のユダは三男のシラをタマルの天幕に行かしめたなら此れもまた死んでしまふに相違ないと考へたから、タマルを呼んで、

『暫く家に歸つて居てくれ。シラが成人した時よびに行くから其時は又た來て呉れろ。』と言つてさとへ歸らした。けれども其の後三男のシラが立派な男になつたに拘らず、ユダはタマルを呼返してやらなかつた。

タマルはそんなに永い年月冷い寢床を獨りで守つてゐられる肉體の持主ではなかつた。

或日一人の友が來てタマルに語つた。

『今日は、あなたの舅さんが奥樣を亡くした淋しさを慰むるために、テムナの村へ羊の毛をきるのを見にいらつしやるさうです。』

これを聞いたタマルはすぐ、無地なやもめ衣を脫ぎ捨てゝ派手な娘姿になつた。見まがふばかりに厚化粧して美しいかつぎをすつぽり引被つてテムナの道傍に坐つて居た。

新に妻を失つた悲哀をしみ〴〵感じつゝあつたユダは、路傍にゐた此の美しい女性を其のまま見遁す事は出來なかつた。

『おい、美しいねえさん、御前の天幕へ俺を入らして呉れないか。』

『御入りなさるのは御自由ですが何か下さいますの？』

『俺の家にある可愛い山羊の仔をやるよ。』

『ぢや夫れを下さるまで、あなたの印籠と其の杖とを御預りいたしますワ。』

こんな會話の末、ユダは其一夜をタマルの天幕に過したのである。けれどもタマルは巧みに自分を彼に知らしめなかつたのである。

それから三ヶ月の後に、ユダに對つてこんな告口をしたものがある。

『あなたの嫁のタマルさんは不義の結果姙娠したさうである。』

意外な事をきいたユダは烈火の如くに怒つて、タマルを焚殺さうとして、早速彼女を縄付にして引出して見ると、彼女は極めて落つきはらつて、

『私は姙娠です、そして私の隠し男と云ふのは此の印籠と杖との主でございます。』と言つた。

それをきいたユダは暫く考へてゐたが、

『俺が悪かつた。タマルの行爲は俺よりも正しい。俺はタマルに彼の若いシラ（三男）を遣らなかつたからである。』と言つた。

タマルは月滿ちて無事に分娩した。しかもそれは双生兒であつた。

此の出産といふ役目が濟んでからタマルは遂に普通の女になつた。そして彼は一生を堅く獨身で暮した。

ラハブ

ラハブはカナンの國のエリコ王にまで其名を知られた有名な娼妓であつた。彼女の家は彼女

の浮名と共に石垣の上に高く聳えてゐた。

或夜ユダヤの大將ヨシュアの斥候兵が二人、ヨルダン川を渡つて此のエリコの町を偵察してゐたが、彼等は寸分油斷のならぬ此の敵國ではあつたが、さしもに名高い遊女ラハブの門前を空しく過ぎる事が出來なかつた。夫れと勘付いたエリコの羅卒は此旨を王にまで上申した。で、王は遊女ラハブに命令して言つた。

『汝の家に居る二人を我れに渡せ、彼等は此の全國を探偵に來たものである。』

一國の安危に關すると云ふ理を含んだ王の命令である。しかしラハブは此の警戒嚴重な敵地で自己の重い責務をも顧みずに、生命を賭して自分の所に來た二人の異邦人を、むざ〳〵愛國の犠牲にするのは、いかにも忍ばれない事だと思つた。で、彼女は遂に一夜の情を重い愛國の義務に代へて王を偽つた。

『其人達はさつき日暮頃に出て行きましたから、早く兵隊さんをやつて御捕へなさいよ。』

そこで羅卒は一散にヨルダン川の渡頭に走つた。しかし二人の影も形も見えなかつた。見えない筈である。二人の斥候はラハブの屋根の上に潜んで居たのであつた。

羅卒の去つた後でラハブは屋根に上つて來て二人としみ〴〵語つた。そして窓から二人をつりおろして逃してやつた。

ラハブは腰にしめて居た燃えるやうな緋い一すぢのしごきを其の窓に結びつけて、二人の無事に逃れた事を記念した。

程なくエリコの町はヨシユア大將に攻め落された。けれども窓のれんじに赤い愛情のしごきの結ばれてある家の者だけは悉く救助せられた。そして此の有情のラハブはユダヤの宗家であるサルモンに嫁いでボアズと云ふ慈悲深い男を産んだのである。

ルツ

ナオミは亭主と二人の男の子とを伴れて、ユダヤの飢饉を避けてモアブの地に行つた。モアブは平生から異教徒として輕蔑して居る國であるが、背に腹は易へられなかつたのである。

所がモアブへ來てから間も無く亭主のエリメレクが死んだので、二人の子供は驕てモアブの

娘を娶つた。兄の妻をオルパ、弟の妻をルツと言つた。しかし夫れも四五年で不幸にも二人乍ら寡婦となつてしまつた。三人の寡婦ばかりでは面白くないと思つたか、ナオミは再び故郷のユダヤへ歸る事にして、二人の嫁を膝もと近く招いで言つた。

『嫁達は一旦家に歸つて下さい。もう私も年を取つて居るから、今からお前達の亭主となる男を産んであげることはできない。よし此年を提げて今夜結婚するとしても、そして子を産むことができるとしても、其子が成長する頃には、お前達は婆アさんになつて居るではないか。と言つて若い女を此のまゝ一生一人で暮させられるものでは無い。だから、どうぞ自由におうちへ歸つておくれ。』

二人の若い寡婦は泣いた。けれども兄嫁は思つた。

『私には私の國がある。私はモアブに留るのが至當であらう。私には私の信ずべき私の國の宗教がある。私は此の國の民情と宗教とを捨て、他國へ行く事は出來ない。』

兄嫁のオルパは愛國の精神から、其の姑に別れて家に歸るべく、離愁のキスをナオミに與へた。しかし弟嫁のルツは言つた。

『私にはもうモアブの國だのモアブの宗教だのと云ふものは無い。私はおツ母さんと一緒に何所へでも行きます。私の落付く所が私の國です。そして私の住む所の民が私の民です、私の信ずる宗教が私の宗教です。あなたの死ぬ所で私も死にます。』

ルツは最早家族制度の習慣から離れ、攘夷心を捨てゝ唯々女の優しい暖い愛情にのみ生きようとした。そしてナオミと二人でユダヤに行つたのである。

『ナオミさんが歸つて來たつてネ。』

『美しい外國の女を伴れて來たつて言ふぢやないか。』

こんな會話を聞いたナオミは腹立たしかつた。

『ナオミ(樂みの意)だなんて、そんな言葉は聞きたくも無い。神様は隨分私をおいぢめなすつたんだワ。有るものを無くしちやつて、亭主に死なれて、二人の子に死なれて、夫れで何のナオミなもんか。お苦しいつて言ふもんだ。神様は私を攻めて艱ましなさつたんだワ。』

ナオミはさう言つて呟いた。

彼等の歸つた時は丁度麥刈時であつた。ユダヤの習慣は他人の畑で麥を刈つて行く其後から落穗を誰にでも拾はせるのであつた。

ナオミとルツは差當り食ふに困るので、ルツは或大百姓の畑に行つて其落穗を拾つて居た。そこへ地主がやつて來て此の美しい女の落穗拾ひを見て非常に親切にした。地主と云ふのはエリコの町で名を賣つた遊女ラハブの生んだボアズと云ふ男で、もう中年を過ぎて居るのに、どうしたものかまだ獨身者であつた。

ルツが毎日ボアズの畑で彼男の厚い情を懸けられて居ると聞いたナオミは、或夜の事ルツにこんなことを言つた。

『娘！　私はお前の落付所を探して、お前を幸福にしてあげる筈だつた。』

ルツは突然な此の言葉に、何と答へていゝかわからなかつた。

『ルツ、御前は早く着物を着換へて香膏を塗つて麥禾場に行らつしやい。禾場ではボアズの旦那が夜業をしてゐらつしやる。そして麥を番する爲に藁の中へ朝まで寢るに相違ない。お前は物の隱に匿れてボアズの寢て居る所を見定めて置いて、ボアズが疲れて寢て居る時そつとそこ

へ行くがよい。』

姑の言葉にルツは何の異存も無かつた。そして彼女は夫れを實行した。

夜半に寢返りを打つた時、足の所に一人の婦人の寢て居るのを知つたボアズは、一方ならず驚いた。

『誰だい、こんな所に寢て居るのは？』

『あなたの婢ルツでございます。あなたの夜着の裾で日蔭者の私をおかばひ下さる事を御許し下さるでございませう。』

『うん、神様は活きて居なさる、朝まで靜にしてゐらつしやるがいゝ。』

斯くて翌朝はやくルツは自分の天幕に歸つた。歸る時ボアズは聲をひそめて、

『お前の先の亭主は若い男だつたらうに……』

と言ひながら、ルツの着て居た被衣に大麥六升を入れて夫れを負はせてやつた。

此の詩趣ある一夜の契りは、遂に此の二人をして偕老同穴の誓をなさしむるに至つた。ボアズは先祖のユダが若い息子の嫁と野邊の手枕に一夜を樂しく明した話を思ひ出して、タマルの

やうに善い子を産まん事を神に祈つた。そして其の祈に應じて生れた子が有名なダビデ大王の曾祖父オベデであつた。

ナオミは孫のオベデを抱いて毎日のやうに隣人に見せびらかした。そして其時彼の名は本當に『ナオミ』であつた。

ウリヤの妻

頑強なアンモン人を打破つたといふ捷報を耳にしたダビデ大王は、戰捷の光榮を夕日に浴びながら城の櫓に上つて四方を見た。その時彼の眼に入つたものは山なす戰利品でもなく凱旋兵士の勇ましい行列でも無く、一人の美しい雪の肌なす裸體美人であつた。

ダビデは直ちに大王の權威を以て其女を呼寄せてみると、意外にも夫れは彼れが稀有の忠臣ウリヤの妻ベテシバであつた。

ベテシバは、飛ぶ鳥をも落し日をも招き返す程の權勢ある、ダビデ大王の言葉に反抗するだ

けの強い意志を持つてゐなかつた。

けれども翌朝彼女は清い水で身體を洗つた。そして心なき不義の誘惑に打負けた身を潔めて再び此の如き事はせまじと決心して歸つたが、悲しいことには其後間もなく彼女は、苦しい不義の因果を負擔して居る事を知つた。

斯くと聞いたダビデは早速ウリヤを戰場から呼返して軍狀を詳しく御下問あつた後、暫く家にゐて休養するがよからうと言つた。けれどもウリヤは戀しい美しい妻の家には行かずに城門で一夜を明した。

『永い旅から歸つて來た其方は、何で家に行つて愛する妻を慰めてやらないか。』

とダビデは尋ねた。すると、ウリヤは、

『我が忠良なる兵士は戰場の冷い地上に露營してゐます。それに我れのみ獨り妻の所を訪ふ事は出來ません。』と答へた。

そこでダビデはウリヤに御陪食を仰付けて、ウンと葡萄の美酒に醉はせたが、其晩もたうとう彼は家に歸らなかつた。

ダビデは、やむなく其のまゝウリヤを戰場に歸らしめた。そしてウリヤが激戰の眞ツ最中に、其の後援軍を退却せしめよといふ亂暴な勅令を、司令官ヨアブに發したのである。內情を知らないヨアブは、正直に王の勅令を奉じてウリヤを死地に陷れた。ダビデの計略は思ふ壺にはまつて、憐れなウリヤは所謂名譽の討死を遂げたのである。

ベテシバは、夫のウリヤが歸京した事も知らなかつた。彼が城門に寢て兵士の苦を思ひやつたといふ美談をも聞かなかつた。況んやダビデの刺ある胸中をも知らなかつた。

けれども夫のウリヤが討死したといふことは、逸ばやく耳にした。

彼女は死にたい程悲しかつた。しかし、ダビデ王の猛烈な火のやうな愛情は彼女をして此世に生永らへしめた。そして間もなく正式にダビデ大王の妃として入內したのみならず、あの有名なソロモン大王をまで產んだのである。しかし、意地惡い歷史家の筆はいつまでも『ウリヤの妻』と云ふ肩書を彼女から取除かなかつたのである。

途窮つて

春日倚高樓、却添心上秋、花飛人欲老、山水獨悠々
醉登歌舞樓、屈指幾春秋、今日山中客、不堪往事悠

これは彼の秋水氏が、湯河原の岫雲樓から甲斐の僧竹迷に贈つた疊韻二首である。

僧竹迷は、彼の千九百十年の事件が終結して間もなく、箱根の間道を通過して、丈餘の巖壁に、『△△大明神』と大書してあるのを見て非常に驚いた人である。

私は竹迷師に會つて間もなく四國を縱斷して、秋水氏の鄉里中村町で、秋水氏の逸事の數々を聞いた。土地の人々はみな『秋水先生』と言つてゐた。のみならず彼の揮毫を掛物にして祕藏してゐるのをさへ二三見せて貰つた。

秋水氏の生母は多治子さんと云つて、なか〳〵しつかり者であつたらしい、例の事件がいよ

いよ縺れて來たので、彼女は七十歳の老軀を提げて上京した。そして獄中で秋水氏に會つたが涙一滴こぼさないで、『しつかりしてゐなさい。』と誡めたさうである。

多治子さんが秋水氏に訣れたのは十一月の廿八日であつたが、其後間もなく、秋水氏は堺利彦氏に手紙を送つて、『僕の母は少しエライところがあるやうだ。どうして僕のやうな豚兒が出來たらう。馬鹿な子程可愛いと云ふから涙は出さないでゐても、餘程悲へてゐたに違ひない。歸國してから屹度病氣が出てゐるだらうと案じられる。何しろ七十だからネ。兎に角幾年か母の壽命を縮めたかと思ふと少からぬ心の痛みを感ずる。』云々といふ手紙を送つたのであつた。

ところが多治子さんは、十二月の二十八日に土佐の中村町で亡くなられた。其の電報が辯護士の手に届いたのは、丁度大審院法廷内で最後の辯論のある日であつた。で、磯部四郎、花井卓藏、川島仟司の三氏は、法官も被告も退廷したあとで、秋水氏一人だけを殘して、其の訃報を傳へる事になつた。けれども三人は斯うした境遇にゐる秋水氏に對して其の悲しき知らせを打明けるに忍びなかつた。しかし、年長者の磯部氏は思ひ切つて、

『おつ母さんは亡くなられましたぞ。』と言つたまゝ電報を秋水にみせた。すると秋水氏の顏

は見る〳〵蒼ざめて、暫く無言でゐたが、漸くにして頭をあげ、辯護士達の顏を一通り見渡したあとで、電報の送達紙に對して、生きてゐる母に物言ふ調子で、『却つて幸福です。』と唯一語だけ言つて俯向いてしまつた。その有樣を見た時涙脆い磯部氏は先づ泣いてしまつた。花井氏も川島氏もたうとう一緒に泣いてしまつたのであつた。

多治子さんは嘗て秋水氏と一緒に本鄕に居を構へてゐたことがあつた。秋水氏が演說會などに出かけて行つたあとで、檢束されたのではないか、何か不意の出來事に會つたのではないかと心配のあまり、お茶の水橋の上までそれとなく迎へに行くのが常であつたといふ。

明月や行くともなしに二三町

これは多治子さんが、秋水氏の事を思ひ案じて、お茶の水橋の上に來た或夜のロずさみであつた。

載酒江湖既隔年、囚衣今日又因緣、獄裡禪兼病裡禪
それは秋水氏が十二月六日の作であつたが、母の訃に接した翌月の元旦には、
獄裡泣居先妣喪、何知四海入新陽、昨宵蕎麥今朝餅、添得罪人愁緒長

と吟じた。此詩の後半は、彼の在獄中の所感といふよりも寧ろ消息と云ふべきものである。

一月十八日に判決は下つた。そして直ぐ二十四日に彼は斷頭臺の露と消えた。

秋水氏と契りの深かつた管野スガ子氏は、

やがて來ん終の日思ひ限りなきいのちを思ひほゝゑみてゐぬ

といふのを辭世の句として殘してゐるが、秋水氏の辭世の詩は、

昨非皆在我、何怨楚囚身、才拙惟任命、途窮未禱神
死生長夜夢、榮辱大虛塵、一笑幽窓底、乾坤入眼新

といふので、これは辭世詩といふよりも寧ろ彼の絕命詩といふのが至當である。

秋水氏は和歌をも作つた。その伊勢大廟に詣でた時の感詠一首が私の手許にあつた筈だが、探しても見當らない。よく考へてみると、それは長岡義雄氏に差上げたやうな氣がする。

『爆彈のとぶよと見てし初夢は……』の一首は今更言はずもがなのものである。

私の机の抽斗に小い卷物がある。それには、

江湖落托十年游、心似白雲身似鷗、半卷舊詩兒女淚、滿窓夜雨古今愁、長安雪月吾將老、大

陸干戈事未休、同學群才投筆起、何人第一取封侯、

甲辰孟春書懐　秋水生

とあつて、『傳印』『秋水』の二印が捺してある。詩の可否巧拙は私にはわからないが其の字は實に立派なものである。

甲辰孟春と云へば明治三十七年に當る。日露戰爭の將に酣ならんとする時である。

非戰論を唱道せんが爲に萬朝報社を退き、平民新聞を發行して大いに奮闘しつゝある時の作としてみるなら、『同學群才投筆起、何人第一取封侯、』の結句が、間接に大なる氣を吐いてゐるやうにも思はれる。

秋水氏と私とは、あまり親しい關係を保たなかつたので、これ以上詳しい事は知らないが、私が大正十二年の春、高知縣へ行つた時聞いた話によると、秋水氏の死後十三年來年々彼の墓を訪ねて、

『私は秋水先生の萬朝報時代の愛讀者です。』と云つて、香奠を置いて行く者が年々五六人づつはある、といふ事であつた。そして其人達は大抵彼の墓碑の傍に立つて寫眞を撮つて行くさ

ちである。

さうかと思ふと、秋水氏が最後の著述『基督抹殺論』を書いた湯河原の岫雲樓に宿つた福井學圃といふ漢詩人は、

『青山依舊水鄰々、想見高樓著述辰、天地何曾容大逆、吾悲昭代出斯人。』と吟じて悲しんでゐる。

米を食ふ我等

麥を常食とする國が東にある。食ふべき米が足りないので、我等の同胞は其の東の國へ出稼ぎに行く。しかし、麥を常食とする國民は我等の同胞を排斥する。排斥されながら、行くところがないので、我らの同胞は東の國で、ちつと我慢してゐる。

紅粮を常食とする國が西にある。其の國の青年達は一日廿錢から五十錢までの賃金で喜んで働く。そして健康に生きて行く。我等の同胞が滿洲で經營してゐる事業は、此の紅粮を常食とする青年達の手によつてのみ維持される。

麥と紅粮との間に挾まれてゐる我等米を食ふ同胞。

東に向つて發展せんとすれば排斥される。西に向つて進まんとすれば、そこには到底勝つ事の出來ない強い勞働者がゐる。

考へなければならない。互ひに手をとつて考へなければならない。小い感情を捨てゝ考へなければならない。そして仲よく生きて行く方法を考へなければならない。仲よく無事に生きて行く事以外に、我等に必要な政治も道德も宗教も文學もない。

麥と紅粮との間に挾まれてゐる我等米を食ふ七千萬同胞が、仲よく生きて行く方法の一つは互ひに心と心とを深く知り合ふことである。

全地の人間總てが平和のうちに暮す日は、まだなか〳〵來ない。けれども、せめてもに、麥は麥同志、紅粮は紅粮同志、米は米同志だけでも、仲よく幸福に暮して行きたいものである。

時代を流るゝ二潮流

アダム、エバの一族は更に分れてカイン族アベル族となつた。アベル族は水草を追うて轉々移住する牧羊者であつたが、カイン族はもう地を耕し穀物果樹を栽培する農業を營んでゐた。然るに此の素朴なるアベル族と、文明的なるカイン族とは遂に大衝突を來して、アベル族は滅亡に歸した。

爾來カイン族は段々と發展して、トバルカインの時代には銅器鐵器兵器が盛に造られ、吹笛彈琴の名手も出でゝ文明の空氣はカイン族の中に漲つた。けれどもそれと同時に攻取掠奪の風が熾に行はれて、勇者は刀劍弓矢を以て國々を襲ひ、智者はバベルの高塔を築いて神を其の位より追出さんと計畫する程の無謀の企を始めた。アダム、エバの食つた智惠の木の實の毒液は底止する所なく人々の心に廣がつたのである。

程經てペルシヤ灣付近から大志を抱いた一人の移民政策家が現はれた。彼は劍を以て天下を征服しようとはせず、智を以て神を追はうともしなかつた。彼は一門廣き族長であつて、深く神を恐れ一族を愛する即ち敬神愛人主義の男で其名をアブラハムと言つた。

アブラハムの一族は牧羊者であつた。彼等は羊、山羊、牛、駱駝、驢馬などの群を畜ひつゝ水草を追つて遙か西南アラビヤからエヂプトまで經巡つた。旱魃や飢饉と闘ひつゝ運を神に任せ同胞相愛しつゝ二十餘年間流れ流れて今のユダヤ國なるカナンの土地を永住の場所と見定めたのである。

平和と勞働とは彼れが移民政策の標的語であつた。神を恐れ同胞相愛するは彼等の憲法であり宗教であつた。そして一族が段々と榮え、恰も一國家の大を成すに至つた時、彼は思つた。『世界を征服するものは劍でなく知識でない。敬神、平和、勞働、此の三つは正しく全世界を征服する武器である。見よ我が一族は全世界に擴がる。そして我は世界萬民の父と言はれるに至る。』これはアブラハムの空想でなく、一族中の信念となり理想となつた。

我汝を大なる國民となし、汝を惠み汝の名を大ならしめん。汝は幸福の基となるべし。
我汝と汝の後の子孫に、此の汝が寄寓せる地、卽ちカナンの全地を與へて永久の產業となさん、而して我汝等の神となるべし。

とはアブラハムの心に深く刻んだ神の託宣であつた。神は我れを斯く爲し給ふといふ確信が遂にエホバ教といふ一の宗教となつたので、從つて宗教の儀式も出來、遂には此の宗教を信ずる者のみが神に選まれた者であるといふ自尊心を起さしめたのである。

アブラハムの子イサクも孫ヤコブも三代相嗣いで平和、敬神、勞働の趣意を曲げなかつた。ヤコブの末子ヨセフが、ふとした事からエヂプトに行き遂に國の宰相となつた時も、神を敬ひ平和主義をとり、勞働を奬勵した爲に、從前武斷政治の下に苦しめられて居た國民は、起死回生の思をなして其の善政を感謝した。

一とせカナンの國に飢饉があつて牧畜業のアブラハム族は殆んど飢渴に迫つたが、ヨセフの爲にエヂプトに招かれ一族はこゝに移住して、四百三十年間故鄕に歸らず、遂にエヂプトの住民となつた。けれども彼等は自己のアブラハム族であるといふ事と、其の主義とは飽まで捨て

なかつたのである。

エヂプトに在るアブラハム族は百五六十萬にも達したらう。屈强の男子のみが六十萬人と註せらるゝ程であつたが、彼等の平和主義を守つて勞働を厭はないのを善い潮にして、武斷なるエヂプト王は彼等を驅使して奴隷とした。

時にモーゼといふ一大思想家が現はれて、此の一族を救ふ爲に四十ヶ年間の苦心慘澹の結果一大同盟罷工を成就して一族百五六十萬アラビヤの曠野に一團を組織して、飢渴と戰ひ四周の蠻族と戰ひつゝ久しく頽れて居たエホバ教を恢復し、民心をエホバてふ一神に集中せしめてこゝに國是を一定した。

モーゼの死後ヨシュアは武斷政治を執つて、アブラハムの開拓したカナンを征服し、兎も角一族を率ゐてカナンに歸つたが、ヨシュアに追立てられたカナン人の生活狀態は、到底粗野朴訥なる牧羊者たるアブラハム族の企て及ぶ所ではなかつた。そこで農業を主とする文明のカナン人は、突飛なる蠻勇を振ふアブラハム族の士師に幾度か驚かされつゝもカナンの國には最早拔くべからざる根抵を據えて居たのであるから、アブラハム族もいつしか半牧半農の民となつ

たのである。

基督降生前凡そ一千年餘、アブラハム族は其の家憲として居た敬神、平和、勞働の三條中平和の一條を武斷と改めたいと思ひ出して、時の豫言者サムエルに對して『我等にも王を與へよ』と迫つた。そしてサムエルの切なる忠告を聞入れないで、サウルといふ强力の男を擁して王とした。しかし、其のサウルは、王とは言ふものの事あれば軍を指揮し、事無ければ牛を叱して田を耕すといふ半王半農であつた。

既に王ある以上は國の領土を少しでも廣めなければならない。領土を廣める以上は四方を侵略しなければならない、侵略には兵士を要し武器を要するので半王半農のサウルも全く耕作を廢して作戰防禦の計略のみを考へるやうになる。鋤を執つた手には鎗を提げ、鍬を握つた手には盾を待つ事になつた。隨つて命令を布くには威嚴を要するといふので、錦繡は身に纏はれ金冠は頭に戴かれ、白馬銀鞍堂々として將軍を指揮し百官を脆伏せしむるに至つた。

サウルの後に立つたダビデは蓋世の勇を以て四隣を征服し、ダビデ大王と呼ばれて其の英名を地中海の東岸に轟かしたのである。是に於てアブラハム族の特長は殆ど其の全部を失つて辛

うじて敬神の念だけが保存せられてゐたが、國民は悉く馬を飼ひ劍を磨き、平和を標傍して他の奴隷たらんよりは武威を以て他を凌ぎ、額に汗して勞働せんよりは他人の刻苦に成れるものを奪ふが、得策であり愉快であると考ふるに至つた。

ダビデの子ソロモンが父の位を襲ぐに至つて、アブラハム族の全盛は其の極度に達した。彼は武骨一遍の王者ではなかつた、學識高く趣味も深く、婚を遠くエヂプトに結び、通商貿易を盛にし、諸國諸民をして世界の英主と仰がしめたのである。

彼は宮殿と邸宅とを建築する爲に使役した石工は八萬人、運搬者七萬人、これが管督者たる工事長は三千三百人、而して前後二十年を費したのである。

ソロモンは父の執つた武斷政治を捨て平和主義を恢復した、そして神を敬うた。しかし彼は質朴な勞働を奬勵しないで、有りつたけの知慧を絞つて國利を計つた。神を敬ひ平和を主とし知識を求むるのが彼の標榜する所であつた。けれども彼一人が王者の快樂に醉ふ爲には全國民が甚だしき疲弊を負はなければならなかつた。そして萬民は其の重荷に堪へなくなつてしまつたのである。

サムエルに對して國民が王を求めた時、彼は口を極めて注意を與へたのであつた。

汝等を治むる王は、汝等の男子をとつて己れの車の御者とし騎兵とし車の前驅とする。又た己れの爲に千人の長五千人の長として、地を耕させ作物を刈取らせ、武器を作らせる。汝等の娘は香料製造者とせられ、下女とせられ、パンやきにせられる。

汝等の田畑、葡萄畑、橄欖畑の最も善き所を取つて其の家來に與へ、汝等の穀物と葡萄とは其十分の一を官吏と家來とに與へ、汝等の下男下女、肥えた牛、達者な驢馬は遠慮なく徵發せられ、汝等の羊は十分の一を取られ、果ては汝等悉くを下男下女と見るであらう。

此注意患告は民の耳に尙新であつた。そこでソロモンの榮華中にアブラハム族には左の二系統の議論を生んだ。

アブラハムに對する神の宣言約束はダビデ、ソロモンによつて成就せられたのである。ダビデの子ソロモンの榮華は神の榮光の表現である。ソロモンの建てた宮殿は全世界人類の宗教的中心であつて、エルサレムの都は全世界人類の政治的中心である。だから人類に對する神の命令はエルサレムの神殿より發し、政治上の王の命令も此の都から地の極まで發せらるべきであ

る。これは謂ふ所の南朝派、卽ちアブラハムの正統を主張する保守派の議論である。しかし、自由派は、アブラハムに對する神の約束は一族全般に對するものであつて、ソロモン一人の榮華の爲に民衆悉くが血稅を徵せらるゝべき筈のものではない。宗教的中心は決してエルサレムの宮殿ばかりでない。神は何所でも禮拜出來る。政治上の命令もソロモン一個の智囊からのみ出るべき筈のものでなく、國民全體が共に考へ共に暮して行くのが眞の平和主義で、決してダビデの子一人が政權を握るべきものではないと主張した。

輿論は斯の如く王黨民黨卽ち保守自由の二派に分裂せんとしたが、ソロモンの權威はよく國論の沸騰を抑へ得たのであつた。

紀元前九百三十三年、妻妾一千の榮華に耽つたソロモンは此世を去つた。隙を窺つて潰裂せんとしてゐた輿論は、彼の崩後忽ちに沸騰せざるを得なかつた。

年少の王レハベアムの前には、民黨の輿論を代表した論者が現はれて、

『汝の父は我らの稅金を重くした。けれども今後汝の父の難き公役と、汝の父が我らに負はした重き稅とを輕くするなら、我らも汝に事へるであらう。』

と言つた。宮中の大老等も民の要求を是認してレハベアムを諫めて言つた。

『汝は王者であるが、今日此の民の僕となつて、民に事ふる覺悟であつたなら、彼等も永く汝の僕となるであらう。』

しかし、レハベアムはこれを用ひなかつた。彼は倨傲尊大の言葉を以て民に答へたので、民黨は、

『イスラエルよ汝等の天幕に歸れ、ダビデよ今汝の家を見よ。』 と口々に呼びつゝ金色燦爛たるダビデの家をあとに、彼等は自己の天幕に歸つた。

豫言者アヒヤもソロモンの政治に感服しない一人であつた。彼は豫め斯る變事の起るを期してゐたからヤラベアムといふ青年を奬勵し、民黨を率ゐて起つべきを勸め、エヂプトに逃れて時の到るを待たしめてあつた。

是に於て民黨はエヂプトからヤラベアムを迎へ、彼を主將としてイスラエル十二州の中十州を率ゐて新に王國をたて、ソロモンの子レハベアムはユダとベニアミンの二州だけを率ゐて父の位を襲ぎダビデの王政を嗣いだのである。さしも榮華を極めたソロモンの政治も、其の死後

未だ死體の溫きに早くも國は、南朝（ユダヤ國—ダビデ王黨—レハベアム。）北朝（イスラエル國—民黨—ヤラベアム。）の二派に分裂した。北朝は宗教にも政治にも極端なる中央集權を厭うて二國を樹て、先づ自由に禮拜所を設け、後サマリヤに都を定めゲルジム山で神を禮拜した。南朝ダビデ王黨は北朝民黨を亂臣賊子倶に天を戴くべからざる者として憎むのみならず、人非人として極端に之を卑しめ、『町に死ぬものは犬に食はれ、野に死ぬものは空の鳥に食はれよ。』と咀つたものである。

自由主義を標榜した北朝も、いつしか南朝に對抗する必要から武斷政治に陷つて、王者十九代二百十一年間に王の系統を改むる事九度、少しく秕政行はるれば直ちに有力の士が起つて王を殺し其位を奪ふといふ有樣になつてしまつたのである。末葉に至つて、アモス、ホゼヤ、ナホムの慷慨淋漓たる豫言者が現はれ、ヤラベアムが、『イスラエルよ汝の天幕に歸れ。』と叫んだやうに、國民をして再び、平和、勞働の主義を守らしめようとしたが、到底力及ばずして前七百二十二年、アッスリヤ軍の爲に國は滅され民は多く敵地に囚へ移されてしまつたのである。

これに反して南朝ダビデ王黨は、ユダの小國を率ゐながら二十代三百四十七年の長き歳月間皇統連綿として絶えなかつたのは、此の國民をして益々エルサレム中心説を固執せしめる理由となつたのである。北朝滅亡後百三十六年を經て南朝も遂に、バビロンに移されてしまつた。けれども其國の將に滅びんとするや、イザヤ、エレミヤ、ハバクク、ゼバニヤ等の豫言者が交交起つて國民を警告し、強敵四方に集ると雖も必ず救世主の出現すべきを敎へ囚移後國民が敵國の地に悲痛の涙に暮れつゝある時、豫言者エゼケル等は血涙を揮つてユダ民に未來の希望を説き、假令如何なる死の谷の影を歩むとも決して失望せず神の惠を待つべき事を説いた。

南朝ダビデ王統は絶えた。しかし乍ら國民の腦裡には、異日ダビデ王統よりダビデの子ソロモンの如き大英主現はれて、アブラハム族の大勃興すべき事を深く刻まれたので、遂にそれが一の信條となり宗敎となつたのである。

かくて、南朝の民は異鄕の山腹にエルサレムの宮殿を慕うて泣き、敵國の河邊に聲を放つて救主の出現を祈つたのである。しかし僅かに故鄕に歸つてエルサレムの宮を再興したゞけで、ペルシヤ、グリイキ、スリヤと大きな敵の手は彼等を抑へて散々に苦しめた。

紀元前百六十八年、轉々としてユダヤはスリヤの領地となつたが、匿名の豫言者が、ダニエル書を書いて國民に大なる刺戟を與へた結果、憂國の志士マカビースが孤軍奮闘僅に一時の獨立はしたものゝ、前六十三年ポンペイの爲に掠取せられて遂にロマの屬國となつてしまつた。

國民は蒸籠で蒸さるゝやうな思ひに惱まされ、救主來れよかしと待ちつゝある時、旱天の黑雲に乘じてナザレの寒村にイエスは生れた。其の宗敎的天才は直ちに彼をして神にまで達致せしめた。

イエスは年三十始めて神の國の福音を述べた。彼の心には南北兩朝の何れに偏すべき思想が無かつたに拘らず、國民は彼を以て直ちに渴望しつゝあつた南朝ダビデ王政の恢復者たる救主として祭りあげてしまつた。そして『ダビデの子よ』と呼びつゝソロモンの榮華を再び繰返さしめんとした。當時北朝イスラエルも同じくロマ政府に屬しながら、やつぱり自國の南朝とは犬猿不啻の間柄であつた。自由主義に失敗した民黨のイスラエル、サマリヤ人もやはり救主を待つて居たらしい。ナザレの一木工の子たるイエスが一たび起つて其衷心を披瀝するや、南朝は彼を『ダビデの子』と仰ぎ、北朝サマリヤ人も彼を『メシヤ＝救主』と崇めた。

然るにエスはエルサレムの宮殿を、世界人類の神を禮拜する宗教中心だなどゝは說かなかつた。自分はソロモンの位に產する人だとも敎へず、異邦人にも北朝の人にも南朝の人にも同じ愛を施した。そして正直に惡を惡と責め善を善と稱揚した結果、遂に南朝派の人々によつて、彼を以てエルサレムの宮を毀たんとする北朝一味の徒なりとして磔刑に處せられたのである。

エスの出生によつてエルサレムの宮殿は今や全世界に分散して建てられ、人々の心を以て至聖所卽ち奥の院として居る。故に結果から見ればエスは北朝派の理想を完成した人といふべきで、當然南朝ダビデ派に殺さるゝ理由をもつて居たのである。

アブラハム族の理想は今や主觀的に現實となつた。これを客觀的に縮圖に實現せねば承知しないのが南朝派のユダヤ人である。

外出

日和には木履といふ天の浮舟に乘つて、塵と芥との海を渡り、雨天には高下駄と稱する鶴嘴を足に縛り着けて、根氣よく道路を堀返す日本人の住む東京の都。雨の降つた時、雪の解けた時、家と家との間に川が出來、田圃が現はれる。田舍の子供が父に伴れられて東京に出た時、『ちやん、東京の田圃は、どうしてこんなに細長いの？』と問うたといふのは古い話、さる西洋人は、

『これは道路豫定地ですか。』と尋ねたとやら。何といふナサケない道路でせう？

こんなに路の惡い上に、人口は限り無く殖える、車馬は益々多く往來する。夫れに道路の手入はと言つたら、草餅に黃粉をまぶしたやうに、ばら〳〵と砂利を置くだけ、高下駄といふ鶴嘴の齒が何寸あるかを計算せずに砂利を撒いたつて駄目である。

雨の日、雪解の日、道を歩くといふ事は、餘程頭を痛める事である。假令俥に乘らうが、自動車に乘らうが、平氣でゐられる人は、よもやあるまいと思ふ。

私は思ふ。此の道路を此のまゝにして、今後十年もほつて置けば、市民はみんな狂人になるか、さもなくば騒動が起る。

雨の日に電車へ乘つてみると、まるで川のやうに泥が流れてゐる。洋服を着て長靴を履かない人は可愛さうに、高下駄の爲めにズボンの裾を泥だらけにせられる。高下駄を履いた人でも其の下駄の歯の低いものは、高いものゝ爲に着物の裾へべつとり泥を塗られる。今に、高下駄にも自動車のやうな泥除を着けよといふ訓令が出るかも知れない。

晴天の日は電車が無茶苦茶にこみ合ふ。老人や婦人に席を讓つたなどとは、童話かお伽噺にでもありさうな昔の話、車掌運轉手に親切なれと言つた所で、何で親切心が起されよう。あんな仕事を三年五年勤めて、狂人にならぬとは、日本人の頭も隨分頑強に出來てゐる。

町へ出るのは樂みだ。町から郊外へ行くのも樂みだ。しかし悪い道と、こみ合ふ電車とが共の樂みを全然打毀してしまふ。致方かないから家に閉ぢ籠つて、碌でもない事を考へる。

私は思ふ。此の電車を此まゝにして、今後十年も改良しなかつたなら、市民はみんな狂人になるか、さも無くば騒動が起る。

『こんな事から、人心の悪化して行く事に氣がつかないやうでは、政治家たる資格がない。何よりも先づこの道路をよくして見るがよい。きつと日本人の思想が穩健になるに相違ない。』

私は外出のたびに、そんな事を眞面目に考へる。

其夜の話

カフエーユニオンが有樂町の鹽瀨本店の二階にあつた頃だつた。雪の降る或日の晩、其所で怪談研究の小集會があるといふ通知を受けたので、私も夕方から出かけて行つてみると、もう十四五人の出席者は四角なテーブルを圍んで頻りに語り合つてゐた。

私はペチカの榜へ椅子を引つ張つて行つて、默つて皆の話を聽いてゐると、ドアの近くの椅子に腰を卸してゐたN君は、ずうつと一座を見渡して、

『これは小説家のM氏から聞いた話だが、凡そ怪談といふ怪談の中これ位物凄い怪談は無からうと思ふ。其の話を一つ御紹介致しませう。』と言つた。M君は心靈學叢書の執筆者であり、其の性格から言つても、決して出たらめな事を言ふやうな人では無いので、一座の面面はみな一度に鳴を靜めてN君の方を見た。

一宗教家の生活心理

いやで堪らない墨染の衣を着せられて、小僧々々と罵られ輕蔑されて成長した貧乏寺の沙彌でも、遂には宗教的に眼覺める時が來る。そして本當に佛の道を說く身の幸福を感謝する時代が來る。お札配りをして乞食のやうな眞似する修驗者の弟子にも、いつしか神佛の靈驗を適確に信ずる時代が來る。何の意味も無く友達に誘はれて、基督教會の門を潜つた靑年、たとひ夫れは宣教師から無月謝で英語を學んで見たいといふ、サモシイ心根からであるにしても、いつの間にか神といふ事を知り基督といふ事を知つて熱心な信者になる。夫れらが所謂、僧侶、修驗者、信者といふものであつて、各々熱心に自分の宗教を世界唯一の宗教だと思ふ。私は此の時代を妄信時代と名づけたい。

妄信時代の特長は熱烈である。彼等は自己の宗教を最高至上の權威だと思ふ。刀鋸鼎鑊前に

其夜の話

カフエーユニオンが有樂町の鹽瀨本店の二階にあつた頃だつた。雪の降る或日の晩、其所で怪談研究の小集會があるといふ通知を受けたので、私も夕方から出かけて行つてみると、もう十四五人の出席者は四角なテーブルを圍んで頻りに語り合つてゐた。

私はペチカの榜へ椅子を引つ張つて行つて、默つて皆の話を聽いてゐると、ドアの近くの椅子に腰を卸してゐたN君は、ずうつと一座を見渡して、

『これは小説家のM氏から聞いた話だが、凡そ怪談といふ怪談の中これ位物凄い怪談は無からうと思ふ。其の話を一つ御紹介致しませう。』と言つた。M君は心靈學叢書の執筆者であり、其の性格から言つても、決して出たらめな事を言ふやうな人では無いので、一座の面面はみな一度に鳴を靜めてN君の方を見た。

『これは所謂怪談ではなく、日本の國に、しかも明治年間に立派な高等教育を受けた人が實際ぶッつかつた話です。』と前提してN君は次のやうな話をした。

『明治四十何年の頃ださうです。仙臺の第二高等學校の學生が、卒業試驗の間際に、必死になつて勉強してゐますと、夜の一時頃に後の唐紙を音も立てずに、すうッと左右に開いたものがあつたのです。今頃忍び足で自分の室へ入つて來る者のあらう筈はないと思ひ乍ら、ひよいと頭を捻ぢ向けてみると確かに唐紙があいてゐる。然し其所には誰も來ては居ない。で、誰だい？　と呼んでみると、次の室からまだ一度も見た事の無い、瘠せ衰へた青年が、蒼ざめた顏をして夢のやうに入つて來た。そして、(どうも御無沙汰を致しました。お忘れでございませうが私は岐阜の中學で、あなたと同級生であつた甚中と申すものでございます。今晩はあなたに御願ひがございまして、こんな夜更にわざわざお邪魔を致したのでございます。)と言つたのですると學生は始めて安心して、(さうだつたネ、君と僕とは一年ばかり同級に居た事がある……しかし君は大變瘠せてゐるネ。どつか惡いのかい？　全く見違へたよ。)と快活に言つたが、甚中は別に笑ひもせず、依然として夢のやうな姿のまゝ、(お願ひといふのは外でもありません。

明晩の正十二時に雀の森の石燈籠の傍まで是非お出でを願ひたいのでございます。）と言つたと思ふと、ふいと甚中の姿が消えてしまつたのです。學生は自分が餘り勉強し過ぎた結果、斯うした無氣味な幻を見たのだと思つたが、さてどうしても眠られない。で、たうとう朝まで一睡もせずに起きてゐて偖試驗場へ出て行つたが、頭がぎん〳〵と痛んで致樣が無い。』

N君がそこまで話した時、私の直ぐ前に居た評論家のH君は『正體は其所にあるんだナ』と言つて私の顏を見た。私も微笑を洩し乍らH君に無言で同意した。

『其の學生が餘り蒼い顏をしてゐるので、受持の教師は親切に彼を下宿へ歸らせて、あとで追試驗を受けさせるやうに取計つてくれたのです。で、彼は下宿に歸つて、蒲團を引被つてぐッすり寢込んだが、眠を覺ましてみると、もう夜の十一時半でした。其時彼は昨晩甚中から十二時に雀の森へ來てくれと賴まれた事を想ひ出したのです。けれども、どうして、どうして、こんな闇夜に町外れの森へ行くなんて、そんな勇氣はありませんでした。そこで彼は又蒲團を引かぶつて寢てみましたが、寢ようとすればする程、甚中の聲が耳の中から蘇つて來るのです。

で、勇氣を出して表へ出てみると、何となく氣が淸々して自然と足が雀の森の方へ向ふのです。』

其時私はH君の顏を見上げ乍ら『夢遊病者なんですネ。』と言つた。H君は時代錯誤の長い鬚を捻り乍ら『狐につまゝれたのかも知れない。』と云つて首をすくめた。

『いつの間にか彼は雀の森へ行つてしまつたのです。そして鳥居をくぐつて、石燈籠の所へ行つてみますと。ぼんやりと燈つてゐる燈火の前に、痩衰へた甚中が立つてゐるのです。そして白い手をあげて頻りに彼を手招くので、（願ひたい事があると云つたのは、何です？）と云ひ乍ら、彼は元氣を出して近寄ると、甚中は小さい聲で（誠に申兼ねますが、此の黑絲で、私の藥指を縛つて下さいませんか。）と言つたのです。彼はそれを聞いた時、事の意外に驚いたが案外平凡な要求だつたので、燈火の光りに照して、左の手の藥指を黑絲で堅く結んでやりました。すると甚中は、有難うございます、有難うございますと云つて頻りに手を合せて拜んださうです。夫れから彼は一目散に下宿へ逃げ歸へつて、ぐッすり寢ましたが、翌朝御飯を食べてゐますと、表街道を多勢の人が、どん〳〵と東の方へ走る跫音が聞えるのです。何だらうと思つて障子を開けてみますと、通りかゝつた高等學校の同級生が、（おい、雀の森に人殺しがあつた

と云ふ話だ、行つてみないか。)と言ふのです(人殺し? 殺されたのは男かい、女かい?)と訊きますと、(男ださうな、鳥居の中の石燈籠の傍に倒れてゐるといふ話だ)といつたので、彼は何だか其の噂が自分に關係がありさうに思はれてならないので、取るものも取あえず其の同級生と一緒に雀の森へ走つて行つたのださうです。』

其時Hは『いや、其の御當人が立派な狂人だ。つまり狂人の妄想だね。』と私にさゝやいたので、私も默つてうなづいた。

『所が雀の森へ行つてみると、果して石燈籠の下に一人の男が倒れて死んで居ました。しかし彼の見た甚中のやうな、痩せた男ではなく、また彼のやうな青年ではありませんでした。夫れはもう四十恰好のでッぷり太つた洋服姿の紳士で首に麻繩をぐる〳〵卷にしてありました。然るに不思議な事には、其の紳士の左の藥指を、紺の木綿絲で、しかと縛つてあつたのです。』

一同の顏には、小いさわめきがあつた。それは前の晩に其の書生の縛つた黑絲が、妙な所へ表はれて來たのを驚いたのであるらしかつた。

『其の學生は非常に驚いたのです。彼は殆ど氣が狂ひさうに驚いたのです。で、殘りの試驗も

打ちやらかして、すぐ岐阜へ歸つて甚中の事を調べてみると、甚中はもう二年前に死んでゐるといふのです。そこで彼はわざ〳〵甚中の鄕里である田舍の村へ行つて、其所の村役場で調べてみると、事實は斯うなんです。元來甚中といふ男は、子供の頃から文章が非常に達者で、村でも神童と云はれる程の男だつたので、中學を卒業すると直ぐ或新聞の記者になつて、妹と二人で町へ出たのです。所が社長も彼の才能を認めて重く用ひてゐたが、半年一年と經つうちに、社長は甚中の妹に結婚を申込んだのです。成程自分の使はれてゐる社長から妹を嫁にと云はれるのは名譽には相違なかつたが、どうも社長を自分の義兄として考へてみると、品性といひ學問といひ、どの點から見ても、夫れは有難い事では無かつたので、甚中は職業を失つてもいゝ覺悟で、斷然其の結婚談を撥ねつけてしまつたのです。すると間もなく甚中は新聞社を廢されたばかりか、社長の筆で甚中兄妹は世にも忌はしい畜生道に陷つてゐるといふ揑造記事を新聞へ書き立てられたのでした。さア、さうなると其事が町中の評判になつて、尾に鰭つけていろんな惡口を言ひ觸らされたので、かはいさうに甚中兄妹は世間へ合せる顏が無いと言つて、變死してしまつたのです。さア、さうなると人間といふものは不思議なもので、今まで甚中兄妹の惡

口を言つて居た者までもみんな甚中に同情して、社長の惡口をさかんに言ひ出したのです。そこで社長もさすがに良心に愧ぢたと見え、たうとう新聞經營を友人に一任して行方不明になつてしまつたのださうです。所が其の新聞社長といふ男の人相を調べてみると、夫れはどうしても雀の森で死んでゐた男に違ひないのです。』

N君は其處まで言づて話を切つた。

最初から非常に興味をもつて其の話に耳を傾けてゐたフロイド研究者のY君は『つまり甚中の靈魂が敵を討つたといふんだが……さて其話はどんな心理から割出された妄想だらう？』と云つて頭をかしげた。『うん、面白い話だ。』と老文學家のB君も感心したらしく言つた。

すると、N君と差向ひになつてゐたS君は、非常に嬉しさうな笑を兩の頰に浮べ乍ら起ち上つた。そして物優しい女のやうな聲で、

『實に面白いお話を承りました。私は產れてこのかた、今晩程しみじみ面白いお話を承つた事はありません。實を申しますと、其のお話は私が十八歳の時、中學の英語の教師から聞かされた話で、私は夫れがあまり面白かつたので、其後上京した時小說家のM君に夫れを話しました。

夫れから是非其の甚中君の亡靈を見たといふ學生に、會つてみたいと思ひまして、わざ〳〵岐阜まで行つて、あちらこちらを調べてみましたが、一向に手懸りがありませんでした。そこで中學校へ行つて、卒業生の名前を調べてみましたが、甚中といふ卒業生はかたで無いのです。新聞社長で行方不明になつた者も無い……御苦勞千萬にも、私は仙臺まで行つて、三日も滯在して、其の雀の森といふのを調べてみましたが、全體雀の森といふ所が、仙臺附近にありやアしないのです。私は中學校の教師から、そんな話を聞かされたばかりに、二百圓近いお金をつかつて、散々時間つぶしをしたものです、しかし唯今N君のお話を默つて拜聽してゐるうちに私は賢明なる諸君のお顏色を詳しく拜見致しました。そして諸君がみんなN君のお話に釣込まれてゐらつしやるのを見た時、私は始めて、私ばかりが馬鹿ではないぞ！　と思つて非常に勇氣を得た次第でございました。』

と言つたので、一座の人達は、一人殘らず皆な聲を合せて、どッと笑ひ崩れた。

一同の笑ひ聲がまだ消えないうちに、S君は更に言葉を續けて、

『のみならず、私は今晩心理學上非常に有益な發見を致しました。夫れは何であるかと云ふに

元々私が中學の先生から聞いた話は、もつと／＼短い簡單な話でした。私が夫れをM君に話す時は餘程私の嘘を添へて置きましたが、それでもまだ今のお話の半分位の長さでした。多分M君は私からきいた話へ更に一二分の修飾をしてN君に話されたのであらうし。それをお聞きになつたN君が今晩此の席でお話しになる時、更に夫れを二三分扮飾してお話しになつた事と思ひます。所で最初私に話した中學の先生に先年はからず巡り合ひまして、其事を訊いてみますと、それは先生が西洋の講談倶樂部と云つたやうな雜誌にあつた短い話を、自分の空想交りに私に話つたのだといふ事でした。』と言つた。するとY君は、

『嘘もいゝ扮飾もいゝ。西洋の話に石燈籠が加はつたりなんかするのに不思議はないが、其の藥指の紺の木綿絲は全體何だらう？　そいつの起原が解らないぢやないか。夫れは研究に値するよ。』と机をたゝき乍ら言つた。

其時私の頭の中では、記憶の扉が急に開けて、意識の圍内から泛みあがつた一つの追憶があつた。で、私は起ち上つて、

『何でも明治四十一二年の頃だつたと思ひます。僕が紀州に居た頃、愛知縣か岐阜縣か、其邊

の養蜂家で、何とか會といふのを組織して、其會員となつたものは、紺の木綿絲で左の藥指を縛つて、會員の印にしやうといふ規約を設けた人がありましたよ。』と言つた時、S君は、

『さう言へば、其の中學の先生も左の藥指を黑絲で縛つてゐました！』と叫ぶやうに言つたので、一同は又た聲を揃へて笑つた。笑つたうちにも、フロイド研究者のY君の顏には最も嬉しさうな色が躍つてゐるやうに思はれた。

不思議なる事實

私は彼女と結婚して丁度二十五年といふ長い月日を經過した。私共は何の考へもなく、何等の理窟もなしに、單純に愛し合つて結婚したのであつた。相愛するといふ事は、趣味を共にするといふ事でも無く、信仰を共にするといふ事でもない。性格が似寄つてゐるといふ事でもない。私共の相愛した事は、本然的に、單純に異性と異性との魂が近づいただけの話である。そこに何等の理窟はない。

私共夫婦は容貌が違ひ、體格が違ふ。性質も違へば趣味も違ふ。私は家屋も食物も西洋流を愛するが、彼女は總て純日本流を好む。私は至つて理財の途に疎いが、彼女は財政の念に長じてゐる。私は放膽であるが彼女は極めてデリカシイである。私は西洋音樂を好むが彼女は淨瑠璃を聞きたがる。私は歌劇や新劇を喜ぶが彼女は舊劇を好む。だから日常生活に於て若し私が

タイランチックに振舞ふなら、二人の間は或は水と火のやうに相戰ひ相憎むかも知れない。家庭内に於る極めて小い事でも、嚴密に言へば常に二人の心には相反した陰翳を有してゐる。半日一緒に歩いても二人の心は相反した方に對つてゐる。けれども私は必ずしも總てを自己の思ふ通りにさせようとは思はない。と同時に必ずしも彼女の思ふ通りにする必要は無いと思ふ。私は私、彼女は彼女で互ひに自己を成長させて行く事が肝要であると信じてゐる。だから私が若し放蕩無頼であつて弱體な彼女の生命を短縮せしめる程、彼女を苦しめるなら、彼女は強いて私と共に居て、私の下劣な精神の爲に殉死せねばならぬといふ悲慘な理窟はないと思ふ。私は其時彼女に捨てられて行く事が至當だと思はねばならない。また彼女が如何ともする事の出來ない惡い女であるなら、私は私の尊い自己の個性を、一旦結婚したからといふ傳統精神の爲に、彼女と共に居て破滅させねばならないとは思はない。

私はさうした自由な考へをもつて彼女と同棲して以來、今日まで二十五年の長い間、しかも全然相反した性格であり乍ら、唯一度いがみ合つた事もなく大聲で呶鳴り合つた事もなく、無論毆り合つた事などはない。然らば彼女に對して物質上の安逸を與へたかと云へば、決して私

は彼女の身にも心にも富を滿たし得た事はなかつたのである。

私共の結婚した時一家の收入は十二圓であつた。爾來二十年間、私は遂に三十八圓以上の俸給を得る身分となる事を得なかつた。だから財政の事に就いては隨分彼女を苦しめた。私は結婚後十餘年間に、私自身の勞力によつて得た金錢で彼女に買つて與へたものは六十錢の前垂一つだけであつた。私自身も十七年間の牧師生活中、自ら新調し得た洋服は十七圓の背廣服一着と、七圓五十錢の夏服一着だけであつた。

彼女は毎月四圓乃至六圓の報酬を得て、四ヶ年の間幼稚園の事業を助けた。私は其の痩せ衰へた肩を聳やかし乍ら無邪氣な子供達に取捲かれて、小母さん小母さんと云はれてゐる樣を見て、幾度『悲慘だ！』と感じた事だか知れない。

『若し今、僕が彼女に求婚したとすれば、彼女は決して僕を振向きもしないだらう。』

さういふ事を眞面目に考へたことも、幾十回あつたか知れない。

私共の間には一人の男の子が生れた。けれども間も無く急性腦膜炎で亡くなつた。第二回目に姙娠した時、彼女は教會の腰掛を据つける爲に、大きな四人掛のベンチを三十脚も高い所か

ら取下した事によつて流產した。第三回目の姙娠に際して、彼女は餘程注意を拂つてゐた。けれども雪の日に野菜物を買ひに出かけて、本鄕追分町の通りで下駄の緒を踏切つて轉んだ爲に羊水膜が破れて、滿六ヶ月目で死胎を產んだ。そして其際、羊盤剝離の手術を受けてから、すつかり身體を毀してしまつた。

流產に伴ふ甚だしい貧血症と、夫れに原因する程度の神經衰弱は、たゞとう彼女を九死の境まで追落してしまつたのである。

彼女が何の爲に死の境を走りつゝ苦しんで居るのかといふ事を嚴格に考察した時、私は人間の夫婦間には、殺人に等しき大きな罪惡の行はれつゝある事を知つて戰慄した。私の在來の夫婦觀は根底から覆へつてしまつたが、偖科學的にも宗教的にも、マダ完全なる定義を得ないでゐる。

私は彼女が若しも結婚といふ事實に遭遇しなかつたならば、如何に幸福であつたらうかといふ事を痛切に感じる事がある。假令彼女が、私に百倍千倍する富の所有者と結婚したと假定しても、彼女は其の結婚によつて何等の幸福を得る事の出來ない程、弱き肉體の所有者であると

いふ事から逃れる事は出來ないのである。又私自身に取つても時々、彼女のやうな病弱な婦人と結婚した事は、一生の莫大な損失であつたと考へる事もある。しかし私は彼女と結婚して以來、其の結婚を憎んだ事は一度もない。よりよき事を望んで嘆いた事はあるが、後悔した事は一度もない。彼女も恐らく私から離れ去りたいと思つた事は一度もないだらうと思ふ。勿論私共は人間中の弱き人間であるから、結婚後二十五年の長日月間、清純な愛のみを捧げ合つて來たなどと大膽な虚言を言ふだけの勇氣は、私は勿論、彼女にも無いだらうと思ふ。二十二歳の時結婚して今日までの私の心の歴史は隨分多くの破倫と罪惡とで彩られてゐる。しかし私と彼女とは不思議にも今日まで互ひに根底から憎み合つた經驗をもたないで過して來たのである。

私は未定稿ではあるが、近頃斯んな事を考へてゐる。

『夫婦とは最も親しい友達同志である。最も隔意のない相談相手である。最も近く接し合つてゐる友人である。無遠慮に各自の心を打明けても、夫れが爲めに憎み合ふ事の少ない朋輩である。』

私は夫婦といふものゝ定義も知らず、結婚生活といふ事の意義をも知らない。しかし乍ら私

は私の家に、私と二十五年間同棲して、變らぬ友情を持續し得た一人の女性の居る事を證明する事が出來る。夫れは十餘年間に六十錢の前垂一つもらつて、毫も不足を言はない程私の家庭に忠實な婦人であり、私の爲に、男性通有の或慾望の犧牲となつて、三度死の境を走つても、夫れを怨みに思はない程、從順な彼女である。

私は彼女の父よりも母よりも姉よりも、遙かに長く彼女と同棲してゐる。そして私の彼女に對する友情は毫も衰へない。

私の生活歴史は、隨分變化に富んでゐる。隨つて私には多くの知人がある。けれども趣味の相違する爲に、境遇の同じからざる爲には、五年十年の交際すら打捨てゝしまつたり、甚だしきは主義主張が少しばかり違ふ爲に、淺ましい嫉視反目を投げつけ合つた事すらある。けれども私と彼女との友情は依然として結婚當時と毫も變らない。

私共は社會に對する體裁を繕ふ爲に、愛し合つてゐるやうに見せてゐるのでも無く、詩人達の云ふ戀愛の持續でもない。私共は何の理窟も理由もなく、斯うして一つの家に棲んで、親切に家事を相談し合ふ、無遠慮に各自の心を打明け合ふ友達にせられてゐるのであると思ふ。し

かも夫れは私の自由意志でもなければ、彼女の決心でも無い、私達二人は、私達の知らない強い大きな力の爲めに、斯うして相寄り相助け合つて居なければならないやうに、餘儀なくせられて居るのであると思はざるを得ない。

廣い日本に私といふものゝ存在の否定を心から悲しんで呉れる人は、恐らく彼女以外に五本の指を折る事は出來ないだらう。彼女にもまた、私といふ友人程、彼女の健康を憂ひ彼女の精神を氣支つてくれる友人は、恐らく他に一人も無いだらうと思ふ。

『夫れは何故であるか。』といふ難問に對しては、私は『甚だ不思議である。』と答へる以外に答へるべき言葉をもたないのである。

私共二人が、此世の中に生れて來た意義を私共の知らないやうに、私共の友情の續いてゐる意義をも知らないのである。しかし此の不思議な現象は事實である。そして恐らく此の二つの魂は益々強く固く相結ばれて行くであらうと思ふ。

一宗教家の生活心理

いやで堪らない墨染の衣を着せられて、小僧々々と罵られ輕蔑されて成長した貧乏寺の沙彌でも、遂には宗教的に眼覺める時が來る。そして本當に佛の道を說く身の幸福を感謝する時代が來る。お札配りをして乞食のやうな眞似する修驗者の弟子にも、いつしか神佛の靈驗を適確に信ずる時代が來る。何の意味も無く友達に誘はれて、基督教會の門を潜つた青年、たとひ夫れは宣教師から無月謝で英語を學んで見たいといふ、サモシイ心根からであるにしても、いつの間にか神といふ事を知り基督といふ事を知つて熱心な信者になる。夫れらが所謂、僧侶、修驗者、信者といふものであつて、各々熱心に自分の宗教を世界唯一の宗教だと思ふ。私は此の時代を妄信時代と名づけたい。

妄信時代の特長は熱烈である。彼等は自己の宗教を最高至上の權威だと思ふ。刀鋸鼎鑊前に

望むとも其の信を屈しないといふやうな熱心が沸いて來る。それは自己の宗教の爲に心からの法悦を得てゐるからである。貧に居ても迫害に襲はれても、意としないといふ事が其の長所である。

けれども安信時代の宗教者には大きな缺點が伴ふ。夫れは頑迷固陋な點である。勿論頑迷固陋といふ事が惡い意味では無く、夫れが其の宗教者の生命であるから、其所に安信時代の價値があるのである。たとへば、パウロでもペテロでもルーテルでも日蓮でも法然でも、煮ても燒いても食へない頑固さがある。坪内博士の作になる『法難』を讀んで見ても、唯だ其所には挺でも棒でも動かない頑固な僧侶日蓮がどッ坐つてゐる。ルーテル傳を讀んで實に感心はするが最後にヅィングリーの握手を拒む段になると、もう彼れは一個の頑固親爺である。度すべからざる石のやうな男である。しかしこの頑固さは所謂信仰熱に煽られてゐる熱心な宗教者には必要缺くべからざるものである。

エルサレム中心說を信じてゐる猶太人が、今に至るも全世界の政權はエルサレムから出るのだと夢想してゐる。其の安信は安信として、其の信仰の爲めに全世界に散在してゐる猶太人が

どうしても猶太魂を捨てない點は、實に見上げたものである。世の僧侶、牧師、修驗者などには此種の妄信家が多ければ多い程、其の宗派が熾んになり、世論が沸騰するのである、此點に於て宗教家といふものの素質には、皆な頑迷固陋妄信家である事を要求する。

サバけた宗教家があつて、戀も味ひ生も樂しむといふやうでは、所謂宗教家としての價値が零となる。

僧侶にでも、牧師にでも、豫言者にでも、いつしか必ず襲ひ來る理性時代がある。彼等は今までのやうな妄信に滿足が出來なくなる。攘夷論者が日本魂一點張りで押通したやうな工合には行かなくなる。其所で彼等は熱心に勉強をする。牧師は神學を、佛教者は佛典を、神道家は國學を、しかし夫れは大抵無用の學である。基督教の神學といふのは、古來の學者＝今日から見れば全く用の無い＝が、下らない事を議論した其の議論の粗を調べるのである。夫れを立派な言葉で發達史などと言ふが、現代人には過去の發達がどうであらうが、どんな下らない迷路に立入らうが、夫れには何の交渉もない事である。聖書の意味が解れば＝必要な所だけ＝夫れ

で基督教の使命は了るのである。佛教を信じるにしても深甚微妙の教理は我々に要はない。面壁九年しなければ解らない教理なら解らないでもよい。しかし人間には名譽心と智識慾があつて、深い學問を知りたいと思ふ。其時理性といふ言葉に祟られて、種々の理窟を言ひ出す、議論を言ひ出す。そして所謂學者となる。學問と信仰とにどれだけの關係があるか、學問は學問信仰は信仰である。けれども他人よりも少し多く學問をした人は、其の學問の德によつて、世人から崇められ、尊ばれる。そして大家といふものになり。善智識といふものになる。

牧師僧侶が、此の理性時代に入つた時、もはや昔の妄信時代に立返る事は出來ない。彼等の信仰は全く冷却する。此時、彼等は宗教を信ずる人でなくて說く人であり教ふる人である。說く人、教ふる人にはもう猛烈な妄信＝所謂信仰＝のありやう筈はない。彼等は冷靜である。そして不熱心である。

此時代に、彼等には一種の事業熱が襲つて來る。會堂建築、堂塔建立等が夫れである。近頃は學校設立、雜誌發行などが其の一事業となる。彼等は大きな教會や寺院を建て、そして宗教の勢力を外廓に發展したやうに見せかける。大教會大寺院の建立せられた時、既に彼等の心は

冷たい信仰の形態を抱いて呻吟してゐるのである。そして內心の空虛を誤魔化してゐる。

食堂も寺院も建立出來ず、雜誌も發行出來ない連中は、蟲喰ひ本の中に顏を押込んで、さも深さうな偉さうな顏で濟し込んでゐる衒學者となる。

勢力も張れず、學者にもなれない連中は、科學だとか理性に眼覺めたとか、偉さうな事を言つて、しかもパンの爲めに宗教界を脫れ得ずに、不平ばかり言つてゐる小天狗となる。

妄信的でも無く、衒學的でも無く、夫れ等の時代を通過し去つて、尙宗教界に足を停めてゐる連中がある。彼等にはもう些々たる一宗一派の爭ひを好む愚を敢てする程の頑固さが無い。と云つて八萬四千の法門を窺ひ盡した所で、尙ほ脚下の石ころ一つを見ても解し得ない大問題が沸いて來る。いろんな哲學宗教の書を讀破した所で、やはり腹も立つ涙も出る。悲しさ苦しさもある。今更佛法が世界を統一するなんて大きな事も言はれず、基督が天から降つて來るといふやうな事も說かれず、と言つて無宗教にもなり得ず、兎に角宗教界に停つてゐるといふ連中がある。夫れは何の爲めにさうなるのかといふに、何でもない。唯一種の執着である。私は

此の執着心を宗教だと思つてゐる。

私にはもう肩肱張つて他宗を罵つたり自分の功德のみを主張する野卑な利己的な宗教家を尊敬する勇氣が無い。日本が世界を統一するのだとか、猶太が世界を統治するのだとかいふ誇大妄想者を偉大だと思ふ迷信を有しない。彼等の狂熱を狂熱として心理的に可愛くも面白くも見るだけである。楠公も五右衞門も乃木も幸德も禽獸草木悉くこれ佛性を具へた一生物ではないか。佛教基督教、神道天理教、其んな區別を立てゝ相爭ふの愚を憫れむ。

と云つて哲學だの神學だのと騷ぎ廻る事も出來ない、『一時佛在』が紀元何年だらうが、密教發達史が、どうであらうが、大乘が佛說であらうが無からうが私には構ふ所でない、三位一體が二體であらうが、處女降誕がどうだらうが、そんな事もどうでもいゝ。しかし私は基督信者である、基督教牧師の古手である。頗る不熱心な牧師であつた私には、一切の他宗を倒して基督教を全世界の宗教にしようなどといふ、そんな妄信心を抱き得る程の盲目的な信仰心がない。否、日本國民を悉く基督教徒たらしめ得ようとも思はない。私の一家族すら悉く基督信者たらしめ得ようとも思はない。況んや何萬何十萬圓の會堂を建てようとも思はない。日刊新聞

月刊雜誌を發行しようとも思はない。そんなものを出して發表主張する何物をも有しない。然るに私は何故今に基督教徒であるかと云ふに、私は唯一種の執着心で基督教界を離れ得ないのである。私は再び、元の牧師の職でパンを得ようとも思つてゐない。否、牧師になれば、パンを得ることはむづかしい。けれども私は一種の執着心に捉へられて依然として信者である。頗る不得要領な信者である。しかも私は今、自分が本當の信者であり宗教者である事を意識してゐる。

私は頑固な國家主義者でない。しかし私は日本人であり日本に住んでゐるが爲めに、日本の國土に對する執着が深い。假令逆徒と言はれ危險思想家と云はれようとも、私には日本を愛する執着心が牢として拔けないのである。

私には孝養を盡すべき親が無い。隨つて私は孝道とか何とかいふ事を力說しない。けれども私は自分を產んでくれた親を思ふ。だが孝行に對するむづかしい理窟は毫も持たない。唯執着心で有難くも思ひ可愛くも思ふだけである。私は日本に世界に勝れた特殊な優良な點があるから、其の優れた點を愛するのだといふ愛國者を排斥する。そんなものがあつても無くても日本

國民は日本を愛せねばならない筈である。私は私の生れた一家が破滅してしまつても、沖野家といふ者を愛する。私は私の親が馬鹿であつても氣狂ひであつても、やはり夫れを愛して行きたい。どんなに亂暴な無茶な事を私に仕掛けて來ても、私はやはり親を愛したい。夫れには理窟も何もない、唯執着心である。

○其のやうに、妄信を離れ、學說を離れ、パン問題を離れてても、釋迦と離れる事が出來ず、基督を捨てるに忍びないといふ執着心で、宗教を信じてゐる人達が始めて本當の宗教家であると思ふ。

燃ゆるやうな熱烈な青年の絕叫よりも、無學な一老翁が愛する孫の屍骸に對して捧げる一揖は、如何に有難い尊いものであらうか。

これを戀に譬ふるなら、妄進的な宗教家は心中でもしようといふ盲目的な戀愛者である。火のやうな熱烈は愛するに足る。しかし軈て來るべき幻滅の悲哀が其の前に横はつてゐる。時を經れば總てが恥かしい追憶となる。しかし執着時代の宗教に到達した人は老夫婦の戀である。永年連れ添うた二人の中は、今更離れるに離れられない腐れ縁のやうな外觀はあるが、決して

さうではない。深い〳〵執着心が二人の間を堅く繋ぎ合せてゐて、もうどうしても相離るゝ事が出來なくなつてゐる。他に求める事の出來ない愛を互ひに求め合つてゐる。人の知らない推測出來ない親しさを互ひに探つてゐる。

斯る境地に立つ二人の間は本當に美しいものである。こんな意味で祈り、こんな境地に居て道を說く宗教家が現代に最も必要である。法衣の袖を引きめくツて天下國家を說き、高いカラアの中から社會だの勞働問題だのを說く宗教家は、私の最も忌む所である。

執着！　執着！　國を憂ふるも家を思ふも社會改良も悉くは、地上に生きてゐる我等の生に對する執着である。

總ての宗教家が、唯執着心に生きてゐるのだと斯う一口に言へば夫れでいゝ。否宗教家ばかりでなくあらゆる地位階級に居る人が、何とか理窟をつけて見たり、勿體らしい口調でいろんな事を言つて見たりするのも、みんな現在の地位階級を捨てまいとする執着から來るのだと思ふがいゝ。此點に於て宗教家だけなりとも、宜い加減な理窟やコジツケは打捨てゝ、執着心で斯うして宗教家ぶツて居るのです。』と大膽に告白するがよい。夫れが本當に正直な事だ。大

抵な所で釋迦や基督の前に嘘を吐く事を止めようではないか。

安信から離れよ、學者ぶるな、大家ぶるな、熱心ぶるな、警世家ぶるな、今さら古いお經の文句を擔ぎ出したり神學說を唱へたッて、此の世界をどうともなし得るものではない。

年頃

年頃の娘と年頃の息子と、夫れに區別なく等しく憂ふるのが親の義務である。少女の來潮期と、少年の變聲期とに對する親の注意は平等で無ければならない。私は今までに二男四女を育てゝ來た。しかも夫れが皆な自分の血を受けて居ない關係であつたから、冷靜な判斷をなす事が出來たと思ふ。

私の考では、子を憂ふるといふ事は、自分及び自分の祖先を顧るといふ事でなければならない。即ち子供が年頃になるといふ事は、父祖から傳承させられた性質や肉體の善惡何れかを、無遠慮に且つ自然的に表現する時代であるからである。

子供が年頃になつた時、親は其子供の父母である自分達、及び其の祖先を公平に考へてみる必要がある。夫れは大膽に極めて冷靜な觀察でなければならない。

發狂、癲病、酒癖、盜癖、吝嗇、不品行、賭奕癖、さうした人間のもつ恐ろしい悲しいものを、自分達の子供に繼承させてゐるのではないかといふ事を憂ふるのが親の義務である。即ち所謂年頃の子供には、漸く明かに其の鋒鋩を現はし始めるのが此頃であるからである。此時に當つて親たる者は、自分の缺點や恐ろしい遺傳を自分自身に包み隠してはならない。

私は世に珍らしい肥大な小兒を見た。夫れは生後十ヶ月でウドン三杯を食べて尙平然たる小兒であつた。しかし其親は五尺に足らない小さな人であつた。で、不思議に思つて其子の父親といろ〳〵話してみると、小兒の三代前に當る父方の曾祖父が素人相撲の大關であつたといふ事を知つた。

夫れから間も無く、私は自分の家に居る年頃の娘の喉が何となく普通より太いのを發見した私は其娘の祖母が、バセドー氏病である事を知つてゐた＝其娘の母には其病氣が無かつた＝だから直ぐ專門醫に診察して貰つた所、果して甲狀腺腫であると診斷されたので、直ぐ手當を施すと、半年も經たないうちに全治した。しかし其の祖母は恐ろしく太い喉を今にもつてゐる。

酒癖、盜癖、不品行なども親の注意力が精密であつたなら、大抵觀破出來る。自分のもつて

ゐる血の中に、さうしたものが含有されてゐる事を知つた親は、夙に其の對應策を考へて置くべき筈である。私は其の對應策を宗教であると思ふ。禁欲的な嚴格な宗教心を子供時代から與へて置くといふ事は必要な事である。發狂、癲病なども他にいくらも手の盡しようがあると思ふ。けれども親達自身が自身の缺陷を自身にすら秘め隱さうとするやうでは、到底子供達の爲に何事をもなし得るものでは無い。自分の與へたものを、子供達が發揮して行くのであるといふ考へが、親の心に徹底しなければ駄目である。盲目的な愛から深刻な愛に遷るのは此時からである。

年頃の子供をもつた人が、最も注意すべき點は子供の容貌體格と子供の精神的過渡である。此頃の彼等は自己の容貌や體格を非常に氣にするものである。身長の短いものが如何にして丈高くならんかをこひねがひ、むく〳〵と肥え太つたものが如何にして、すんなりと細くなり得るかを苦慮し、色の黑きものが、如何にかして白く見せんと欲する其の心根は悲慘な程憐れなものがある。親たるものが子供に叛かれ、若きものが親から離れ行く原因は、斯うした『あらはに言ひ得ない心の懊み』に同情を與へないからである。言葉に出してしまへば、『何だ、馬

鹿々々しい。』と一口に葬り去られる程の事も、年頃の娘や息子に取つては、夫れが並びなき大事件なのである。だから親たるものは、其點に能く注意してやると同時に、美貌の持主に對しては、其の與へられたる美貌によつて害惡を招かないやうに注意を與へる必要がある。

親讓りのソバカスが眼の下に現はれて來、腋臭が知られて來る頃から、彼等の心は、唯だ面白可笑しい世界に乘出して行くと同時に、絶えざる苦悶が彼等を惱ましつゝあるのである。斯うした時、彼等に嚴格な觀念と、肅然とした敬虔な念慮を與へる事によつてのみ、彼等の心を統率し得るのである。

年頃の娘をもつた親が、彼女の心が、性慾の溪流を逐うて漫りに走るのでは無いかと心配する前に、彼女の肉體と精神とに現はれ來る遺傳の強い〳〵力を考察しなければならない。

年頃の子供が、和服を嫌つたり、洋服を嫌つたりする時、親は其の因つて來る所を精密に考へてやらねばならない。細い腸をもつた娘が、蚊の腸のやうだと道行く人に一口言はれたことが、其娘の死ぬまで洋服を着まいとする決心になるかも知れない。日本の女は足が太いと何の氣なしに生理の教師の言つた言葉をひどく氣にして、洋服を着ないと言ひ出した年頃の娘の其

の體格と其の心根に對して、親たるものは深い思ひやりをもたなければならない。座蒲團のやうな滑稽な帽子を頭に載せて町中を歩かせて平氣でゐる學校の先生達や、支那米袋のやうなものを纏はせて得意がつてゐる校長さん、裏地のやうな木綿の着物を着用させて、解らず屋の儉約家連に媚びる學校經營者達には、『年頃の娘心』といふ事が、ちつとも解らないのである。私はあアいふ服裝を見る度に、年頃の娘の心があんな服裝の爲に、どれだけ押ひしやがれて行くかを思つて、悲しむのである。

年頃の娘、息子をもつ親達よ。御身達にも『年頃の時代』があつたではないか。

國民性の進化

一、武士道の起原

ダアウィンは千八百七十一年に The Decent of man. を書き、ドラモンドは千八百九十九年に The Ascent of man. を書いた。夫れは何れも等しく人類の進化についての著述ではあつたが、當時の基督教信者からは、ダアウィンよりも、ドラモンドの方が歡迎されたのであつた。其の理由にはいろいろの點もあつたであらうが、ダアウィンが人間の皮を一枚づゝ剝いで『これ見ろ、君等は猿猴屬の子孫だぞ！』と言つたに對して、ドラモンドは先づ原始人の住宅が洞穴であつた事から說起して、cave-hut-cottage-house-castle と室の添加から遂に宮殿までの進化を說いて、そして人體も單細胞動物の進化したものだと說明してある。

ダアウィンは科學者であり、ドラモンドは宗教家である。ダアウィンは人間を解剖臺上に横たへ鋭利なるメスを以て、これを截り捌いて行く基礎醫學家で、眼前にあるものは、唯一個の冷い屍骸であつて、夫れが王侯貴人であらうと、絶世の美人であらうと、街路に昏倒した乞丐の徒であらうと、其所に何の選ぶ所がないのであつた。そして先づ一皮を剝いで人間が猿猴から一足だけ進化した證據を示した時、當時の宗教家達は感情的に夫れを嫌忌したのである。何となれば人間は最も近き素性を洗はれる事が一番苦しい嫌な事であるからである。蜂須賀侯の祖先が蜂須賀小六といふ野武士であり、强盜であつたと言つても、蜂須賀家から抗議も來ないであらうが、他の人に對つて『君の父は强盜であつた。』とか『君の母は萬引をした。』とか言つたなら、必ず終生の怨を買ふに相違ない。ドラモンドの書いた The Ascent of man. はさうした人を怒らせない人間の心理を狙つて書いたものである。

私は今、國民性の進化を論ずる最初に當つて、先づ The Ascent of Bushidō. のアウトラインを書いてみる事にした。夫れは自分が解剖學者のやうな緻密な腦髓と、自信ある手腕の無い事を知つてゐるからである。

――だまし討時代――日本の武士道の起源が欺し討にある事は、日本の歴史を見ると否む事が出來ないのである。日本書紀によるも、古事記によるも、日本歴史の劈頭第一に出現する英雄は素盞男尊である。尊は性質が勇敢で殘害を好んだ。八束の髯が胸に垂れるまで天下を治めようとはせず、唯だ日毎に啼泣恚恨を事として、青山を枯山の如く泣枯し、河海をも悉く泣乾かしたばかりか、國内の人民をして多く夭折せしめた程殘傷する所が多かつた。尊は斯うした强暴な性質である上に、彼の一男天忍穗耳命が高天原の皇儲となつたのを狂喜した爲に、國法を無視した亂暴を行うた。しかし其の國法無視たるや、極めて原始的な無邪氣なものであつて天領の御田の水を自分の田へ引いたとか、馬を天領の田圃の中に放ち飼にしたとか、天神を祭る至聖所に放尿したとかいふやうな、言はゞ今日の警察犯處罰令に問はるべき程度のものではあつたらうが、夫れが爲めに天神の天の岩戸隱れといふ大事が起つて、たうとう出雲に逐はれたのであつた。

高天原を逐はれて故郷に歸つた彼は、簸の川上で奇稻田姫を救つて、彼女を奪はんとする惡婚者を征伐したのである。これが恐らく神話化された日本最初の任俠的武士道の根源といふべ

きものであらう。

其時、素盞男尊は此の奪婚者を退治する爲めに、どんな方法を取つたかといふに、何しろ八丘八谷に蔓延してゐる大衆を相手にするのであるから、如何に生れ乍ら八束の髯が胸前まで垂れて居た程の英雄でも、尋常の勝負では行かないといふので、考へ出したのが『だまし討の手』であつた。乃ち彼は八醞酒を八つの酒槽に容れて彼等を歡待した。そして彼等が醉ひつぶれて睡てしまつた所を目がけて、十握の劍を拔き放つて、片ツ端から斬倒したのであつた。そして最後に酋長を殺して其の持つてゐた劍を奪つたのが、草薙劍である。

斯くて日本歴史最初の武道が功を奏したのに鑑みて、此の『だまし討の手』は段々と武人の間に應用されるやうになつた。神武天皇が八十梟帥を國見の丘に擊破つた時、其の餘黨の殲滅を道臣命に勅し給うて、忍坂の邑に大室を作り、其所を大饗宴場として餘黨を招待せしめた。そして盛んに宴饗を設けてほしいまゝに醉はしめて置いて、彼等を頭推井・石推井の劍を拔いて塵殺したのである。そして皇軍は皆な天を仰いで大いに喜び笑つたのである。

景行天皇が日向の高尾の行在所においでになつた時、熊襲を征伐する事を群卿に御謀りにな

つた。そして、『少く軍を興すは賊を滅すに堪へず。多く兵を動すは百姓の害なり。鋒刃の威を籍らずして坐ながら其の國を平げん。』ための策を臣下に求め給うた。そこで一臣は策を獻じて、熊襲梟師の二女、市乾鹿文、市鹿文を欺いて幕下に入れ、陽にこれを寵し給うて、遂に市乾鹿文を家に返らしめ、醇酒を梟師に飲ましめ、其の醉ひつぶれたのを見すまして、父の弓の弦を斷たしめた。そして武士をして梟師を殺さしめたが、元來が皇軍の策略だつたので、市乾鹿文は不幸の罪で刎ねられ、市鹿文は國造の妻として下賜された。

夫れは十二年十一月の事であつたが、二十七年の冬になつて、熊襲取石鹿文が又叛いたので皇子小碓命が征伐の大命を承つた。命は美濃尾張の弓の名人を率ゐて行つたが、なか〳〵尋常の勝負では勝算がないので、素盞男、神武の故智を學び、自ら童女の風をなして賊將に酒を薦め、其の醉ひしれたのを見すまし、隱しもつたる劍を拔いて其の胸を刺した。其時川上梟師取石鹿文が、『いましは誰ぞや』と問うたので、『吾はこれ大足彦忍代別天皇の御子、名をば日本童男とは云ふなり。』と答へられた。其時取石鹿文は刺されながら、『今より後、御子を名づけ奉りて日本武尊と申さん。』と言つた。

寢首を搔かうとした者と、胸に劍を刺されながら、其の刺した相手に名前をつけて置いて死んだ者と、どちらが勇氣ある者であるかといふやうな事は此所に論ずべきではない。しかし素盞男尊の八岐の大蛇退治から始まつた、酒を盛り潰して置いて寢首を搔くといふ事が、原始時代の當時にあつては人倫に背く事でも何でもなく、夫れが立派な武道であり、武士の道であつたのである。

日本の歷史に於ける『日本武』といふ文字は、實に此の川上梟師の最後の言葉から起つたものといはねばならない。隨つて日本武士道の眞の起源も此所にあるといふのが正當であらう。

夫れからずつと年を經た日本書紀二十四卷になると、其所には當時の新思想を代表する佛教信者の蘇我の入鹿と、保守思想を代表する排佛家中臣の鎌足との衝突がある。

時は六月朔日、三韓進調の日である。所は大極殿裏で、至尊は三韓の表文を聽し召し給ふので、大臣入鹿も入つて其の御側に侍し奉つた。此時中臣の鎌足は弓矢を携へ、葛城王は長槍を取つて殿側に隱れてゐたのである。所で入鹿に劍を持たして居ては殺すに都合が惡いといふので、俳優をしてたばかつて劍を解かしめようとすると、入鹿は笑つて劍を俳優に渡して殿內に

入つた。そして彼は陛下の御前で頭と肩と足とを斬られて轉び乍ら、『臣、罪を知らず。乞ふ審察め給へ。』と奏上した。けれども彼は殺されて宮庭の外に引摺り出され、蓆と蔀とを其上に打懸けて、豪雨の中で雨曝しにされたのである。無論此の擧は當時の政界に於て正にあるべき事ではあつたらうが、玉座の前で斯うした殺伐が演じられたといふ事は恐れ多い事であらねばならない。斯うして蘇我閥が滅び藤原閥の起る原因を造つた此の事件にも、やはり『だまし討』の流れが潜んでゐる。

藤原氏が全盛を極めた時、これに對抗して其の權勢を奪つた弓削の道鏡が、朝廷を逐はれた時は、宇佐八幡の宣託ごッことといふものがあつて、あれだけの非望を懷いたと言はれた道鏡は下野藥師寺の別當に流されただけで事が治まつた。そして藤原氏の全盛時代は政略が主となつて武士道らしいものは姿を見せなかつた。

二、武力時代の復活

さうしてゐるうちに再び武力時代が來た。即ち源平の興隆期であつて、徒らに政略のみを弄する輩は長袖者流として卑しまれ、武骨稜々たる武人が實力を握る時代が來たのである。

此時に到つて、武士道はもう『だまし討』の時代ではなくて、『だまし討に甘んずる』時代となつたのである。

平忠盛が、鳥羽上皇に寵せられてゐるのを嫉んだ連中が、豐の明りの節會のどさくさ紛れに彼を闇討にしようとしたのを能く知つてゐた忠盛は、進んで卑怯者の闇討にあふべく、木刀を腰にして參内した。

八幡太郎義家は賊の降將安部宗任を隨へて、夜中唯一人車の中で眠つてゐた。元より義家は宗任が心窃かに報復を企ててゐる事を知つてゐたであらう。けれども平然として眠つてゐた所に武士の偉さがあり、また刀を拔いて車中を覗いては見たが、其の睡つてゐるのを見て、寢首を搔かなかつた所に、宗任が武士としてもつ立派な心を證現したのである。

だまし討をしたり、寢首を搔いたりする事が武士の恥辱だといふやうになつたのは、軈て實力の競爭を意味する事になつたのである。寛治の役に、源氏が金澤の柵を攻めた時、鎌倉權五

郎は自分の眼を射られて、其の矢を抜かない前に自分を射た者を探してこれを射殺したといふ話や、同じ役に清原勢の健兒熊次と、源氏の强者鬼武者とが、兩軍注視の中で一騎打をした事などは實力競爭の著しい事實である。

清原勢が使を新羅三郎義光に遣つて、柵中に臨まれん事を要望して來た時、義光は恐るゝ所なく敵陣に行かうとした。けれども義家の忠告で部下の腰秀方を代理として遣はしたのである。其時秀方は敵將から贈られた賄賂を退けて、『間もなく軍に勝つて分捕りますから。』と言ひ置いて歸つて來た。

斯ういふ事が武士の面目であると云はれるやうになつて以來、全然今までの武士道とは反對の現象を呈するやうになつて來た。

武士たるものは敵から酒宴に招かれた時、夫れを辭退するのは卑怯である。假令敵陣中と雖も苟も招待を受けた以上は、憶せず參上する。と言つて酒宴最中いつも刀の鯉口を寛めて用心ばかりしてゐては興が醒める、だから歌を詠みかけられると返歌を作る。詩を示されると和韻もする。歌つて呉れれば舞りもする。そして事の起つた時は潔く戰つて討死する。殺されても

髻には蘭麝の香が焚きしめてあり、斬られても、顏にはほんのり櫻色を帶びてゐるといふのが武士の面目であり、武士道の幽しさとせられてゐたのである。だから此際には、酒を飲まして置いて殺したり、戸袋の側に隱れてゐて矢庭に斬りつけるなどといふのは、卑怯な所爲とせられたのである。即ち、彼等は『だまし討たれる』事を武士道の花と思つたのである。

だから保元の役に爲朝が夜討の獻策をした時、頼長はこれを鄙人私鬪の事であるとして斥け平治の亂に惡源太義平が平清盛重盛等僅か五十人で熊野詣りをした其の歸途を、安部野に要擊しようとした時も、信頼はこれを許さなかつたのである。

平治の亂に戰ひ敗れた義朝が、長田忠宗の家に落着くや、忠宗は義朝に浴を勸めて風呂場でこれを刺殺した。だから忠宗の所爲は卑怯の甚だしいものとして今に到るまで罵られてゐる。

義經でも、義仲でも、彼等は實力本位で野猪の如くに突進した。山の高きも波の荒れるも彼等の厭ふ所では無かつた。

宇治川の戰ひに、佐々木高綱と梶原景季とが先陣を爭つた時、高綱の言葉に虚僞があつた。景季は欺かれて二番乘になつたが、夫れが爲めに彼の名が輕蔑の的とならなかつたのは、世人

が彼の正直を愛でた爲であらう。あの陰險な景時の子に似合はず、今日まで歴史を讀む者に好感を以て迎へられるのは、彼の眞の武士らしい心を愛づる爲である。之に反して佐々木高綱と言へば、直ぐ一種の狡猾を連想されるのは、彼が古い武士道の模倣者であつたからである。

頼朝が陸奥の平泉に藤原泰衡を攻めた時、泰衡の臣河田二郎は、主人泰衡の首を斬つてこれを獻じた。頼朝は彼を『恩を忘れ利を視る大逆無道の輩』として殺してしまつた。

斯うした思想は源平時代から北條時代を一貫してゐる。北條足利の時代に楠公一家が何故獨り忠臣の名を擅にし得たかといふに、楠公の一族には武士道の氣魄が充溢してゐたからである。彼には新田義貞の如き花々しい戰爭はなかつた。足利尊氏のやうな懸軍長驅の功もなかつた。しかし彼の一族は正直な武遍者としての態度をどこまでも押通してゐた。そこに武士としての彼の面目があつた。

足利氏の一族には護良親王を牢窟の中に屠つたり、舟中に穴を穿つて新田義興を水に沈めたりするやうな陋劣な輩があつた爲に、武士道から言つて足利氏は面目を失してゐるのである。だから足利の末期になると、武士道は又た再び原始時代の『だまし討』に返らうとした。赤松

滿祐が置酒高會で以て將軍義教を欺き殺したことや、松永久秀が將軍義輝の邸門の出來上らざるに乘じて之を襲つて殺したなどが夫れである。義輝の足を不意に後から薙いだ池田某は、罰が當つて終生盲目となつたと言ひ傳へられてゐる。

足利の末期、英雄豪傑が爭ひ起つた時、こゝに『智謀膽略時代』が現出した。

三、智謀膽略時代

儒士を召して黄石公の六韜三略を講ぜしむる事僅か一行にして『よし、もう解つた。』と云つた北條早雲。『不動如山、侵掠如火、其靜如林、其疾如風、』と軍旗に大書せしめた武田信玄霜軍營に滿ち秋氣清き邊、越山能州の景を歌つて大抔を擧げた上杉謙信。一旌悉く相睦び相扶けつゝ事に當つた毛利元就、それらは此時代の最も傑出した武士であつた。

織田信長は天下を統一した。『人生五十年、乃ち夢の如く幻の如し、生あれば斯に死あり、壯士將た何をか恨みん。』と高吟し、暗夜に風雨を冒して今川氏を桶狹に攻滅した彼には、性

格上武士としての多大の缺點があつた。殊に彼が元龜二年九月に、佐久間信盛等の諫言を用ひず、叡山の根本中堂以下廿一社を燒いて、八百の僧徒を焚殺した如きは、餘りに亂暴であつたと云はねばならない。

明智光秀が信長を殺したのは、嘉吉の變に赤松滿祐が將軍義教を殺したのと、其の原因に於て同じものがある。けれども眞の事情に到つては、光秀は滿祐に比して幾十倍の同情され得べき材料があるのみならず、光秀は遙かに信長を凌駕する學識と軍略をもつてゐた。然るに彼が逆賊の模型のやうに言はれてゐるのは何故であらうか。夫れは彼が信長を殺した時の行爲が本當に叛逆其ものゝやうな行爲であつたからである。本當に掌を返すやうに不意に起つて信長を殺した所に非武士道がある。彼が坂本の城に兵三萬を集めたのは信長の命に因つたのである。そして彼は其の軍容を信長に示すのだと揚言して京都に入つたのである。彼の兵士は桂川を渡るまで、敵は本能寺にありとは知らなかつたのである。だから光秀の兵士等は唯だ主君上官の命令を奉じて弦をひき槍を揮つて、三萬の大衆もて僅々一百の兵を鏖殺したのであつた。如何に光秀の心裡に同情すべきものがあつたにしろ、三萬を以て百を討つた其の行爲は、決して賞

讃すべきものではなかつた。これは實に壯漢が赤子の手を捩ぢる程に容易の軍であつたに相違ない。

秀吉と家康とを比するに、秀吉の行爲は遙に家康に勝つて見える。家康の心中には、何となくヂ、ムサイ所があるやうに思はれる。夫れは秀吉の武士であるに對して、家康は政治家であつたからである、秀吉を以て武士の智謀膽略時代最後の頂點であつたとするなら、家康は藤原氏の袖を短くした實際的政治家の開祖といつても差支のない人であつたからである。寧ろ家康よりも、家光吉宗に武士らしい點を見出し得るのである。

家康が天下を治むるに到つて、士農工商の分が截然として別れ、武士といふ特殊階級が地盤を固めてしまつて、武士に非る百姓町人は、彼等の爲めに斬捨御免の非理を、忍ばなければならない制度となつてしまつた。

四、德川時代より明治維新まで

天下は泰平であり、武士は遊んでゐて家祿を食む事のできる世の中では、彼等相互の間には禮節の守るべきもあつたらうし、家祿の沒收せられざる用意も必要であつたらうが、彼等が新に一本の刀劍を購ふ時、夜陰に乘じて、其の斬味を罪なき百姓町人の胴頸に加ふるも、これを罪惡とは思はなかつたのである。

此時に當つて、武士道は所謂浪人の間に移つて行つた趣がある、浪人中には高位高官者の子弟もあり、行雲流水に身を託する眞の漂浪者もあつたらうが、彼等は武者修業をして武を練り膽力を養ふを以て本志とした。其所には武士道の香ひが消え失せなかつた。しかし其時、彼等の武士道は到底一人を敵とする武術の上に置かれてゐた。

浪人中には由比正雪一味のやうなものもあれば、神祇組、鶴鴒組、吉原組、鐵棒組などいふ無賴の徒に類する者もあつた。

當時稗史小說の上に讃美せられた武士は、みな父兄の仇敵を尋ねてこれに復讐したものであつたが、夫れらは赤穗義士と言はれた四十七士の夜討が其の止めを刺したのである。けれどもこれは彼等の復讐其ものよりも、彼等四十七士が臥薪嘗膽の苦を忍び得た事が、賞讃の材料と

なつたのである。

德川三百年の泰平は、遂に武士をして徒らに農、工、商の上に立つて權威を揮はしむる特權階級の如き觀を呈するに到つた時、眞の武士道は町奴の胸中に移らんとした。彼の幡隨院長兵衛と水野某とを比較する時、眞の武士らしい魂が長兵衛にあるといふ事は、誰しも否むを得ないであらう。こゝに於て武士道の『任俠的時代』が來た。

任俠的な武士の魂が町人の心に移植されんとした時、更に百姓町人の中に所謂『義民』といふものが生じて來た、紀州高野の戸谷新右衛門、下總佐倉の佐倉宗五郎などが夫れである。少しく身分を高くして大鹽平八郎の如きも其の一人であつた。

所が此所に一大事件が起つて來た、夫れは吾が日本國がいつまでも東海の孤島として、世界列國から離れて居る事を許されない事情の下に置かれた事である。

斯うなると、眞の武士道は、一家を顧みず、一國一城を顧みずして、國家を思ふの士に移動して行かざるを得なくなつた。日本といふ一國から頭を擡げて世界を見なければならなくなつた。茲に現出したのが『志士』であつて、日本人の武士道は、正に一身一個の魂から一國とい

ふ巨軀に膨張し行かねばならなかつた。林子平、蒲生君平、高山彦九郎　高野長英、渡邊華山は夫れらの大なる志士であつた。藤田東湖も吉田松陰も佐久間象山も夫れであつた。けれども此の志士は所謂武士に迫害され或は斬殺された。殺された志士は日本を世界の日本たらしめようとする人々であつたが、彼等を殺した武士は現狀維持者か、さもなくば頑迷な保守黨であつた。此時武士道は將に盲目たらんとしてゐた。

遂に明治維新は來た。德川幕府は倒壞して武士といふ特殊階級が無くなると同時に、やがて徵兵令が出て、國民全體が國家を守る事になつた。そして祖先以來未だ一度も刀劍を腰にした事の無い百姓町人の倅達が、武士のして來た仕事をする事になつた。昨日まで斬捨御免といふ無法な法律の下に置かれてゐた下層の人間が、一躍して一人前の武士となる事が出來たのである。だから其時、舊武士は此の平民團に對して輕蔑の眼を向けた。しかし西南騷動にも、日清日露の役にも、專門の武士でない此の兵士は能く戰つた。是に於て吾々の間に特殊なる武士といふものゝ必要が無くなると同時に、特殊なる武士道といふものも消え失せたのである。

然らば武士道はどんな形になつて殘つてゐるのであらうか。夫れは驕て人類愛の上に基礎を

置く『人道』でなければならない。

五、外來思想の變遷

歷史家の研究によると、支那の光武帝、中元二年に、日本國を最惠國として『漢ノ倭ノ奴國王ノ印』といふ金印を送つたのは、神武帝卽位後百年以內であるといふ。だから日本には早くから支那の儒敎も陰陽道も入つてゐたに違ひない。此の儒敎は今日に到るまで、國民全體が無條件でこれを受入れてゐ、陰陽道の如きは深く人心に浸み込んでしまつて、なか〳〵除かれさうにもない。假令ば明治五年十一月に陰曆を廢し大陽曆を頒布したに係らず、神宮司廳發行の曆本には大陰曆と共に十干十二支を載せてゐた。近年に至つて陰曆は廢したが、まだ十干十二支は其儘に殘されてゐる。『戊の日に精養軒へ來て吳れ。』の『辰の日の酉の刻に帝國ホテルへ集つてほしいの。』と云つたなら狂人扱ひにせられる世の中に、有名な大新聞の中にも、十干十二支は愚か星廻りまで揭載して讀者の機嫌を取つてゐるものもある。陰曆は科學として曆法

の一つになつてゐるから、夫れを暦に載せるのは差支がないとしても、十干十二支に到つては科學的に何等の根據を認むる事の出來ないものである。今の青年諸君には、十干十二支を正確に讀み得る人は少ないであらう。唯甲乙丙丁までが學業の點數として用ひられるのを知つてゐるだけで、夫れがキノエだやらカノエだやら知らない人が多いだらう。庚申倶樂部だとか、丙午出版社だとかいふ名の原因が陰陽道の名殘りだ位は知つてゐようが、もう夫れは今日の青年とは何の關係もないものとなつてゐる。然るに日本人の實際はまだ〳〵陰陽道を深く信じてゐて、夫れが實際に日用生活の領域を占領してゐる事は驚くべきである。家を建つるに三隣坊だとか鬼門だとかいふ事、結婚葬式に何の日はいけないとか、結婚する男女の年齢の差がどうだとかいふ事は、まだ〳〵案外に強い勢力をもつてゐる。それも其筈で、今を去る僅かに十五年前、明治四十一年十月十三日に明治天皇の御發布になつた詔書に『戊申詔書』といふのがあるまさか明治天皇陛下は、西曆千九百九年に　ツチノエ。サルの年』の年號をお用ひになる筈はない、けれども一般日本人は、あの詔書を戊申詔書として何の怪しむ所が無い。大正十三年を以て始まつた帝都復興事業を『庚子の計畫』などいへば實に可笑しいではないか。

戊申詔書とは其名が何所から起つて來たかといふに、第一次西園寺内閣が倒れて、第二次桂内閣が其後を襲うたのは、神田錦輝館前に赤旗事件の起つた翌月であつた、桂内閣の使命だと自ら感じてゐたものは、彼が第一次内閣を握つてゐた日露戰爭當時から勃興し來つた社會主義無政府主義の掃蕩であつた。で、先づ桂首相は全國々民に勤儉貯蓄の風を養はしめんが爲めに此の詔書の煥發を奏請した。だから此の詔書の發布された當時は一般に勤儉詔書と言つてゐたのであるが、當時の政治家實業家が商工業の萎縮を唱へて、競つて桂内閣の攻擊をし始めたので、いつの間にか帝國大學教授某博士著の『戊申詔書衍義』といふ書物が發行された。其書物は民間では殆ど賣れなかつたが、日本全國の實業、農業、林業の有功者らしいものに、政府から賞與として盛んに配付された。或縣の富豪の如きは、表彰されて其の戊申詔書衍義を貰つたが、身に功績の覺えがないので能く考へてみると、三年前に山へ杉苗を一萬本程植ゑた御褒美だといふ事を知つたといふ話がある。しかも其の富豪は從前何百萬本の杉を植ゑたが、其後他の事業に手を出して、林業の方は數年來怠り勝ちだつたのである。兎に角今日でも明治四十一年の詔書を『ツチノエ・サルの年のみことのり』と呼んでゐるのを怪まない程、國民の頭に浸

み込んだ陰陽道が、古來如何に日本人の心を支配して居たかといふ事は、日本の年號を見ても解る。白雉、朱雀、大寶、和銅、神龜、靈龜、など、皆な白い雉が出たとか、赤い雀が出たとか、黄金が出たとか、自然に鍛錬された鐵が地中から出たとか、眼の玉の赤い龜が出たとかいふ事を、國家の運命に關する一大事として改元された事を見ても明かである。

儒教陰陽道は斯くも容易に受入れられたが、佛教に到つては多少の拒絶者があつた。欽明天皇の十三年十月に朝鮮から佛教經文を献つた時、天皇は歡喜踊躍し給うて『朕昔よりこのかた未だ曾て是の如き微妙の法を聞かず。』と仰せられたが、群臣に對つて、『禮すべきや否や。』と御尋ねになつた其時第一番に反對したのは、當時の軍國主義者、ものゝふの元祖物部家と神道家の元祖中臣家とであつた。此時佛教を受入れようと主張したのが日鮮融和派の蘇我家であつた。物部、中臣兩家が佛教を拒んだのは、『我國家の天下に王たるは、恒に天地社稷百八十の神を以て、春夏秋冬祭拜するを事となす。方今改めて蕃神を拜せば、恐くは國神の怒を致さん。』といふ理由であつた。所謂國粹保守黨の元祖は、此の物部、中臣の二家で、彼等は單に此の外來の思想を毛嫌ひしたので、佛教といふものが果して日本の國民性に適しないものであ

るか否やを究めて、これを忌んだのではなかつた。彼等は毛嫌ひしたばかりで無く、幾度か天皇に強要して、此の新しい外來の宗教を迫害して、其の寺を燒き佛像を堀に投げ込み、尼僧を全裸にして街路上で鞭うたせたりした。僅か十一歳の子供を裸にして、衆人環視の中でひどくひつぱたいたのも彼等であつた。しかし佛教は遂に、宮中から國民全體に信じられるやうになつた。

次に入つて來たのがキリスト教である。キリスト教の入つて來た時は、戰國時代であつたから、日本の思想界に波瀾も何にも捲起さなかつた。千五百五十四年頃ザビエーが、薩摩の島津貴久に會つて傳道を開始すると、直ぐ百人の信者が出來、肥前の平戸では五百人の受洗者があつた。ザビエーが三好長慶、松永久秀等に招かれて大和、堺に傳道した時は、もう二萬の信者があつた。彼が天文二十一年十月十六日に日本を去る時は、周防山口の大内義隆の一藩だけでも三千人の信者があり、將軍義輝も受洗してゐたのである。のみならず永祿九年三月、相州三浦岬へ着いたバテレンの一行は、北條氏康、織田信長に歡待され、天子に拜謁を賜はつた上、京の四條に四町四方の地を賜はり、永祿教會を其所に建て、寺領として近江の甲賀郡、伊吹山

の地を賜はつたのである。

斯うしてキリスト教は瞬く間に、九州では長崎、深堀、大村、有馬、柳川、八代、天草、小倉、博多の諸藩を風靡し、中國では山口、廣島、近畿では京都、大阪、堺、伏見、和歌山、北陸を經て仙臺まで傳道の手は伸びて行つた。

天正十年二月には、大村純忠、有馬晴純の兩侯は、伊藤、千々岩の二少年をローマに送つてグレゴリー十三世に贈物をなさしめた程であつた。

織田の末期から德川の初期にかけて、基督教の輸入した文明が、どれだけ當時の識者をハイカラにしてゐたかといふ事は、當時の彼等が使用してゐた印鑑を見ても明である。黑田如水の如きは『シメオン・ジョスイ』といふ羅馬字の印を使つてゐた。今日の西洋服を着た陸軍大臣や、司令官や、大尉だつて、S.meon. Tanaka. だとか Harol. Amakasu. だとかいふやうな印を造つてゐようとは思はれない。

こんなに日本へ入り込んで來たキリスト教が、何故にぴつたり日本から拒絶せられるに到つたかといふ事は、當時の日本歴史を見る前に、先づ歐洲に於ける宗教史、文學史を見なければ

わからない。

圖は右上から大友宗麟使用の印鑑で、左上は黑田如水、左下は細川忠興の印であるる織田の末期から德川の初期にかけて、キリスト教輸入の文明がどれだけ當時の識者をハイカラにしてゐたか、これを見ても知ることが出來よう。

日本に於てキリスト教が迫害され始めたのは、慶長元年にスペインの商船が土佐沖で難破した時、其貨物の事で日本官吏とスペインの船員との間に紛議を醸したのが最初だと云つてよい。夫れは其の船の水先案内者が、スペインの强大なる國である事を豪語したのが豐臣秀吉の耳に入つて、彼の心を憂ひ初めしめた事が、意味ある迫害の第一歩となつたのであらう。

當時の歐洲には彼の文藝復興運動があつて、其の結果マルチン・ルーテルの宗教改革が起りキリスト舊教のカソリック教は全然立場を失つた時であつた。そこで歐洲の天地では最早策の施すべきものが無くなつたので、俄かに東洋傳道を思ひ立つて、設立されたのが、スペインの貴族ロヨ

ラ（loyola）の設立した傳道會社であつた。

ロヨラの友人にザビエー（xavier）といふ貴族があつた。彼は千五百四十一年にスペインを出發して印度支那を經て日本に來た。そして日本に傳道したのが舊教のカソリック教であつた。そして慶長三年九月に秀吉の死する時まで、四十九年間に五十五萬人の受洗者を得た。だから家康が江戸城を築いた頃は七十五萬を越え、家康が政權を掌握した頃は、老幼合して二百萬人を數ふるに到つたのである。しかも其の信者には豊臣の遺臣にして德川家に取つては最も恐るべき連中が多かつたのである。

是に於て德川家は、自己の政權を擁護する爲めに儒、佛を重用してキリスト教を抑へなければならなかつた。そしてキリスト教を迫害したのであるが、其の當時の世界の事情から觀察するなら、德川氏の取つた迫害には最も自然なものを發見する事が出來る。

當時日本へ基督舊教を擴めて二百萬の信者を作つたものは、實にスペインの宣教師であつた。『スペイン動けば世界震ふ。』といふほど政治的勢力あるスペインの貴族が、日本へ此の宗教を植付けた時、此の大國スペインと犬猿啻ならざるスペインの敵國オランダは、熾んに日本

へ通商交易をなしつゝあつた。

オランダは丁度其當時スペインの領地であつたが、ルーテルの宗教改革運動に刺戟せられ、マルニックスが舊教に反抗して自由思想を鼓吹した結果、國民は遂に獨立運動を起し、四十年間の長き戰爭の結果、千五百七十四年遂にライヂンの包圍軍を破つて獨立し得たのであつた。其のオランダが獨立し得たのは日本の天正二年で信長の殺された翌年である。

斯うした犬と猿との仇敵が同時に日本へ入つて來た。そしてスペインは歐洲の天地で既に失脚した基督舊教を携へ來つて居るのに對して、改革運動を起して舊教の勢力を覆し得たオランダが、自國の財政を膨脹せしめんが爲めに日本と通商してゐる時、スペインは宗教と共に通商をもし初めた。これはオランダに取ては由々しき一大事であつたに相違ない。だからオランダは決して宗教を說かないばかりか、寧ろスペイン人の說く舊教を惡口して、遂に商權を自分の一手に收め得たのである。

此間の消息が明になれば、德川初代の爲政者が、基督教を運んで來たスペイン人を憎み、其の信者を迫害し、珍貴なる品物を運んで來るオランダ人を歡迎したのは當然の事である。そこ

で當時の基督教迫害の言ひぐさはスペインが日本を奪はんとするといふ事に一致してゐる。

將軍家光が政權を握るに及んで、神として日光に祭られてゐた家康は東照大權現となつた。けれども家康の素性を知つてゐるものゝ中、殊に基督教信者は、あの老獪であつた家康を神樣として禮拜しなかつたに相違ない。これは德川氏の政權擁護に對しては實に危險極まる思想であつた。だから家光が極力基督信者を絶滅しようとしたのは當然過ぎる程當然の事で、彼が將軍職となつて十二年間に基督教信者を虐殺する事、實に貳拾八萬の多きに達した。其の結果は遂に寛永十四年の島原の亂となつて、其の大迫害の最後を告げたのである。

爾來、德川氏は佛教を利用し、宗門帳を造つて嚴重に基督教を禁遏してしまつた。夫れは基督教の教義に對して、これが國民性に適しないと云つたのではなく、彼れの政治上の一策であつた事は明である。斯うして安政三年七月廿一日米國軍艦が使節ハルリスを乘せ、伊豆の下田に來つて駐在を請求するまで、凡そ二百二十年間、日本全國に一人の基督信者を見なかつたのである。

所が、米艦の來航と共に再び日本へ持來つた思想は、歐米の政治思想と、基督教新教とであ

つた。

當時の國民は、君主專制の封建政治が倒れて、立憲君主政治を採用するといふ世界的大機運には容易に屈服したが、二百年間絶對に禁遏してあつたキリスト教の再來には、悉く深い嫌惡の情を懷いて居た。

日本は遂に外國と通商する事となり、文久元年六月『百姓町人にて大船を作り又は買受くる事勝手次第なり。』といふ訓令を出すに到つた。そして外國人の入國を許したが、外國人はキリスト教をも共に運び込んで來た。これは當時の爲政者の最も恐るゝ所であつた。德川家光以來極度に壓迫を加へて根絶したので、もうキリスト教徒は日本中に一人も無い筈であつたが、通商の許さるゝと共に、二百年間蟄伏してゐたキリスト教徒が、そろ〳〵頭を擡げ始めたので、爲政者は大いに驚いて、慶應三年三月、先づ九州浦上で、キリスト教信者六十名を捕縛したのであつた。

同年十月、德川幕府は政權を明治天皇に奉還して王政は維新の緒に就いた。けれども最も恐るべきはキリスト信者であるとして、明治二年十一月十三日に、太政官から渡邊昇が汽船十三

艘を艤して長崎に行き、三千七百人の信者を捕縛して、これを諸藩に分配して獄に繋いだのであつた。

そこで英國公使パークスが總代となつて、岩倉右大臣に抗議を申込んだので、明治三年から緩和策を講ずるやうに見せかけたのである。

日本人にキリスト教を徹底的に嫌惡せしめた德川氏の政策は、遂に日本人の國民性をしてワケ無くキリスト教を毛嫌ひせしめるやうにしてしまつた。だから明治維新後、此の國民の嫌惡する宗教を公許しては、政治の運用上甚だ不利益なりとして、切支丹邪宗門禁制の高札は依然として撤去されなかつたのである。所が外國公使は猛烈にキリスト教の邪教に非る事を申込んで來る。のみならず、彼等の論鋒は常に、キリスト教を外國の宗教とし外教なりとするなら、佛教も印度の宗教であつて、同じ外教ではないかといふのであつた。そこで爲政者は、『日本には日本固有の宗教がある。』と言つて持ち出して來たのが神道で、此の神道と共に國粹保存論者が活躍を始めたのであつた。

明治政府最初の事業は、種々の施設もあつたが、此の外來宗教たるキリスト教を防禁するの

策には隨分奇拔な珍らしいものもあつた。日本には日本固有の宗教ありといふ事を現實にする爲には、先づ佛教を排斥しなければならない。で、神祇官を太政官の上に置き、兩部神道を判別して佛を斥け、寺領を沒收し寺内にあつた下馬下乘の札を撤去せしめた。のみならず明治五年には大、中、小教院を設け、大教院を芝增上寺に置き、佛像を撤して天之御中主神、高皇產靈、神皇產靈、天照大神の四柱を祭り、全國の僧侶をして皆な衣冠束帶して拍手を拍ちて祝詞を讀ましめたのであつた。世にこれを廢佛毀釋といつた。

けれども基督教は遂に日本國内に侵入して來た。そして佛教も消えてしまはなかつた。神道も盛にはならなかつた。

明治廿年に憲法を發布せられる時、其の第二十八條に信教の自由を許すの明文あるを知つた國粹論者、殊に神官の一部は、此の憲法發布と同時にキリスト教は公々然として日本に傳道し得る事になるのであるから、忽ちキリスト教の隆盛を來すものと思つたらしい。で、憲法發布式の日、大臣中の基督信者である文部大臣森有禮は、神官の子息西野文太郎の兇刄に斃れた。そして翌廿三年明治天皇は教育勅語を下し給うて、日本國民の教育方針を決定的に指示せられ

たのである。

キリスト教と同時に、當時の爲政者を心配せしめた外來思想は、『自由民權』の思想であつた。これはルソーの民約論スペンサーの代議政體論、佛國革命史に因つて教訓された思想で、當時にあつては隨分過激なものであつた。

昔思へばアメリカの
獨立したのもむしろ旗
こゝらで血の雨降らさねば
自由の土臺は固まらぬ

といふのは彼等が演說會場に掲げた席旗の銘であつた。そして人民にも政治に參與せしめよと叫んだのであるが、夫れは廿三年の帝國議會開會と共に緩和されてしまつた。

キリスト教が國民の意識から、まだ十分な好感をもたれない前に、更に一つの外來思想が日本人の胸中に渦を捲き始めた。夫れは明治卅一年十月に、社會主義研究會といふものが新知識を求むる學者によつて組織された頃からである。

日露戰爭の開かれるや、『社會主義』の思想は油然として日本青年の心頭に降り注がれた。彼等は隨分爲政者から迫害されたが、屈せず戰つてゐるうちに、明治四十年一月十五日に日刊平民新聞といふのが幸德秋水等の手によつて發刊された頃から、當時の主立つた社會主義者の思想は『無政府主義』に遷りつゝあつた。

明治四十一年六月二十二日、神田錦輝館に起つた赤旗事件を以て、日本に於ける前期社會主義運動の一段落と見てよからう。日露開戰當時に彼等が非戰論を主張し初めて、此の事件に到るまで一味徒黨の入獄する者、其の延人員四十九名、入獄日數實に通計三十五年六ヶ月の長きに上つた。

赤旗事件以後、も・社會主義運動は絕滅に歸したと思つてゐたが、豈に圖らんや越えて一年明治四十三年六月一日所謂無政府主義陰謀事件なるものゝ檢擧が始まつて、同年十一月九日豫審決定は恐ろしき罪名の下に二十六人を特別裁判の公判に付せられたのであつた。そして翌四十四年一月廿四日に十二人を死刑に處し十二名を無期懲役に處し二名を有期懲役に處したが、其後直ちに明治天皇は內帑金百五十萬圓を下し賜うて窮民の施藥救療の費に充てられた。これ

が今日の濟生會となつたのである。

時の內閣總理大臣桂太郎公爵は、此の事件後日本國民に對つて復古運動を希望した。そして思想界に多少の變動はあつたが、社會主義も無政府主義も根絶しなかつた。のみならず彼は此の死刑執行後、約半歲にして內閣を西園寺公望に反還して、頭腦を一新せんが爲に翌明治四十五年渡歐の途に上り、先づ露國を訪うたが、遂に西歐に入るを得ずして歸國した。

爾來爲政當局者は、常に危險思想の壓迫に心を注ぎ、日本全國の小學校生徒をして三大節、祈年祭には必ず氏神に參詣せしむる事とし、學校の教科目に倫理の文字を避けて、修身の二字を專用せしめたり、祖先崇拜、家庭制度の美風を奬勵して、國民思想の統一を計つた。

兎角するうちに歐洲戰爭が起り、ロシヤ、ドイツの兩大帝國は倒れて民主國となり、お隣りの淸朝も、いつしか中華民國となつてしまつた。これらが日本人の國民性にどれだけの影響を與へたか、それは現代日本研究の大きな題目である。

屍體から生れた二人

『此の印には賜といふ字と紫といふ字とが彫つてありますネ。』

私は床緣に手を衝いて、掛軸を見詰めながら言つた。

『夫れは師匠が天子樣から紫の法衣を賜はつた紀念の印ぢや。』

老僧は私の顏を見て得意氣に笑つた。

『開山はそんなに偉い人だつたのですか。』

『夫りやア偉かつたサ。何さま產れる時からして、平凡ぢやア無かつたからなア。』

『どんな產れ方をしたのです?』

私は其時此の老僧が、じやうだん半分に、木の股から產れたとか、天から降つて來たとか云つて私を笑はせるだらうと思つてゐたのであつた。けれども老僧の答は意外であつた。

『墓の中から產れて來たんぢや、墓の中から……』

老僧は本當にそれを信じてゐるらしかつたので、私は默つて疑惑の眸を疊の上に落した。

『今の若い人達は、そんな事を非科學的だとか何とか云つて頭からケナしてしまふからいけない。世の中には理外の理といふ事がある。其の理外といふのは、我々に解らない事ではあるが解らないからと云つて、すぐ夫れをけなしてしまふのは善い事ではない。』

老僧は斯う言つて私の質問を待つものゝやうに膝の所を輕くパチパチとたゝいて、小さい咳拂ひを一つした。

『開山樣は何所の墓場で產れたのですか。』

私はやはり『墓場』といふ言葉を使つた。

『墓場ぢやないよ、墓の中の棺桶の中から產れたのぢや！』

『だつて、おッ母さんが產んだのでせう！』

『知れた事サ、お釋迦さんでも耶蘇でも、おッ母アの腹から出た事だけは、お經にでも聖書にでも、明かに書いてあるぢやないか。』

『墓の中からと云ふのはどういふわけで？』

私はたうとう降參して其の物語りを聽かうとする態度を示した。

『此の裏の大きな槲の木の下に五輪の石塔があるだらう？　あれが開山の產れた墓であり、又死んで葬つた墓ぢや。別に不思議でもなんでもない。開山の母御といふのは、難產で亡くなられたのだ。そしてもういよ〳〵こときれたと思つてお葬式をしたのサ。所が、此の裏の墓地へ穴を掘つて其の母御の棺桶を埋めようとして、法源寺の和尙がお經を誦んでゐると、驚くぢやないか、棺桶の中でオギヤア！　と赤ん坊の泣聲がしたのぢや。さア驚いたの驚かないのつて會葬してゐた人達の中には眞蒼くなつて逃げ出したものさへあつた。が、法源寺の和尙はなかなか偉い人だつたから、早速棺の蓋をこぢ開けていきなり其の死骸の首筋を攫んで引出すと、もう赤ん坊は半身だけ此世の風に當つてゐるのだ。で、和尙は後をふりむいて、《鈴丸町のお仙どの！》と大きな聲で呼んだのサ。』

さう云つて老僧は私の顏をジロリと見た。老僧はまた話を續けた。

『鈴丸町のお仙どのといふのは、其頃名高い取上げ婆アさんであつた。和尙が大きな聲で呼ん

だ時、お仙どのは、丁度和尚の肩の所で（ハイ！）と大聲で返事をしたので道の法源寺さんも吃驚して（あんたは私の肩の上に居たのか）ッて洒落を言つたさうな。すると、お仙どのは直ぐ（私の眼は棺の中に居ました）と答へたさうな。』

『夫れはどういふわけです？』

私はもう全く老僧の話に釣込まれてゐた。

『お仙どのは、開山様の母御のお產に傭はれてゐたのぢや。所が難產で母御が亡くなられた時母は亡くなつたが、お腹の赤ん坊は活きてゐるッて言つたのぢやさうな。けれども立會つた醫者は、そんな馬鹿なことはないと云つて、お仙どのの說を容れなかつたのサ。何と言つても片方は名高い御殿醫の大橋樣だから、一家親類も大橋樣の說に贊成して葬儀を取行ふ事にしたのぢや。けれども自信の深いお仙どのは湯灌の時も死骸を棺へ納める時も、棺を墓所に運ぶ時もずッと棺の側に付添うて、耳を澄してゐたのぢや。で、和尚がお經を誦む時も、直ぐ和尚の後の所へ出しやばッて行つて、棺に異狀はないかと覗き込んで居たのぢや。所が棺の中でオギャア！ といふ聲が聞えた時、お仙どのは直ぐ腰紐を解いて夫れを手早く玉襷にかけたのぢや。

そして和尚が、開山の母御を棺から引出した時は、和尚の肩の上から、ちやんと棺の中を覗てゐたのぢやつた。偉い女ぢや、本當に偉い女ぢや。』

老僧は感嘆の太息を吐いて、唾を呑込んだ。

『夫れからどうしたのです？』

私は和尚の話につり込まれて、ねずまひを直しながら訊いた。

『お仙どのは、ちやアんと棺桶の中を見てゐたんぢや。本當に觀てゐたんぢや（夫れ見ろ！ 產れたワイ）と云うて、直ぐ其所で冷い死骸の中から玉のやうな男の兒を取上げて、夢かとばかりに一家親類を驚かしたものサ。悲喜こも〴〵とは本當に此事ぢや。』

『それから、其の子をどうしたのです？』

『そこで、法源寺の和尚が直ぐ其場で興臨と名をつけて、其子をもらつて、自分の跡を嗣がす事にしたのサ。お仙どのは其子を抱いて三つの歳までもらひ乳で育て上げ、御飯が食べられるやうになつた時、法源寺へ引取られたのぢやが、ワケがあつて私の師匠の興臨和尚は自分の產れた此の地所へ此の寺を建立したのぢや。そして入定の後で、オギャと云つて出て來た同じ墓

穴へ、母御の骨と一緒に葬つたのぢや。私は今に能く覺えてゐる。師匠が臨終の時（老衲は土から出て土へ還るんぢや）と言はれた。考へてみれば、昔の人達は皆な偉かつた。

老僧は傍にあつた瓢の煙草入を指尖で引寄せながら、靜に私の顏を眺めたが、其の顏色には虛構も疑惑も無かつたので、私はすつかりその物語りを其儘に受入れて信じてしまつた。それは私が十四の年であつた。

私にさういふ話をした老僧は、もう十二年前に其の師匠の寺で死んでしまつた。興臨和尙の建立したといふ其寺は、老僧の死んだ後で取毀たれて、今は小さい觀音堂が草蓬々の中に、しよんぼり建つてゐるだけである。

大きな槲の樹も、其下の五輪の石塔も殘つては居るが、其所で產れて其所へ葬られたといふ興臨和尙の傳說を語る人も無い。其の和尙が時の帝から紫の法衣を賜はつたといふ事を知つた者も無い。現在其の興臨和尙に敎へられ、其の衣鉢を嗣いだ老僧から直接語り傳へられた私すら、今になつては何だか嘘のやうな話だと思つた其頃の事を夢のやうに追憶するだけである。

私の追憶が、如何に老僧の正直を證明しようと、其時の話ぶりが虛構と疑惑から超越してゐ

た事を確定しようと、やはり今の私は、其の追憶を一種の夢物語、老僧の妄信談として夫れを正史の一頁から葬り去りたいやうに思ふ。

秋の半であつた。じめ〳〵と降り續く雨の日、私は籐椅子に凭れて、懶うさうに庭の面を眺めてゐた、芝生の上には大きな八重櫻の葉が五六枚散つてゐた。垣根には樫や檜の若樹が、夏の過去つたのを喜ぶやうに雨の中に綠の色を濃かに見せてゐた。東の隅に植えた枝垂柳は、もう冬の近づいて來るのを悲しむやうに痩せた腕を露はにして、病葉を根もとにポトリ〳〵と散らしてゐた。

鉢植の桃葉珊瑚が、眞青い實を無數につけて、マダ冬の來ないのを呟くやうに、粗い鋸葉を雨に打たせてゐた。

鉢植の横に眞紅な花を雨に打たせ乍ら咲誇つてゐるサルビヤを、ぢつと見詰めてゐた私は、雨に打たれた紅い花が、桃葉珊瑚の方に紅の滴を流してゐるのでは無いかと思つて、思はず仲上つて其の草の根を覗いてみたが、草芝に溜つてゐる雨水はやはり紅くも青くもなかつた。

私は吾ながら可笑しくなつて、獨り微笑みながら腰を卸してサルビヤの紅い花を見てゐると玄關の戸がゴロ〳〵と開いた。

『御免なさい！』と呼んだ聲を聞いた私は直ぐ、

『打田君か？』と言ひ乍ら玄關の方へ轉ぶやうに駈け出した。

『やァ、お家に居て下さいましたか。やれ〳〵嬉しい。』

打田はもう涙ぐみながら蝙蝠傘を壁に凭せかけて、コトリと帽子を小緣の上に措いた。

『さァ、上り給へ。久し振だつたネ。何年目です？』私も涙ぐみながら言つた。

『丁度九年目ですよ。隨分久しぶりですネ。』打田の聲は潤んでゐた。

私共は手を握り合つたまゝ、暫くぼんやりして立つてゐた。そして『久し振りだッたネ。』と四五回繰返して應接室に入つた。硝子の外では、サルビヤが相變らず紅い花を雨に打たせてゐた。

時計の針はもう十二時を五分過ぎた。二人の話は、どうした機みにか、ピタと跡切れてしま

つた。雨戸の外では、小降りになつた雨脚の音にでも和するかのやうに、蟋蟀の諧調が悲しさう。

『時にネ、君、僕の妻は恐ろしい難產をしたんだよ。』

突如として沈默の撻を排して出て來た打田の言葉は、尠からず私をギョッ！ とせしめた。

『まァ！ そんな事があつたのかい？』

『うん、それは僅か二ヶ月前の事だよ。』

『そして其の赤ちゃんは？』

『可愛さうに死んぢやつた……』

打田は机の上で兩手を組合せて、祈るやうな態度をしながら、

『君 僕は自覺せざる犧牲の尊嚴さを、つく〳〵と知つたよ。』 と云ひながら、涙ぐんだ眼を瞬つた。

『自覺しない犧牲？』と云つた私の言葉は餘りに冷靜であつた。

『結論を先に言つたから不思議に思はれたらうが、實はネ。』 と云つて打田はシミ〳〵と語り

出した。外にはもう雨脚の音がなかつた。

『妻は姙娠八ヶ月で、ひどい熱病に罹つたのだ。夫れが爲に見るかげも無く、げつそり痩せ衰へてしまつたので、臨月になつた時、專門醫に見せると、子供はお腹で達者に育つてゐるが、此のまゝにして置けば母親の生命が危險だと云ふんでせう。で、赤十字病院の院長を傭つて早速手術をやつて貰はうと思ふと、院長も、早產をさせたら、或は子供は育つかも知れないが、斯う衰弱してゐては、母親の方が危いと云ふのです。子供を生かして母親を殺すといふ事は、到底出來る事ではないから、更に山野博士を招聘して診斷して貰つたが、やつぱり同じ事を言つて、手術はしてくれなかつた。と云つて手術をしないで此まゝ產ませても、どうせ母親の身は其の苦痛に堪へないだらうと思つた。手術をしても死ぬ。しなくつても死ぬといふ哀れな運命をもつた妻の顏を見る度に、僕の胸は本當に張裂けるやうだつた。神經過敏になつてゐる妻は、いつの間にか其の結果の豫想に勘づいたと見え、どうせ死ぬのなら、お腹の子供だけ無事に出してやつてほしい。私は其の子の顏を唯ッた一目見て夫れッきり死んでも怨みには思はないから……と云つて、僕に手術を迫るんだ。けれども君、未知數の爲に既知數を捨てる事は出

來ないだらう。で、僕は宜い加減な事を言つて妻の言葉を誤魔化してゐたんだが、彼これするうちに、退引ならぬ日が來たんだ。妻は出產といふ恐ろしい死の關門に面して苦しみ初めたんだ。烈しい陣痛のうちに、妻は、早くお腹の赤ちやんを助けてあげて下さい！　私と一緒に死なすのは可愛さうだ。と叫び通しに叫んで、たうとう產氣づいた二日目の夕方息を引取つてしまつたのだ。』

斯う云つて打田は愁然として其のまゝ言葉を斷つた。

『夫れから？』

暫く經つて私は聲を顫はせながら訊いた。

『妻は主治醫から死の宣告を受けた。そして冷たい暗黑の手は彼女に對して無殘にも死刑の執行をしてしまつた。僕は七年來苦樂を共にして來た妻に訣れて、殘る生涯を唯一人で過さねばならないかと思ふと一種の言ひ知れない憤慨を感じた。其時僕の心には妻の腹の中で、妻と共に冷たくなつてゐる赤ん坊の事なぞは何とも思つてゐなかつた。よし其の子が醫者の巧妙な手術で取出されてあつたにしろ、僕の眼には母の生命を奪つた一個の憎むべき肉塊だと位にしか

思はなかつたでせう。僕は冷くなつた二重の屍を見て、魂を失つた人のやうに、ぼんやりとしてゐたんだ。所が、妻の弟に、檢定試驗でやつとこさ醫者になつた所謂藪醫者があつて、夫れが見舞に來てくれてゐた。主治醫の博士が死亡と認めて立歸つた後で、義弟はボトボト涙を落しながら、一生懸命に妻の屍に聽診器を押當てゝゐた。僕は產みの姉弟だから、思ひ切れないんだと思つて、いぢらしくも思つた。又醫者にも似合はない未練深い男だとも思つた……たうとう葬式の用意に取懸かつた。大工が來て棺を造る。親類の人達が來て騷ぎ出す。僕は堪へられないので、書齋へ閉ぢこもつて机の前にツクネンとして涙ぐんでゐたけれども、時々襖をあけて佛壇の前を見ると、もう白い布を顏にかけられてゐる妻の側で、やはり義弟は聽診器を手にして坐つてゐた。私は義弟を叱り飛ばしてやりたいとも思つた……所が其晩の十一時頃＝息を引取つてから二十三時間目＝に（しめた！　脈が搏ち出したぞ！）と大聲で呼んだのは義弟であつた。（姉さん、姉さん、確かりして下さい……）と呼ぶ聲が耳に入つたとみえ、死んでゐた妻は、あ苦しい……と低い〳〵聲でうめくやうに言つた。さあ僕の一家は俄に上を下への大騷動！　死んだ者が甦つた驚きは、生きた者が死んだ驚きよりも遙に大きい驚きでした。

兎角するうちに子供は死んで產れました。僕は義弟に其の理由を聞いて何とも言へない崇嚴の氣に打たれた。君！　妻は死んだのであつた。けれども子供は母の胎内でマダ生きてゐたんだ。胎兒の小さい肉の中には細い〳〵血管の血が巡つてゐたんだ。そして其の生の力が……小さい者の生命の活動が、もう死んでしまつた筈の母胎に微かな生の力を與へたのだ。朽ちた大木に小さい〳〵あるか無きかの苔の花が咲いてゐるやうに、冷い胎内に生命の微光があつたのだ。そして夫れが母胎を死から生へ逐ひ返したんだ。けれども可哀さうに、其の小さい生命は母體の中で消えてしまつたんだ。つまり此の世の空氣を吸はなかつた。初聲を一口上げ得なかつた其の子は、自分の身を犧牲にして母を救つたのだ（子供だけは無事に產ませられるが、母胎が危い……）と云つた博士の言葉を想ひ出す度に、今達者で働いてゐる妻の顏を、ぢつと見詰めずには居られない。

打田は斯う云つて唇を一文字に結んだ。

『つまり、赤ちやんが犧牲になつて、君の細君を助けたんだネ。』

私はさう言つて深くうなづいた。

『さうだ、其の子は自覺しない犧牲者なんだ。尊いぢやないか其の犧牲は？』

打田は深い感慨に耽つたやうに、眼をしばたゝきながら俯向いてしまつた。

其時私は、ふと三十年前に老僧から聽いた興臨和尚の誕生の事を想ひ出したのであつた。

生きんが爲に

煩悶を訴へて來る人に就いて考へて見ると、其の問題は大別して、生活問題、戀愛問題、家庭問題の三つに區別することが出來る。其のうち戀愛問題、家庭問題は青年の多くが、最も惱まされる問題であつて、其の戀愛問題を決行し、家庭問題を突破する時に當つて先づ彼等を脅かす當面の問題は生活問題である。

戀愛問題に就いては、私はいつも深く立入らないやうにしてゐる。私に云はせれば、他人に訴へて解決を乞ふといふ程度の戀愛は、極く輕いものであつて、本當の戀愛には達してゐないのである。全體思ふ同志が添はれないから死ぬといふ舊式な戀愛は別問題とし、親が許さないから家を脱け出して來たといふやうな人達に對しては、其の戀を遂げた時然らばどうして生活をするかといふことを先づ私は問ふ。男ならば勞働するとか、女ならば看護婦をするとかいふ

やうな堅い自信を有し、假令どんなことがあつても他人に迷惑はかけないといふ決心が無ければならない。戀するとは生きんが爲めであつて、戀の成就とともに、如何にして二人が樂しく生き得るかといふことが最も必要な條件だと私は思つてゐるのである。

私の種々な經驗からすれば、一時非常に熱烈であつた戀愛がすぐに醒める樣なことがある。それは殆んど十中の八九まで、生活問題が原因となつてゐる。生活に脅かされて、終に戀愛の破綻を來すやうになるのである。戀愛の道を辿ると同時に、『生活問題をどうするか。』といふやうな事を考へるのは如何にも打算的な樣に思はれるかも知れないが、決してさうではない。單に戀しい、いとしいといふだけのことでは、あまりにロマンティックな、近松時代の舊式な戀の致方であつて、近代的の戀愛は、飽くまでも一緒に生きようといふことでなければならない。

しかし若しも其の人達が、死んでもよいからどうしても相愛するといふのであるならば、私は強いて其人達を私自身の經驗の範圍内に引入れようとはしない。私達は只これを憐れみ、行手が危險であると知りながらも、これは如何ともすることの出來ない大きな強い力と認めなけ

ればならない。其の時には全世界の博士、宗教家が集つて倫理道德を說いても、二人の間の盲目的に信じて行く力に對しては、何の權威もないといふことを能く知るとことが、最大の同情であると思ふ。現代人の同情は、單にかはいさうだといふことや、或は甘い涙を流す事ではない、浮いた戀愛問題をもつて相談に來るやうな人達は不眞面目であるが、本當に他人に訴へて理解して貰ひたひといふ人の心理に對しては、同情しなければならない。彼等は、其の解決をして貰ふよりは、寧ろ自分達の心を、知つて呉れる人に、ぶツかりたいといふ希望があるのである。

或日の朝一人の青年が訪ねて來た。其の青年は非常に顏色が惡く、目がつりあがつて居た。二人はテーブルを中にして暫らく沈默に耽つて居たが、『何ですか』と私が靜かに聞くと、『自分は戀に破れたので、どうしても生きて行く望はありません。』と青年は語り出した。青年は其の朝も死なうと決心して家を出て、線路の側に立ち、電車の來る度に今度こそ、今度こそ……と思つたが、どうしても線路へ躍り込む事は出來なかつた。其の時ふとポケツトに手を入れた

ら一枚の名刺があつた。其れは其の青年が煩悶し初めた時、私に會つて見よといつて、私の知人が青年に與へた紹介狀代りであつた。けれども青年は私のところへ行つてもどうせ說敎する位なものだらうと思つて、別に訪ねる氣にもならずにゐたのであつたが、其の時不圖私を訪ねて見る氣になつたのであるといふことを語つた。

私はそれから、くはしい事情を青年からきいて見た。しかし私はそれに對して、一言の批評もしなかつた。ただ私は、『其の戀はどうしても成立しない。あなたが若し其の戀を捨てないなら、いつまでも失意の儘で痛みを負ひながら苦しんで行かなければならない。』といふことだけを斷言した。そして私は只其の事實に對して深く同情した。同情といふのは其の青年の心理狀態をよく知ることが出來たことであつた。其の時青年はいつた。私は今まで何處へ行つて訴へて見ても、單につまらないとか馬鹿だとかいふ批評ばかりをうけた。自分でもそれはよくわかつて居た。百も承知であつた。けれども私の求めて居るのは、自分の心を理解してくれる人であつた。自分がつまり死ねないのは、世の中で唯一人でもいいから、自分を理解してくれる人を得てから死にたいと思ふたからであつた。

そこで私は言つた。『私はあなたの煩悶を解決することも又其の無理な戀愛を幫助することも出來ない。しかし氣持だけは理解して居るから死ぬといふことを考へたなら、私のところに遊びに來てくれ。其の時私は相談相手にはなれないかも知れないが、話相手にはならう。』

ところが其の結果として、其の青年は死ぬことを思ひ止つて、一生懸命に勉强するやうになつた。

こんな場合に、つく〴〵思ふことは他人の煩悶に對して、單に說敎したり又は誡めたりすることは、全く何の役にも立つものでない。同情するより外に何もないのである。

第二の家庭問題といふのは、要するに家庭組織から起るところの煩悶であつて、これは、日本の家庭組織が根本的に改革せられない限りはいつまでも續くものと見なければならない。よくいふことであるが、西洋には家庭があつて家庭組織がない。日本には家庭組織があつて家庭がない。戶主が專制君主で其の意見が絕對に重んぜられて居る間は、新時代の敎育を受けてゐる者が、それに對して煩悶を抱くに至るのは當然のことといはなければなるまい。

日本の家庭組織は、德川時代から何等の變化もしてゐない。女學校を卒業した人が、舊式な家庭に嫁入つた場合、彼女が女學校で習つた事がどれだけ役に立つか殆ど疑問である。小學校以來習つた音樂が、如何に立派なアルトであらうがベースであらうが、そんなものは、舊式な家庭では全然認められない。やはり生花茶の湯行儀作法を喧しく言はれる。だから賢母良妻主義の女學校ではダンスや唱歌の代りに按摩やマッサージを教へたいといふやうな事を唱へ出すのである。日本には神代から陰陽道といふものが深く國民生活の中に織込まれて居る。如何に新しい時代の男女でも、さて結婚といふことになれば、兩親から第一にきかれるのは年齢の差である。かゝる難關をくぐらない結婚といふものは、殆んどないといつてもよい。從つて結婚した時に、其の嫁に要求する智識は、音樂でもなく、語學でもなく、着物は北向に干してはいけないとか、今日は何の日であるから着物を裁つてはいけないとか、何の方角が鬼門であるから、何々をしてはいけないとかいふやうなことである。

かかる舊式な人の存在する世の中に、新しい教育をうけた者が家庭の人となつて調和を得ないことは當然なことであつて、若し調和が出來るといふならば、それは何れかが心を僞つて居

ることになる。そして、最もいつはりの多い家庭が、最も平和な家庭となるのである。故に家庭問題から來るところの煩悶には唯だ時の到るを待つといふより外に施すべき策がないといつてもよいのである。我々が斯ういふ問題を見たり聞いたりする時の思ひは、恰も誤つた手術をうけた患者が、死の境に陷つて行くのを、醫學上の知識ある者が、ぢつと見守つて居ると同じ氣持であつて、悲しみ乍らも單にこれを傍觀するより外に致方がない。禍根の何處にあるかを我々はよく知つて居る。けれども時節の到來しない今の時に當つては、唯だそれをどうともすることも出來ない立場に、我々は置かれて居るのである。

併しすべてのことは自然に時代の推移が解決を與へる。例へば日清戰爭の時には、名譽の戰死を遂げた軍人の未亡人は、十八九の若い身で切髮になつた人が多かつた。併し十年後の日露戰爭の時にはそれが殆んどなかつた。十年間に良婦は二夫に見えずといふ支那流の古い思想がとれてしまつた。のみならず最近に至つては、再婚といふ事が別の意味で問題にされるやうになつた。夫れは昔の儒教流の考へ方から喧しく言ふのではなくて、新しい意味の倫理的見解からである。卽ち眞の戀愛本位からでなくて、單に家庭の爲めとか子供の爲めとかいふ再婚はい

けないといふのであつた、明かに婦人の人格を認めたところの進歩した議論である。

それならば、日本の家庭組織の問題を、解決する法があるかといふに、法律上戸主を廢せよといふやうなことは、甚だ愚なことであらうと思ふ、然らば如何にすればいゝか、少しく極端な議論であるかも知れないが、それは家庭の中に中心を置かないやうにしたいと思ふのである昔の建築法は家の中に大黒柱といふものがあり、それを中心として家を建てた。併し一朝其大黒柱一本が、白蟻にでも食まれる樣な場合には、家全體が一時に倒れることになる。

日本の家庭内の悲劇は、大黒柱の中心人物が死んだ爲めに生み出されるものが非常に多い。だから此の悲劇を少くするのは、家庭内に主人とか戸主とかいふ人が、すべてのことの中心とならないで、五人とか七人とかの家族の人々が、それ〴〵が皆柱であり、障子であり、又襖であつて欲しいのである。さうした場合には、それ〴〵の人が何れも皆同等な價値を有することになるのである。故に家庭内の人々は、唯一人の人に賴るやうなことがなく、妻は平常から、若し萬一の場合には、自分は多くの子供を抱へて、どうするといふ決心を持つて居ることが必

要になつて來る。其の必要條件は即ち、妻が自ら働いて生活をするといふことを心得て置くことである。又子供に對しては、家庭の收入はこれだけであり、支出もこれだけであると正直に示しておいて、子供等が女學校なり中學校に通つて居ても、若し家庭内に不幸が起つた時は、其の學校を中止して大工の弟子になるとか、看護婦になるとか、一日も家にあつてぐず〴〵してはゐられないといふことを、よく云ひきかして置く必要がある。然る場合には、子供は學校が一年一年進む以外に、又學年の成績以外に、自らが此處まで無事に進むことが出來たといふ幸福を知つて、一種の感謝と喜びとを感ずることになるのである。

大黒柱式の建築が昔の家庭ならば、今日の家庭は講堂式でなければならない。あらゆる柱が平等の力を有し、假令其のうちの一二本が朽ちても家全體を倒さずして取換へることが出來る其處に夫とか妻とかが無くてすむならばすまし、是非必要ならば新しくすればよい。かくの如き民主的精神を以つて、家庭を改造して行くより外に方法がないのである。かゝる精神によつて育てられた人にして、初めて戀をする時も、自ら生活を立てゝ人の厄介にならないだけの方

法を講ずる筈である。さういふ家庭が多くなつて行くことに依つて、生活問題、戀愛問題も漸漸に解決することが出來るものと思ふ。

第三の生活問題といふものの定義は、私は單にパンを得る道だと狹義に解釋したくはない。生活といふことの中には、戀愛問題もあれば、パン問題もあり、藝術の問題もあつて、要するに如何にして我々は幸福に生活するかといふ總體問題であると思ふ。百萬圓の財産はあつても其の人に幸福な家庭がなく美はしい趣味がなかつたならば、憐れな人に違ひない。どんな貴族でも、强制結婚で愛のない生活をするならば、夫婦生活の一要素を缺いたものである。生活問題は今日の勞働問題、社會問題が完全に解決されても、尙ほ永遠に地上の天國の來るまでは繼續して行く問題である。故に此の問題は永遠に改良に改良を加へて行かなければならない問題であると思ふ。

現代の生活問題を、どういふ風に處置をとつたらよいかといふに、今日のやうにあらゆる問題が複雜になり、まち〳〵になつて居る日本の生活問題は、我々が勝手に極めた自分の律法を

以て、勝手に批判することは出來ない。やはり生活問題に對して深い研究をなし、現代人の生活に對する惱みを、深い同情を以つて見て行くより外に方法はない。

要するに現代日本人の有する煩悶は、戀愛、家庭、生活等の解決されない問題を縱糸にし、新しく襲ふて來る時代思潮に觸れた人達の、不滿と憧憬とを横糸にして織りなされたものである。だからそれを知つて、それに對應する方策を講じなければならないのである。

我々はもう何々主義、何々策と言ふ言葉に、あまりに中毒しすぎてゐる。國民全體が高ぶつた心を打捨てゝ、本當に互ひに助け合ふやうにしなければならない。自らのみを高うし清くする高踏的な考へを基本として、どんなに改良を唱へても、改善を叫んでも駄目である。高所に居て他人を批評的に觀るといふ事よりも、先づ總ての人が自ら煩悶し自ら苦しまねばならない此の社會を如何にすべきかといふ事について、煩悶もなく苦痛もない人が、煩悶を解決しようとして出來るものではない。

私は思ふ。今に來るべきは、大なる煩悶と苦痛の時代である。ユダヤ人が總て繩目の愧を受けて眞の愛國心が起つたやうに、日本人の上にも、各自がどうしても自ら解決したければなら

ない大苦難が墜ちて來た日に、總ての問題は解決されよう。今の日本人は苦しんで居る。しかし疲れてゐる。高ぶつてゐる。一切が悔改めなければならない時が來る！

二期の外來思想

明治初年の外來思想

安政六年五月二日米國からリギンスといふ宣教師が渡來したのを初めとして、ヘボン、フルベッキ、ブラオンなどといふ醫者や學者が、同年中に續々渡來して、八年間傳道をした結果、明治元年五月に横濱で粟津道明、鈴木貫一の兩名が米國宣教師のバラから洗禮を受け、翌二年二月には小川義綏以下三人が、宣教師タムソンから受洗した。

三百年來絶對禁止であつた基督教が、未だ禁制の制札を撤去しない前に、公然受洗したといふ事は當時に在つては實に驚くべき事であつた。